

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第176集

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

北上地区広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第176集
 岩崎台地遺跡群 正誤表

	誤	正
P 82	G- <u>60</u> -1住所跡	G- <u>61</u> -1住居跡
P 132	<u>5</u> つに分類	<u>6</u> つに分類
P 138	齊藤淳也	斎藤淳他
P 139	和賀町教育委員	和賀町教育委員会

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

北上地区広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、7,000カ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に残していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置を取ってまいりました。

本報告書の岩崎台地遺跡群は、北上市和賀町の夏油川沿いの河岸段丘に立地し、昭和63年から3カ年の発掘調査によって平安時代の集落跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡は段丘の縁辺部に立地し、溝や土坑とともに集落景観の一端を知ることができる資料であります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に御協力、御援助を賜りました岩手県農政部花巻土地改良事業所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成3年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 巖

例 言

1. 本発掘調査報告書は、岩手県北上市和賀町岩崎第13地割29-1ほかに所在する岩崎台地遺跡群の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、北上地区の広域農道整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県農政部長花巻土地改良事業所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳に記載されている遺跡番号はME64-2360、調査略号はISD-88、ISD-89、ISD-90である。
4. 調査期間・調査面積・調査担当者は、次のとおりである。
 - 第1次：昭和63年6月1日～7月31日、5,300㎡、中川重紀、遠藤 修
 - 第2次：平成元年4月11日～6月30日、4,723㎡、遠藤 修、濱田 宏、高橋 堅
 - 第3次：平成2年4月13日～8月10日、5,024㎡、遠藤 修、菅 常久
5. 整理期間と整理担当者は、次のとおりである。
 - 第1次：昭和63年12月1日～昭和64年1月31日、遠藤 修
 - 第2次：平成元年11月1日～平成2年3月31日、遠藤 修
 - 第3次：平成2年11月1日～平成3年3月31日、遠藤 修、菅 常久
6. 下記の項目の分析・鑑定は、次の方々・機関に依頼した。(敬称略)
 - (1) 火山灰分析……………三辻 利一(奈良教育大学)
 - (2) 貝殻同定……………戸羽 利雄(黒沢尻工業高校)
 - (3) 石質鑑定……………佐藤 二郎(地質コンサルタント)
 - (4) 樹種鑑定……………早坂松次郎(岩手県木炭協会)
7. 野外調査・室内整理に際して、以下の方々から御教示・御協力をいただいた。

青藤尚巳・沼山源喜治・本堂寿一・稲野裕介(北上市教育委員会)、高橋文明(旧江釣子村教育委員会)、小田島恭二・浅田智世(旧和賀町教育委員会)、桐生正一・高橋亜貴子(滝沢村教育委員会)
8. 野外調査では、和田義喜氏をはじめとする地元の方々に従事していただいた。
9. 調査にかかわる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の位置と環境	4
1. 遺跡の位置	4
2. 地理的環境	4
3. 和賀川下流域の地形	4
4. 地質	5
5. 周辺の遺跡	6
III. 調査と室内整理の方法	11
1. 野外調査方法	11
2. 室内整理方法	13
IV. 調査の結果	17
1. 遺構と伴出遺物	17
(1) 竪穴住居跡、住居跡状遺構	17
(2) 円形周溝跡、方形周溝跡	89
(3) 土坑	91
(4) 陥し穴状遺構	102
(5) 掘立柱建物跡	102
(6) 焼土遺構	106
(7) 炭窯	111
(8) 塚	111
(9) 溝跡	114
2. 遺構外の出土遺物	121
V. まとめ	128
1. 竪穴住居跡	128
2. ピット	131
3. 焼土遺構	131
4. 出土遺物(古代)	132
5. 出土遺物群の帰属と時期	135

付編1	岩崎台地遺跡群出土火山灰の蛍光X線分析	140
付編2	岩崎台地遺跡群出土鉄滓の金属学的解析について	143
付編3	岩崎台地遺跡群出土鉄器に関する金属学的解析について	145

図目次

図1.	岩手県図にみる遺跡の位置	1
図2.	遺跡位置図	2
図3.	周辺の遺跡	9
図4.	遺跡周辺の地形図	12
図5.	遺構配置図	15
図6.	主な出土坪、竈と出土遺構	136

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	8
第2表	古代住居跡一覧表(1)	129
第3表	古代住居跡一覧表(2)	130
第4表	ピット一覧表	131
第5表	焼土一覧表	131
第6表	遺構別 出土遺物(1)	133
第7表	遺構別 出土遺物(2)	134

圖版目次

第1圖	H-62-a 住居跡	17
第2圖	H-62-a 住居跡出土遺物	18
第3圖	C-3 住居跡	19
第4圖	C-3 住居跡出土遺物(1)	20
第5圖	C-3 住居跡出土遺物(2)	21
第6圖	D-6 住居跡狀遺構	22
第7圖	D-6 住居跡狀遺構出土遺物	23
第8圖	D-10住居跡	24
第9圖	D-10住居跡出土遺物	25
第10圖	D-11住居跡	27
第11圖	D-11住居跡狀遺構	28
第12圖	D-11住居跡、D-11住居跡狀遺構出土遺物	29
第13圖	D-15住居跡	30
第14圖	D-15住居跡出土遺物	31
第15圖	C-24住居跡狀遺構	32
第16圖	B-36住居跡	33
第17圖	B-36住居跡出土遺物	34
第18圖	B-41-c 住居跡	35
第19圖	B-41-c 住居跡出土遺物(1)	36
第20圖	B-41-c 住居跡出土遺物(2)	37
第21圖	B-41-c 住居跡出土遺物(3)	38
第22圖	B-41-c 住居跡出土遺物(4)	39
第23圖	B-41-h 住居跡	41
第24圖	B-41-h 住居跡出土遺物	42
第25圖	B-43住居跡	43
第26圖	B-43住居跡出土遺物	44
第27圖	B-44-f 住居跡	46
第28圖	B-44-f 住居跡出土遺物	47
第29圖	B-44-g 住居跡	48
第30圖	B-44-g 住居跡出土遺物	49
第31圖	B-44-j 住居跡	50
第32圖	B-44-j 住居跡出土遺物	51
第33圖	G-59-o 住居跡	52
第34圖	G-59-o 住居跡出土遺物	53

第35図	G-60-h 住居跡	55
第36図	G-60-h 住居跡出土遺物	56
第37図	G-60-i 住居跡	58
第38図	G-60-i 住居跡出土遺物	59
第39図	G-60-m 住居跡(1)	60
第40図	G-60-m 住居跡(2)	61
第41図	G-60-m 住居跡出土遺物(1)	62
第42図	G-60-m 住居跡出土遺物(2)	63
第43図	G-60-p 住居跡(1)	65
第44図	G-60-p 住居跡(2)	66
第45図	G-60-p 住居跡出土遺物	66
第46図	H-60-c 住居跡(1)	67
第47図	H-60-c 住居跡(2)	68
第48図	H-60-c 住居跡出土遺物(1)	69
第49図	H-60-c 住居跡出土遺物(2)	70
第50図	H-60-l 住居跡	71
第51図	G-61-l 住居跡(1)	73
第52図	G-61-l 住居跡(2)	74
第53図	G-61-l 住居跡出土遺物(1)	75
第54図	G-61-l 住居跡出土遺物(2)	76
第55図	G-61-l 住居跡出土遺物(3)	77
第56図	G-61-l 住居跡出土遺物(4)	78
第57図	H-61-b 住居跡、出土遺物	79
第58図	H-61-h 住居跡	81
第59図	H-61-h 住居跡出土遺物	82
第60図	G-62-o 住居跡(1)	83
第61図	G-62-o 住居跡(2)	84
第62図	G-62-o 住居跡出土遺物(1)	85
第63図	G-62-o 住居跡出土遺物(2)	86
第64図	G-62-o 住居跡出土遺物(3)	87
第65図	G-62-o 住居跡出土遺物(4)	88
第66図	A-37円形周溝跡	89
第67図	G-59-g 方形周溝跡	90
第68図	C-10、C-11、C-17土坑	92
第69図	B-36、B-43土坑	93
第70図	H-59-d、G-60-k、G-60-o、G-60-p 土坑	95

第71図	G-60-m、G-61-i、H-61-b、G-62-p 土坑	99
第72図	G-63-i、H-63-b、H-63-l、H-64-i 土坑	100
第73図	土坑出土遺物	101
第74図	C-18、H-63-d 陥し穴状遺構	103
第75図	G-61-o 掘立柱建物跡	104
第76図	G-62-l 掘立柱建物跡	105
第77図	A-37、B-44-e、B-44-k 焼土遺構、出土遺物	107
第78図	H-62-a、H-63-b 焼土遺構	108
第79図	H-62-a 焼土遺構出土遺物	109
第80図	H-63-b 焼土遺構出土遺物	110
第81図	B-45 炭窯跡	111
第82図	A-39 塚	112
第83図	A-39 塚出土遺物	113
第84図	C-11、C-17、C-18 溝跡	115
第85図	C-19 溝跡	116
第86図	B-31-b、B-31-c 溝跡	117
第87図	B-32、B-35 溝跡	118
第88図	B-42 溝跡	119
第89図	H-59-b、H-60-b 溝跡	120
第90図	遺構外 (B-40) 出土遺物	121
第91図	遺構外 (C調査区) 出土遺物	122
第92図	遺構外 (C-26) 出土遺物	123
第93図	遺構外 (C調査区) 出土遺物	124
第94図	遺構外出土遺物 (石器 1)	125
第95図	遺構外出土遺物 (石器 2)	126

写真図版目次

写真図版 1	空中写真(1)	151
写真図版 2	平成元年度調査区	152
写真図版 3	空中写真(2)	153
写真図版 4	遠景、土層断面	154
写真図版 5	H-62-a 住居跡	155
写真図版 6	C-3 住居跡	156
写真図版 7	D-6 住居跡状遺構	157
写真図版 8	D-10 住居跡	158
写真図版 9	D-11 住居跡	159
写真図版 10	D-11 住居跡状遺構	160
写真図版 11	D-15 住居跡	161
写真図版 12	C-24 住居跡状遺構	162
写真図版 13	B-36 住居跡	163
写真図版 14	B-41-c 住居跡	164
写真図版 15	B-41-h 住居跡	165
写真図版 16	B-43 住居跡	166
写真図版 17	B-44-f 住居跡	167
写真図版 18	B-44-g 住居跡	168
写真図版 19	B-44-j 住居跡	169
写真図版 20	G-59-o 住居跡	170
写真図版 21	G-60-h 住居跡	171
写真図版 22	G-60-i 住居跡、G-60-m 住居跡(1)	172
写真図版 23	G-60-m 住居跡(2)	173
写真図版 24	G-60-p 住居跡	174
写真図版 25	H-60-c 住居跡	175
写真図版 26	H-60-l 住居跡	176
写真図版 27	G-61-l 住居跡	177
写真図版 28	H-61-b 住居跡	178
写真図版 29	H-61-h 住居跡	179
写真図版 30	G-62-o 住居跡	180
写真図版 31	円形周溝跡、方形周溝跡	181
写真図版 32	土坑(1)	182
写真図版 33	土坑(2)	183
写真図版 34	土坑(3)	184

写真図版35	土坑(4)、陥し穴状遺構	185
写真図版36	掘立柱建物跡、焼土(1)	186
写真図版37	焼土(2)、炭窯	187
写真図版38	A-39塚	188
写真図版39	溝(1)	189
写真図版40	溝(2)	190
写真図版41	溝(3)	191
写真図版42	H-62-a 住居跡 (遺物)	192
写真図版43	C-3 住居跡 (遺物)	193
写真図版44	D-6 住居跡状遺構、D-10住居跡 (遺物)	194
写真図版45	D-11住居跡、D-11住居跡状遺構、D-15住居跡 (遺物)	195
写真図版46	B-36住居跡 (遺物)	196
写真図版47	B-41-c 住居跡 (遺物 1)	197
写真図版48	B-41-c 住居跡 (遺物 2)	198
写真図版49	B-41-c 住居跡 (遺物 3)	199
写真図版50	B-41-c 住居跡 (遺物 4)	200
写真図版51	B-41-h 住居跡 (遺物)	201
写真図版52	B-43住居跡 (遺物)	202
写真図版53	B-44-f 住居跡 (遺物)	203
写真図版54	B-44-g 住居跡 (遺物)	204
写真図版55	B-44-j 住居跡 (遺物)	205
写真図版56	G-59-p 住居跡、G-60-h 住居跡 (遺物)	206
写真図版57	G-60-h 住居跡、G-60-i 住居跡、 G-60-m 住居跡 (遺物)	207
写真図版58	G-60-m 住居跡、G-60-p 住居跡 (遺物)	208
写真図版59	H-60-c 住居跡 (遺物)	209
写真図版60	G-61-1 住居跡 (遺物 1)	210
写真図版61	G-61-1 住居跡 (遺物 2)	211
写真図版62	H-60-l 住居跡、H-61-h 住居跡、H-61-b 住居跡 G-62-o 住居跡 (遺物 1)	212
写真図版63	G-62-o 住居跡 (遺物 2)	213
写真図版64	G-62-o 住居跡 (遺物 3)	214
写真図版65	方形周溝跡・土坑 (遺物)	215
写真図版66	土坑 (遺物)	216
写真図版67	A-37焼土、B-44-e 焼土、B-44-k 焼土 (遺物)	217
写真図版68	H-62-a 焼土 (遺物)	218

写真図版69	H-63-b 焼土、B-45 炭窯 (遺物)	219
写真図版70	A-39 塚、B-35 溝、H-60-b 溝 (遺物)	220
写真図版71	遺構外 (土器 1)	221
写真図版72	遺構外 (土器 2)	222
写真図版73	遺構外 (土器 3)	223
写真図版74	遺構外 (石器 1)	224
写真図版75	遺構外 (石器 2)	225

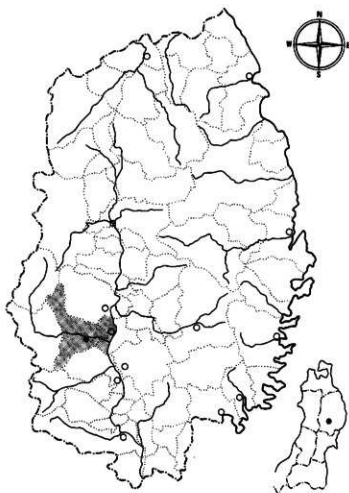


図1 岩手県図にみる遺跡の位置



図2 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

北上地区広域農道整備事業は農業経営の向上等を目的に昭和58年度から着工され、平成10年度に完工の予定である。道路は金ヶ崎町上寒田清水付近を起点とし、北上市和賀町岩崎付近で東北横断自動車道秋田線と立体交差し、新平を経て北上流通センターに至る総延長11km余りの路線である。

この工事に関連する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、岩手県教育委員会が分布調査を行っており、岩手県農政部と協議を重ねられ、工事により消滅する遺跡について事前の発掘調査を実施することとした。事業について、岩手県教育委員会は花巻土地改良事業所長あてに照会し、回答を受けた後に発掘調査を岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは下記の委託契約により調査に着手することとなった。着手後平成2年度事業について調査面積を4,222㎡から5,024㎡に変更した。

なお、中心杭のNo92～No103の間は日本道路公団からの受託事業として、当埋蔵文化財センターが平成元年度～3年度に調査実施している。

事業年度	委託契約年月日	契約面積	調査範囲(中心杭番号)
昭和63年度	63年5月31日	5,300㎡	No43～No66
平成元年度	元年4月1日	4,723㎡	No66～No92
平成2年度	2年4月1日	4,222㎡	No103～No116
	2年7月2日	5,024㎡	

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

本遺跡の所在する北上市和賀町は岩手県の南西部に位置し、北は花巻市、東は東和町、南は江刺市、金ヶ崎町及び胆沢町、西は湯田町及び沢内村に接しており、面積は43,755 km^2 である。本遺跡は北上市和賀町の南南東部に所在し、同町の中央部を横断する東日本旅客鉄道北上線の藤根駅から南南東約3.0 km 付近で、県道夏油温泉江釣子線沿いの段丘上に立地する。同地点は北緯39度16分、東経141度32分付近である。

2. 地理的環境

北上市和賀町の詳細な気象データは得られていないが、北上市では年間平均気温は10.8 $^{\circ}\text{C}$ 年間降水量は1,334 mm で県内では中程度である。しかし、北上市和賀町の西部は奥羽山脈に含まれ、冬季の積雪量は1~1.3 m と多量で、隣接する沢内村などでは県内では有数の豪雪地帯である。初雪は11月中旬、終雪は3月下旬で降雪期間は約4カ月である。風向は年間を通じて西風が多いが、特に冬季間は北西の季節風が強い。

本遺跡の北約1.5 km には和賀川が東流し、東約8 km には北上川が南流する。和賀川は奥羽山脈の和賀岳(1,440 m)にその源を発し、沢内村、湯田町を経て北上市和賀町に入り、北上市和賀町の中央部を東流して、北上市古川で北上川と合流する全長75 km の1級河川である。同河川は夏油川等1級河川だけでも13河川を支流とする当地では最大の河川であり、古来から人々に生活の場を提供し、同流域には数多くの集落が発達した。現在の北上市和賀町内に限ってみても、上流から順に仙人、岩沢、山口、横川目、藤根、長沼、煤孫、岩崎の9集落がある。また、湯田町和賀町の町境にある当奈峡谷でせき止められて作られた湯田ダム(錦秋湖)は、北上市和賀町一帯の水田を潤す農業用水源として重要な役割を担っている。

3. 和賀川下流域の地形

和賀川は奥羽山脈の和賀岳、高下岳の麓よりほぼ南北に流れ、沢内盆地を涵養する。湯田町川尻で東に向きを変え、深い谷を削る。湯田ダムはこの谷の出口部分に建設されている。その後和賀町横川目付近で山地を離れ平野部をゆっくり東流したのち、北上市で北上川と合流する。大きな支流は上流から横川、本内川、下前川、左草川、鬼ヶ瀬川、南本内川、北本内川、鈴鶴川、尻平川、夏油川がある。下流にある尻平川、夏油川は他の支流とは異なり、一度平野部に出てから和賀川と合流する。そして山間部からの出口にあたる北上盆地の西縁部に扇状地を形成する。しかし本流である和賀川自身は大きな扇状地を形成することなく、反対に両支流の

扇状地の扇端部を侵食している。和賀川は広い流域をもち多量の砂礫の供給が可能にみえ、扇状地を形成しやすい要素を持っている。それは、上流にある沢内盆地を流れるうちにそれらの砂礫を落としてしまい、下流まで運ばれるものが少ないからとみられる。夏油川の上流部には焼石岳、牛形山、駒ヶ岳の火山があり、周囲に火山灰や浮石等を噴出している。特に北上市の村崎野、相去町に分布している浮石層は層厚は最大が3 mにもなるが、扇状地状を示す地形面は火山灰に蔽われぬ。和賀川の南岸と北岸では段丘の発達に差がある。南岸には沖積平野と比高が20~30mの急崖によって区切られた段丘が広がる。段丘面上には崖も見当たらず単一の段丘に見えるが、崖に近いところに幅の狭い段丘面が僅かにみられる。北岸は比高数メートルの崖で区切られる複数の段丘が発達しており、南岸ほど明瞭な急崖はみられない。それは、和賀川が南に偏って流れたことが多くあったことを示している。これらの段丘を侵食してできた河岸平野上には流路の変遷の跡である弧状の旧河道が網の目のように分布し、主に水田に利用されている。旧河道に沿って並ぶ自然堤防などの微高地は宅地や畑地に利用されているが、現在は水田造成、宅地造成といった開発によって改変されている。また、段丘を開析した沢が沖積平野にてでくところには扇形の崖錐がみられ、宅地等に利用されている。

4. 地質

北上川中流沿岸地域に分布する縄文時代以降の降下火山灰砕屑物としては、古墳の周溝や住居跡の埋土などにみられる灰白色~黄色のパミスがあげられる。従来、「粉状パミス」としてあつかわれてきたものである。大凡1000~1100年前に降下した火山灰と考古遺物から推定している。本遺跡でも、C-24住居跡等の埋土から火山灰が検出されている。奈良教育大学三辻利一氏による蛍光X線分析の結果、十和田a降下火山灰と同定されている。降下年代については、9世紀後半~10世紀前半に位置づけられる。

本遺跡における基本層序は、以下のとおりである。

I層 7.5Y R3/2黒褐色 シルト 腐食土層 層厚25~35cm

表土は全体に薄く、西側に行くほど薄く堆積し、東側になるにつれて漸次層位を増している。C調査区の部分では、農地整備にともなう盛土が1 m程確認される。

II層 7.5Y R3/1黒褐色 シルト 層厚10~15cm

西側調査区は層厚は薄く、10Y R4/6の径5 cm大の褐色土を1%程を含む締まっている。含まれている小石は1センチ以内のものばかりが点在している。

III層 7.5Y R3/2~2/2黒褐色 シルト 層厚10~20cm

層厚は東側になるにつれて、IV層より締まっている。7.5Y R4/4褐色砂質シルトが含まれ

る。数センチ大の小礫が僅かに含まれる。

小礫は角ばっているものが多い。

IV層 7.5Y R2/2黒褐色 シルト 層厚10～15cm

含まれている小礫は径1cm大から数センチ大が5%含まれている。V層よりやや明るい感じの色調でV層ほど締めりはない。

7.5Y R2/2～3/2黒褐色土が点在し、十和田系火山灰が含まれる部分もある。

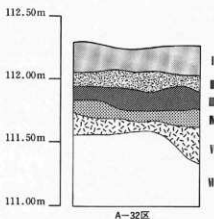
V層 7.5Y R4/4褐色 砂質シルト 層厚10～25cm

7.5Y R2/2～2/3黒褐色土が部分的に含まれている。指の跡がつくほど柔らかい層である。数ミリ大から数センチ大の小礫が3%程含まれている。

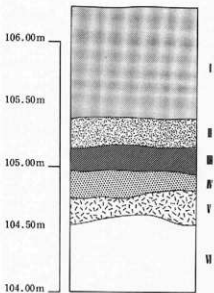
VI層 7.5Y R5/6明褐色 砂礫層

砂と数センチ大から10数センチ大の礫で構成されている。

全体に調査区の東側になるにしたがって、第II、III層が厚くなっている。また、A-39、40付近でVI層が表出している。遺構によっては床面が第IV層であったり、第V層であったりする。



A-32区



H-59区

基本土層

5. 周辺の遺跡

北上市には337カ所の遺跡が登録されているが(昭和61年現在)、第2図・第1表にはその一部を掲載したものである。和賀川を中心とした遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部および開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地に若干認められる。調査された主な遺跡としては、鳩岡崎遺跡(縄文・奈良～平安時代の堅穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器等)、新平遺跡(平安時代の堅穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、藤沢遺跡(平安時代の堅穴住居跡、溝状土壇、縄文土器等)、九年橋遺跡(縄文晩期の土器等)等があげられる。また、低位段丘や低位段丘に沿って河岸低地に形成された

自然堤防上には、奈良～平安にかけての遺跡が多く分布する傾向がみられる。調査された遺跡としては、下谷地遺跡(縄文土器、土師器、須恵器)、長沼古墳群(古墳13基、鉄刀、勾玉、切小玉等)、猫谷地古墳群、五条丸古墳群等があげられる。

和賀川右岸では、丘陵縁辺や中・低位段丘上および開析された小支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧水や深く入り込んだ沢や急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の二次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほかには、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡(土坑、縄文、弥生土器等)、岩崎城跡(土塁、溝、掘立柱建物跡、中近世陶器等)、岩崎城跡の西半分にあたる梅の木遺跡(縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器等)、成沢遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土師器等)等がある。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡(旧石器、縄文土器、土師器等)、上大谷地遺跡(平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器等)等があげられる。

また、平成元年度には自動車道建設に関連して低位段丘の縁辺部に立地する10カ所の遺跡が調査され、調査の結果、田中館跡(土坑、縄文土器、土師器等)、八幡野Ⅱ遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器等)、八幡館(平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土師器等)、月館跡(掘跡、柵列状遺構、縄文土器等)、石曾根遺跡(縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、本郷遺跡(縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、兵庫館跡(建物跡、弥生土器等)、梅ノ木台地Ⅰ遺跡(平安時代の竪穴住居跡、陥し穴状遺構、縄文土器等)、岩崎城西遺跡(溝跡、柱穴列、柱穴状小土坑、炭窯跡等)、岩崎台地遺跡群(平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器等)等の遺構、遺物が発見されている。

さらに、平成2年度には自動車道建設に関連して15カ所の遺跡が調査され、調査の結果、田中館跡(縄文土器、土師器等)、八幡野Ⅱ遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構等)、石曾根遺跡(縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構等)、本郷遺跡(縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、塚等)、林崎館跡(縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構等)、煤孫遺跡(縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、溝跡等)、観音館跡(掘立柱建物跡、土坑、陥し穴状遺構、溝跡等)、上反町遺跡(土坑、炭窯等)、梅ノ木台地Ⅰ遺跡(溝跡等)、岩崎台地遺跡群(縄文、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、陥し穴状遺構、方形周溝、塚、溝跡等)、上鬼柳Ⅰ遺跡(弥生時代の住居跡、掘立柱建物跡、土坑、陥し穴状遺構等)、上鬼柳Ⅱ遺跡(弥生、平安時代の住居跡、土坑、陥し穴状遺構等)、上鬼柳Ⅲ遺跡(縄文、平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、周溝、土坑、陥し穴状遺構等)、上鬼柳Ⅳ遺跡(平安時代の住居跡、平安時代の畑跡、土坑、陥し穴状遺構、溝跡等)、柳上遺跡(縄文、平安時代の住居跡、土坑、

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	林崎館	36	高前壇 I	71	新提崖	106	藤沢 I
2	中屋敷	37	下成沢 II	72	飛	107	藤沢 A, B, C, D
3	法量野 I	38	下成沢 I	73	小館	108	鳩岡崎
4	法量野 II	39	高前田	74	一本杉	109	鳩岡崎三館
5	煤孫	40	葛西壇	75	ミミトリ I・II	110	野崎 I
6	観音館	41	平林	76	鹿の子洞	111	野崎 II
7	上反町	42	高前壇 II	77	根岸	112	下谷地
8	兵庫館	43	滝ノ沢地区	78	元館	113	荻島
9	梅ノ木台地 II	44	小舞前	79	四十九里	114	鳥海柳
10	梅ノ木台地 I	45	八木畑	80	白山院寺	115	八幡
11	岩崎城西	46	松の木	81	鴻巣	116	江釣子古墳群
12	岩崎城	47	南館	82	神行田	117	本宿
13	七折館	48	観音館	83	湯沢館	118	上藤木
14	七折	49	鬼柳西裏	84	三坊木	119	本宿羽場
15	花曾根上	50	西野	85	八天	120	塚
16	花曾根	51	樺山	86	二子城	121	五条丸館
17	新田 I	52	相田	87	秋子沢	122	田代
18	八天坂	53	齊羽場	88	尻引遺跡群	123	横堰 II
19	久田 I	54	上台	89	野田 I	124	横堰 I・III
20	寺村	55	岩脇	90	鶴渡館	125	芦萱
21	岩崎台地	56	国見山院寺	91	ポタン畑	126	新平
22	小寺	57	八王子森	92	上川岸	127	中通 I
23	小平	58	沢野	93	方八丁館	128	荒屋
24	里小屋	59	館 V	94	黒沢尻橋跡	129	長清水 I
25	上鬼柳 I	60	立花小学校下	95	浮島古墳	↓	↓
26	上鬼柳 II	61	館 II	96	和野	135	Ⅶ
27	上鬼柳 III	62	館 I	97	諏訪神社	136	水波神社
28	上鬼柳 IV	63	立花	98	清水小路東	137	中野
29	柳上	64	館 IV	99	九年橋	138	下中野
30	三十人町 II	65	館 III	100	火薬庫西	139	上中野
31	成沢	66	高館	101	梨子山	140	池尻
32	上成沢	67	横町	102	黒沢尻上野町住宅	141	稲葉 I・II
33	中成沢	68	岩溪	103	黒沢尻北高ド	142	蓮見館
34	大谷地	69	飯森	104	常盤台	143	道の上長根
35	上大谷地	70	向山	105	下春木場	144	割田

第1表 周辺の遺跡一覧表

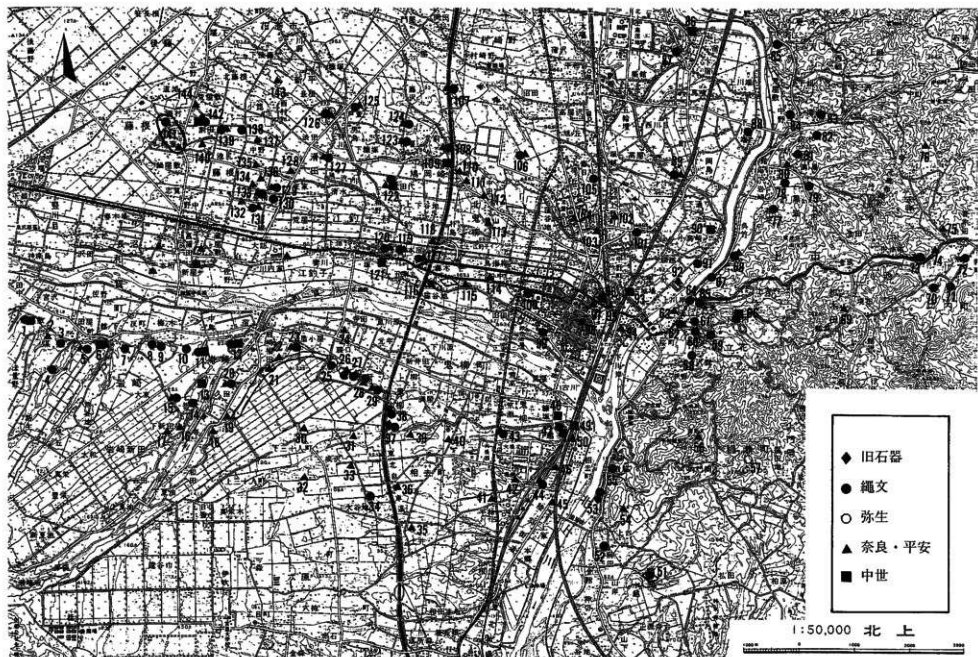


図3 周辺の遺跡

埋設土器等)等の遺構、遺物が発見されている。

Ⅲ. 調査と室内整理の方法

1. 野外調査方法

(1) 地区割

岩崎台地遺跡群のおおよその調査範囲は、幅が東西1,450m、南北35mである。

調査対象区内の花巻土地改良事業所の設定した中心杭No47(基準点1)とNo49を結ぶ線を基準とし、No47から40m東の地点に基準2を設定した。基準点の平面直角座標は、

基準点1 X=-81355.310 Y=18606.145 H=117.800m

基準点2 X=-81321.610 Y=18627.687 H=117.334mである。

グリットは、基準点1と基準点2を結ぶ線をもとに調査範囲をカバーする20×20mの大区画を設定し、それぞれの大区画は5×5mの小区画16個を小単位としている。グリットは粗掘りや遺物取り上げのときの最小単位に使用している。

区画の呼称は次のようになる。大区画は北から南へAからのアルファベット、西から東へ1からのアラビア数字を付け、A-1区・A-2区のように組み合わせて呼ぶ。小区画は、西から東へ順にa~pまでのアルファベット小文字をつけ、大区画と組み合わせて、A-1-a、A-2-bほかのようになる。

(2) 粗掘と精査

調査区の現況は山林、畑や水田であるために雑木の撤去や焼却作業からはじめた。山林はサザゲが生い茂っているためにバックフォアや人力で表土除去作業や土山の移動を行った。その後人力によって検出面まで掘り下げを行っている。

精査にあたっては住居跡は4分法、土坑、陥し穴状遺構などは2分法を原則としたが、残存状況の不良な住居跡の場合は2分法で行った。出土遺物は、遺構名、地区名、層位等を記入して取り上げた。

(3) 遺構の名称

検出した遺構の名称は、グリットの次に遺構種類名を使用している。遺構名の具体例は、C

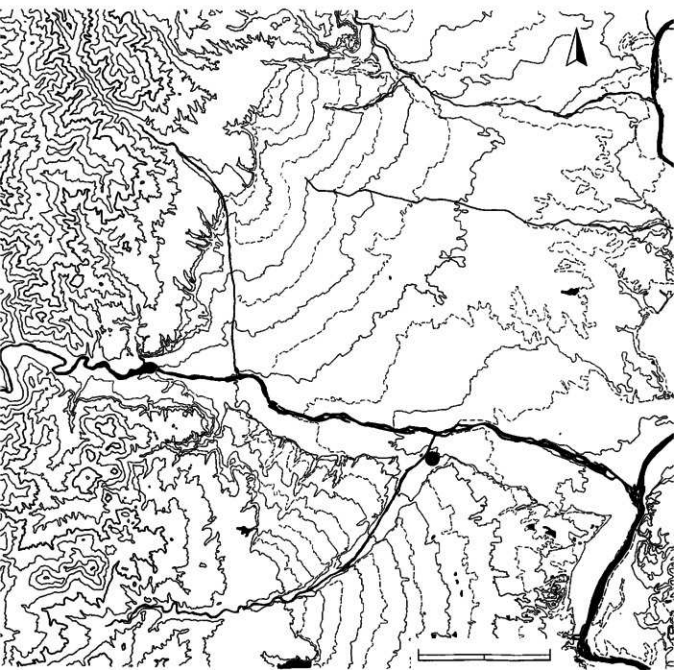


図4 遺跡周辺の地形図

— a 住居跡、D-15土坑、E-20陥し穴などになる。遺構が2つ以上の区画にかかるときは北側が含まれる大区画名をつけたが、厳密なものではない。

2. 室内整理方法






(1) 作業手順

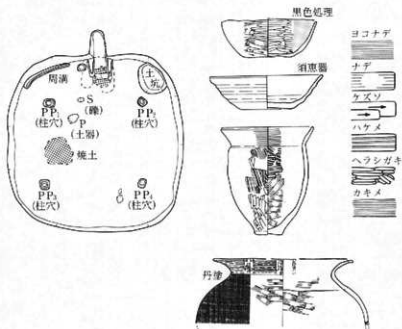
室内整理は、現場で残してきた遺物の注記から始め、次いで接合・復元、石膏入れの順に進めた。これらの作業が終わった段階で遺物の仕分け・登録をし、その後、遺物実測、土器拓本遺物・遺構トレースの順に作業を進め、報告書掲載分について写真撮影を行い、最後に図版や写真図版を作成した。

(2) 図版・写真図版

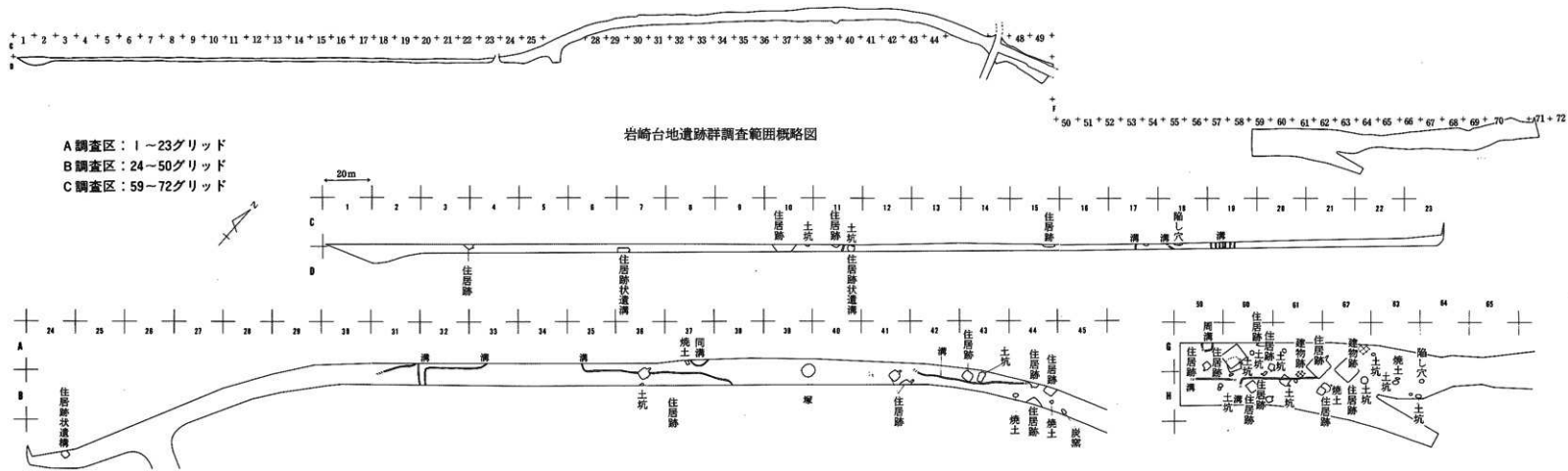
遺構図版の縮尺は、住居跡のカマド断面は30分の1、その他は60分の1を原則としている。

遺物図版の縮尺は、土師器、須恵器の壺類は4分の1、土師器、須恵器の坏類は3分の1、鉄器・剥片石器は原寸または2分の1、礫石器は3分の1を原則としている。

挿図における表現方法は、焼土は、礫は、土器は、攪乱は、掘りすぎはで表現した。柱穴はPP₁、PP₂、PP₃……のように表現した。以下凡例を図に示している。



遺構・土器実測図凡例

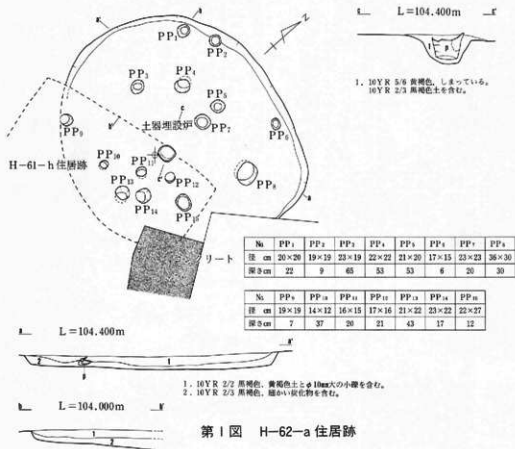


第5図 遺構配置図

IV. 調査の結果

1. 遺構と伴出遺物（住居跡）

(1) 竪穴住居跡、住居跡状遺構

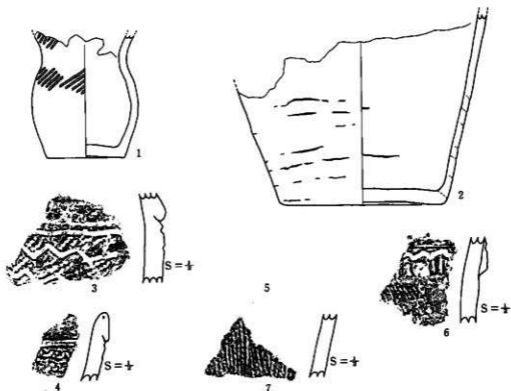


第1図 H-62-a 住居跡

H-62-a 住居跡

遺構（第1図、図版5）

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-61-1住居跡の東約2m付近に位置している。H-61-h住居跡と南側部分で重複し、東南部分は水路の構造物のために全体の約2分の1を調査できたにすぎない。平面形 東西に長軸をもつ楕円形を呈すると推定される。規模 4.1×(3.6)m 床面積 (21.4)m² 埋土 黄褐色土を含み、非常に硬く締まった黒褐色土2層で構成されている。第1層は小礫径1cm大を含み、第2層は炭化物を含んでいる。壁 緩やかに外傾 床面 ほぼ平坦で硬い。H-61-h住居跡の床面と同レベル面である。壁溝は伴わない。柱穴 径12~36cm、深さ6~65cmを測り、PP₁~PP₁₅が柱穴と考えられる。柱穴の位置付けは



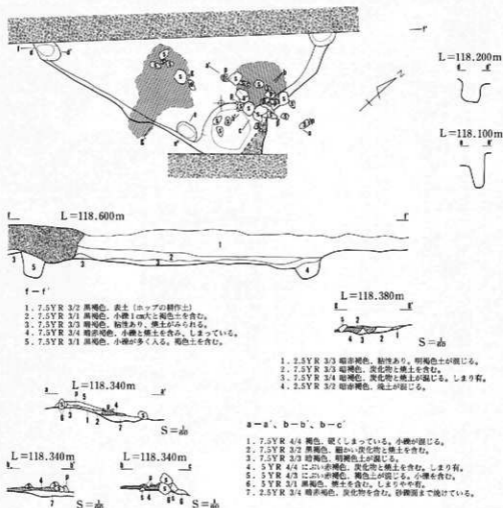
No	出土地点・層位	器 種	部 位	文様の種類・形状・外面	時期分類	備 考
1	焼土	甕鉢		単節縄文LR	縄文前期末～中期初頭	
2	床層	甕鉢			縄文	
3	焼土	甕鉢	口縁部	折り返し口縁、波状沈線文、単節縄文RL	縄文前期末～中期初頭	
4	焼土	甕鉢	口縁部	折り返し口縁	縄文中期初頭	
5	焼土	甕鉢	頸部	平行沈線、波状沈線文、縞帯単節縄文LR	縄文前期末	
6	焼土	甕鉢	頸部～体部	縞帯、明目、波状沈線文、単節縄文RL	縄文中期初頭	
7	焼土	甕鉢	体部	縞帯	縄文前期	

第2図 H-62-a 住居跡出土遺物

明らかでない。炉 床面ほぼ中央部に位置する。土器埋設炉で、土器の中に黄褐色の土、焼土・炭化物、礫、炭化物を含む黒色土がみられる。遺構の時期 出土遺物や住居形式から縄文前期末葉～中期初頭である。

遺物（第2図、図版42）

出土状況 地床炉に使用された土器(2)以外は、第2層の床面に近い部分から出土している。
土器 1はキャリパー形にちかい器型で、口縁部が欠けている。単節縄文(LR)が施されている。2は口縁部分を欠いている。体部下半は赤く変色し、黒斑がみられる。3は折返し口縁をもち、口縁部分に細い二条の波状沈線文がみられる。単節縄文(RL)が施されている。4も折返し口縁をもち、施文は単節縄文である。5は口縁部に細く、浅い沈線による平行沈線と



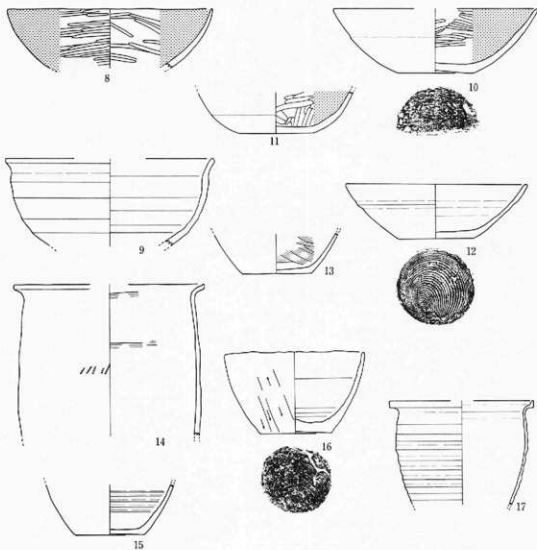
第3図 C-3住居跡

鋸歯状沈線がみられる。施文は単節縄文（LR）である。6は隆帯に刻目もち、浅い沈線文が一条みられる。単節縄文（RL）が施されている。7は体部に燃糸文が施されている。

C-3住居跡

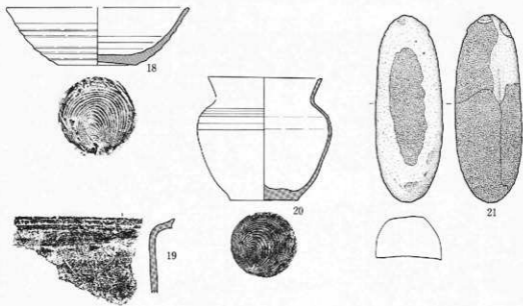
遺構（第3図、図版6）

検出状況・重複関係 A調査区の西端に位置している。現況はホップ畑であり、表土を除去後に煙道部の礎が確認された。平面形 不明 規模 南壁で3.7mを測る。床面積 (5.2)㎡ 主軸方向 E-8°-N 埋土 3層で構成される。第2層は耕作土で第2層までホップ耕作の影響がある。遺物は、主に第3層の暗褐色土より出土している。壁 南壁はほとんど残ってい



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口	径	高さ		
8	ビット	土師器杯	滑ロクロ	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	—	(16.4)	(4.7)	—	A1c	黒色処理
9	カマド	土師器鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	—	—	—	G	黒色処理
10	ビット	土師器杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(16.4)	5.1	6.2	B1	黒色処理
11	カマド	土師器杯	ロクロ	—	ロクロ肌	西調整	—	ミガキ	ミガキ	—	(3.4)	6.2	BIV	黒色処理
12	カマド	あかやき杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	—	14.6	4.5	6.0	A環	—
13	カマド	土師器鉢	滑ロクロ	—	ナデ	西調整	網毛目	網毛目	—	(4.2)	7.4	—	DI X1b	黒色処理
14	ビット	土師器壺	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	網毛目	—	(20.4)	(16.1)	—	E1a	—
15	ビット	土師器壺	ロクロ	—	ナデ	西調整	—	ロクロ肌	ナデ	—	(5.3)	7.4	E1c	—
16	床面	土師器壺	ロクロ	—	ナデ	回転糸切り肌	—	ロクロ肌	—	—	(8.7)	7.6	E1d	—
17	カマド	土師器壺	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(15.4)	(11.1)	—	E1a	—
18	カマド	黒色鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	ロクロ肌	(14.6)	4.6	6.2	S環	—
19	床面	黒色鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	—	—	—	S壺	—
20	床面	黒色鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	ロクロ肌	(12.1)	13.1	7.2	S壺	—

第4図 C-3住居跡出土遺物(1)



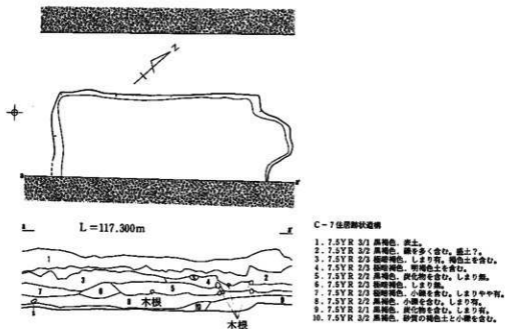
No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ			
21	床面	磁石	14.9	5.3	3.2	320	磁粒凝り状	

第5図 C-3住居跡出土遺物(2)

なく、東壁は緩やかに外傾する。壁高は10~20cmである。床面 全体は小礫で凸凹しているが、北壁際は硬く締まっている。カマド 東壁の南寄りに構築されているが、ホップの耕作のためにカマドの残りは悪い。10~30cmの礫を組み合わせて作られ、黒褐色のシルト質土で被覆されている。煙道は全体的に不明であるが、緩やかに上がり勾配である。煙出口の形状は不明であるが、使用されたと思われる礫や土器片が残っている。付属施設 南壁の東寄りに平面形が円形のピットが存在する。貯蔵穴と思われる。埋土から土師器坏と土師器甕が出土している。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物(第4、5図、図版43)

出土状況 埋土下部を中心に、床面・カマド・ピットから出土している。土器 土師器は坏A類・B I類・鉢があり、須恵器は坏・甕・壺がある。375は内外に黒色処理されている坏で、丸底と思われる。319は内面に黒色処理されている鉢と思われる。376は甕を転用したものと思



第6図 D-6 住居跡状遺構

われる。375・353・356・352の4点はピットより出土している。石製品 砥石21は、緑色の細粒凝灰岩を砥石として使用したものであり、2面に使用痕がある。

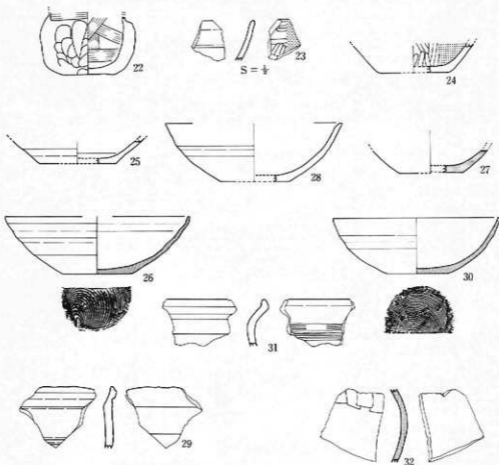
D-6 住居跡状遺構

遺構 (第6図、図版7)

検出状況・重複関係 A調査区の西側にあり、D-10住居跡の南西約60m付近に位置する。南側が調査区外にあり、全体の3分の1を検出するにすぎない。平面形 方形を呈すると推定される。規模 北西壁で3.2mを測る。床面積 (4.7)㎡ 埋土 10層で構成される。上位は30cm程の礫と粘土質の褐色土を含む層で攪乱層である。下位は砂質褐色土と小礫を含む黒褐色土と暗褐色土が主体の層である。壁 緩やかに外傾 壁高10~23cm 床面 全体が柔らかい。柱穴や周溝は検出されない。カマドを伴わないことから住居跡とは区別して住居状遺構とした。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

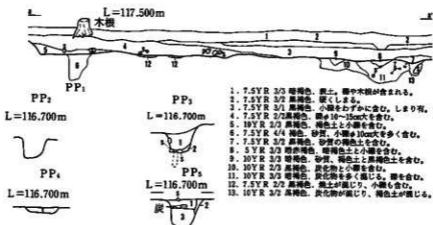
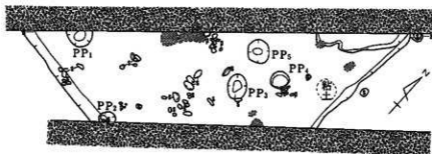
遺物 (第7図、図版44)

出土状況 床面に近い黒褐色土の埋土から主に出土している。土器 坏では土師器坏、あかやき坏と須恵器坏、他に土師器甕、須恵器壺が出土している。手掘ね土器22の外面には指痕が顕著にみられる。甕類は破片の出土が多く図示できるものは少なかった。



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
22	埋土	1=7A上土	手捏ね	網毛目	磨面	—	網毛目	網毛目	—	(6.0)	(5.0)	4.2	—	—
23	埋土	土師器環	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	—	B1	黒色結理
24	埋土	土師器環	ロクロ	—	ロクロ肌	同輪赤切り肌	—	ミダキ	ミダキ	—	(2.2)	(5.5)	A環	黒色結理
25	埋土	あかやき環	ロクロ	—	ロクロ肌	同輪赤切り肌	—	ロクロ肌	—	(1.8)	(6.2)	—	A環	—
26	埋土	須恵器環	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	同輪赤切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(14.8)	4.6	(5.4)	S環	—
27	埋土	須恵器環	ロクロ	—	ロクロ肌	同輪赤切り肌	—	ロクロ肌	—	(1.8)	(5.0)	—	S環	—
28	灰層	あかやき環	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	同輪赤切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(14.2)	(4.6)	(5.6)	A環	—
29	埋土	土師器壁	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	—	—	—	E1 1a	—
30	埋土	須恵器環	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	同輪赤切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(13.4)	4.4	(4.9)	S環	—
31	埋土	土師器壁	赤ロクロ	ゴコナデ	—	—	ゴコナデ	—	—	—	—	—	(1) 12(1)	—
32	埋土	須恵器管	ロクロ	—	キズリ	—	—	ロクロ肌	—	—	—	—	S器	—

第7図 D-6 住居跡状遺構出土遺物



1. 7.5YR 3/3 暗褐色。表土。薪や木杭が含まれる。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色。硬くしまる。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色。小礫をわずかに含む。しまり有。
4. 7.5YR 2/2 黒褐色。礫φ10~20cmを含む。
5. 10YR 2/3 黒褐色。褐色土と小礫を含む。
6. 7.5YR 4/4 褐色。砂質。小礫φ10cmを多く含む。
7. 7.5YR 3/2 黒褐色。砂質の褐色土を含む。
8. 5YR 3/3 暗赤褐色。暗褐色土と小礫を含む。
9. 10YR 3/3 暗褐色。砂質。褐色土と黒褐色土を含む。
10. 10YR 2/3 黒褐色。炭化物と小礫を含む。
11. 10YR 3/3 暗褐色。炭化物を多く含む。薪を含む。
12. 7.5YR 2/2 黒褐色。薪土が混じり。小礫も含む。
13. 10YR 3/2 黒褐色。炭化物が混じり。褐色土が混じる。

- PP4, PP5
1. 10YR 3/2 黒褐色。炭化物と褐色土が混じる。
 2. 7.5YR 5/6 明褐色。砂質。
 3. 7.5YR 3/1 黒褐色。小礫含む。

Nb	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
径 cm	64×65	45×-	63×52	50×43	56×56
掘り深 cm	68	32	27	16	45

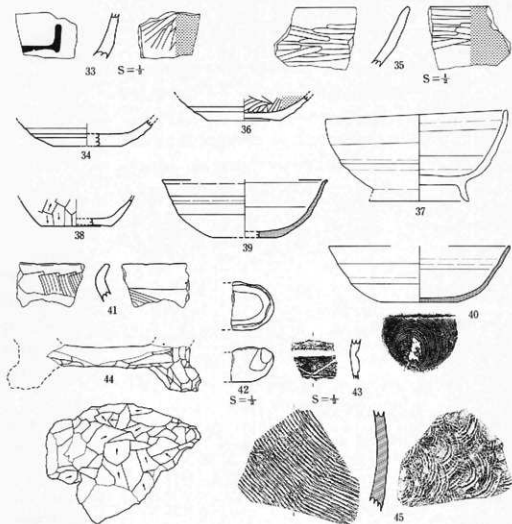
第 8 図 D-10住居跡

D-10住居跡

遺構 (第 8 図、図版 8)

検出状況・重複関係 A調査区の西側にあり、D-11住居跡の西南約15m付近に位置する。住居跡の南側部分と北側部分が調査区外になり、全体の約4分の1を検出するにすぎない。

平面形 方形を呈すると推定される。規模 不明(一辺が約7m前後と推定される) 床面積 (7.0)㎡ 主軸方向 不明 埋土 小礫と砂質褐色土が混じる黒褐色土を主体に、5層で構成される。床面に近い層は炭化物を多く含む。壁 やや外傾 壁高20cm前後 床面 砂質の明褐色土が多く、凸凹している。PP1~PP5が柱穴と推定される。カマド 不明 径20~80cm、厚さ10cmの規模で焼土が広がっている。付属施設 北東隅にピットが1基検出されている。径2.4×(-)、深さ63cmの掘り込みがある、楕円形を呈すると推定される。遺構の時期 出土遺物や住



No	地点・部位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類・備考					
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径						
33	埴土	土師器坪	ロクロ	—	ロクロ直	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	黒色処理			
34	埴土上部	あかやき坪	ロクロ	—	ロクロ直	—	—	ロクロ直	—	—	(1.8)	(5.8)	—	A坪	—			
35	埴土	土師器坪	ロクロ	—	ロクロ直	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	—	黒色処理		
36	埴土	土師器坪	ロクロ	—	ロクロ直	—	—	ミガキ	ミガキ	—	(1.7)	(5.8)	—	—	—	黒色処理		
37	埴土	土師器坪	ロクロ	ロクロ直	ロクロ直	—	ロクロ直	ロクロ直	—	ナデ	14.5	7.2	8.8	—	—	BI		
38	埴土	土師器壺	滑ロクロ	—	ケズリ	—	—	—	—	ナデ	—	(2.8)	(7.6)	—	—	I		
39	埴土	須恵器坪	ロクロ	ロクロ直	ロクロ直	—	—	—	—	—	(13.2)	4.6	(5.2)	—	—	S坪		
40	埴土	須恵器坪	ロクロ	ロクロ直	ロクロ直	—	—	—	—	—	(14.6)	4.5	6.9	—	—	S坪		
41	埴土上部	土師器壺	滑ロクロ	刷毛目	—	—	—	刷毛目	—	—	—	—	—	—	—	—	X 12 b	
42	埴土	土製品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
43	埴土	土師器壺	滑ロクロ	ミガキ	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
44	埴土	土製品	滑ロクロ	—	—	—	—	—	—	—	(3.4)	(14.4)	—	—	—	—	—	
45	埴土	須恵器壺	ロクロ	—	印き目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	S壺

第9図 D-10住居跡出土遺物

居形式から平安時代である。

遺物 (第9図、図版44)

出土状況 埋土と床面から出土している。全体に出土量が少なく破片が多いので、図示できるものも少ない。土器 坏ではロクロ使用の土師器坏、あかやき坏、須恵器坏があり、甕では土師器甕、須恵器甕がある。墨書土器33は「山」か、判読不能である。土師器坏37は台付きの坏で、内面は丁寧に磨かれているが黒色処理されていない。43は頸部または体部に鋸歯状に沈線文をもつ土師器甕の破片である。外面は丁寧な磨きである。42は指状の土製品である。44は3つ、または4つの脚をもつ土製品で、調整は荒いヘラ削りである。

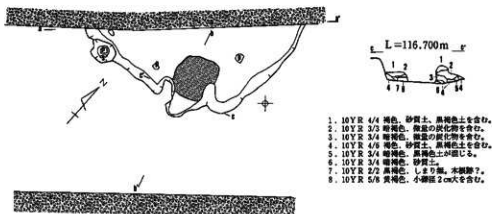
D-11住居跡

遺構 (第10図、図版9)

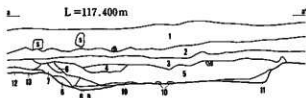
検出状況・重複関係 A調査区の中央部にあり、D-10住居跡の北西約15m付近にある。住居跡の北西部分が調査区外にあり、全体の約2分の1を検出するにすぎない。平面形 方形を呈すると推定される。規模 南東壁で2.0mを測る。床面積 (2.3)m² 主軸方向 S-22°-Eと推定される。埋土 上位層は小礫や細かい炭化物を含む黒褐色土が主体である。下位層は炭化物と褐色土を含む暗褐色土が卓越している。第5層は人為的な層である。壁 緩やかに外傾する。壁高22~33cm 床面 全体に硬く締まっている。柱穴はPP₁を検出している。カマド 南西壁の東隅と推定される。燃烧部は径70×66cm、厚さ10cm前後の楕円形状に形成され、硬くよく焼けている。煙道・煙出口は検出されない。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第12図、図版45)

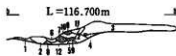
出土状況 埋土と焼土の確認された床面から出土している。土器 坏は土師器坏と須恵器坏、甕は土師器甕と須恵器甕が出土している。墨書土器は46と47の2点が出土しているが、どちらも判読不能である。土師器甕52は内外とも刷毛目調整がみられる。須恵器甕53と54の胴部下半に削り調整が行われている。



1. 10YR 4/4 褐色、砂質土、黒褐色土を含む。
2. 10YR 3/3 暗褐色、微量の炭化物を含む。
3. 10YR 3/4 暗褐色、微量の炭化物を含む。
4. 10YR 4/6 褐色、砂質土、黒褐色土を含む。
5. 10YR 3/4 暗褐色、黒褐色土が混じる。
6. 10YR 3/4 暗褐色、砂質土。
7. 10YR 2/2 黒褐色、しまり肌、木炭跡？。
8. 10YR 5/8 黄褐色、小礫径2cm大を含む。



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR 3/2 黒褐色、壤土。 2. 7.5YR 3/2 黒褐色、1層と同じ、明褐色土を含む。 3. 10YR 2/3 黒褐色、微量の炭化物と小礫を含む。 4. 7.5YR 2/3 暗暗褐色、炭化物と褐色土を含む。 5. 10YR 3/3 暗褐色、炭化物を含む、投げ込みの壤土。 6. 10YR 3/2 黒褐色、12層に似ている。 7. 7.5YR 2/3 暗暗褐色、褐色土を含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 8. 10YR 2/3 黒褐色、炭化物と褐色土を含む。 9. 10YR 2/3 黒褐色、炭化物をわずかに含む。 10. 10YR 4/4 褐色、硬くしまる。 11. 10YR 4/4 褐色、黒褐色土が混じる。 12. 7.5YR 3/1 黒褐色、小礫を含む。 13. 7.5YR 3/2 黒褐色、褐色土と小礫を含む。 |
|--|---|



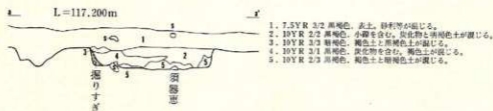
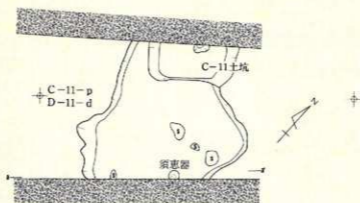
- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR 3/4 暗褐色、黒褐色土と壤土を含む。 2. 10YR 4/4 褐色、硬くしまる。 3. 10YR 2/3 黒褐色、褐色土と炭化物を含む。 4. 10YR 4/4 褐色、炭化物を含む。 5. 10YR 2/2 黒褐色、粘性あり。 6. 10YR 3/4 暗褐色、壤土と炭化物を含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 7. 5YR 3/4 暗赤褐色、良く焼けていて、硬い。 8. 5YR 3/3 暗赤褐色、ブロック状。 9. 5YR 3/3 暗赤褐色、しまり肌、7層の一部？。 10. 10YR 3/4 暗褐色、壤土を含む、しまり肌。 11. 10YR 3/3 暗褐色、炭化物を含む、しまり肌。 12. 7.5YR 2/2 黒褐色、暗褐色土が多く混じる。 |
|--|---|

第10図 D-11住居跡

D-11住居跡状遺構

遺構 (第11図、図版10)

検出状況・重複関係 A調査区の中央にあり、D-10住居跡の北東約5m付近にある。D-11土坑と北西部で重複している。新旧関係はD-11土坑が古期である。平面形 方形を基調とする不整形。規模 北西壁で2.3mを測る。床面積 (3.7)㎡ 埋土 炭化物と褐色土を含む黒褐色土と暗褐色土の5層で構成されている。壁 直立 壁高19~33cm 床面 40cm大の礫がみられ、柔らかく凸凹している。カマドを伴わないことから住居跡とは区別して住居状遺構と



第11図 D-11住居跡状遺構

した。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (第12図、図版45)

出土状況・土器 埋土下部から出土した49以外は土師器細片が僅かに出土しているだけである。

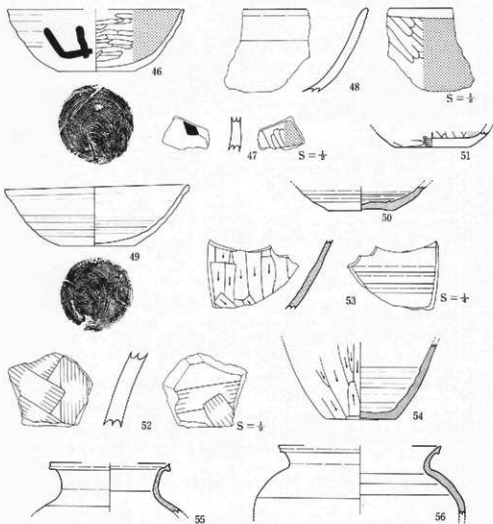
D-15住居跡

遺構 (第13図、図版11)

検出状況・重複関係 A調査区の東側にあり、D-11住居跡の北東約80m付近にある。住居跡の北西部分が調査区外にあり、全体の約2分の1を検出したにすぎない。検出できた部分も削平されていて、残りはよくない。平面形 方形を呈すると推定される。規模 南東壁で3.6mを測る。主軸方向 不明 床面積 (4.1)[㎡] 埋土 黒褐色土と褐色土を主体に5層で構成されている。第3層以外は礫などが多くみられる。壁 緩やかに外傾。壁高 3~10cm 床面 凸凹している。柱穴はPP₁とPP₂と思われる。カマド 南東壁の西寄り、本体部は崩壊し、燃焼部付近に20~50cm大の罅が残っている。燃焼部は径72×65cm、厚さ10cm前後のほぼ楕円形を呈している。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

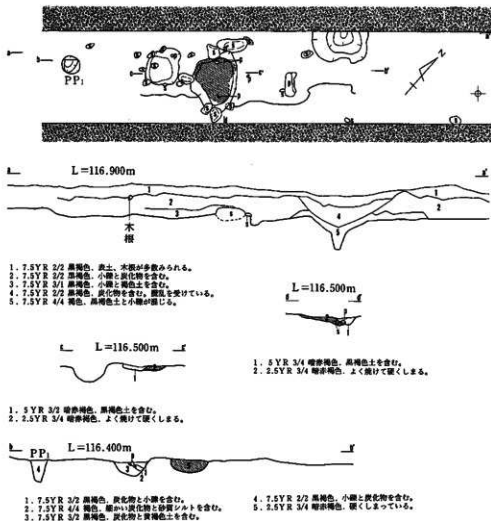
遺物 (第14図、図版45)

出土状況・土器 埋土、床面と焼土が確認された部分より出土している。図示した以外に煤の付着した土師器臺が細片で出土している。墨書土器57の文字は判読不能である。土師器臺60の外壁は摩耗が著しい。



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値・cm			分類	備考	
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口徑	高さ	底径			
46	床面	土器製杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	陶板糸切9底	ミダキ	ミダキ	ミダキ	(14.2)	4.9	6.2	B1	黒色粘理	
47	埋土	土器製杯	ロクロ	—	ロクロ底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
48	埋土	土器製杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	—	—	—	B1
49	床面	赤土製杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	陶板糸切9底	ロクロ底	ロクロ底	—	(14.8)	4.9	5.9	A杯	黒色粘理	
50	埋土	須恵製杯	ロクロ	—	ロクロ底	陶板糸切9底	—	—	—	—	(2.0)	(5.8)	S杯	—	
51	埋土	土器製杯	ロクロ	—	刷毛目	陶板糸切9底	—	ミダキ	ミダキ	—	(1.2)	(5.8)	B1	黒色粘理	
52	埋土	土器製壁	赤ロクロ	—	刷毛目	—	—	刷毛目	—	—	—	—	—	—	(I)b
53	床面	須恵製壁	ロクロ	—	クズリ	—	—	ロクロ底	—	—	—	—	—	—	S壁
54	床面	須恵製壁	ロクロ	—	クズリ	汚裏面	—	ロクロ底	—	—	—	—	—	—	S壁
55	埋土	須恵製壺	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	(12.8)	(5.2)	—	—	—	S壺
56	埋土	須恵製壺	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	(15.8)	(7.1)	—	—	—	S壺

第12図 D-11住居跡、D-11住居跡状遺構出土遺物



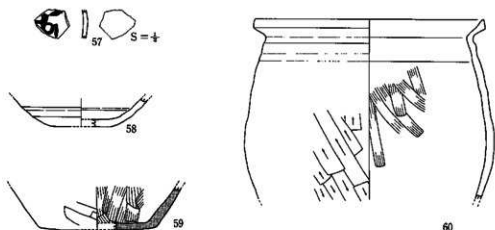
第13図 D-15住居跡

C-24住居跡状遺構

遺構 (第15図、図版12)

検出状況・重複関係 西側部分が調査区外にあり、全体は検出できていない。平面形 方形と推定される。規模 3.1×(3.0) mを測る。床面積 (9.8) m² 埋土 黒褐色土と褐色土を主体に3層で構成される。第2層と第3層の間の中央部分に火山灰がブロック状に堆積している。壁 外傾している。壁高は18~25cm 床面 全体に硬く締まっている。カマド 検出されない。遺構の時期 出土遺物がなく時期不明である。

遺物 出土していない。



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径		
57	灰層	土師物碎	ロクロ	—	ロクロ痕	—	—	摩耗	—	—	—	—	B(1)	陶器
58	埴土	あかやき杯	ロクロ	—	ロクロ痕	指染法切り痕	—	ロクロ痕	—	—	(2.3)	(5.2)	A坪	
59	埴土	須恵器窯	ロクロ	—	刷毛目	再調査	—	刷毛目	ナゲ	—	(4.5)	(12.6)	S壁	
60	埴土	土師器壺	ロクロ	ロクロ痕	ナズリ	—	ロクロ痕	刷毛目	—	(14.6)	(19.2)	—	SⅡa	

第14図 D-15住居跡出土遺物

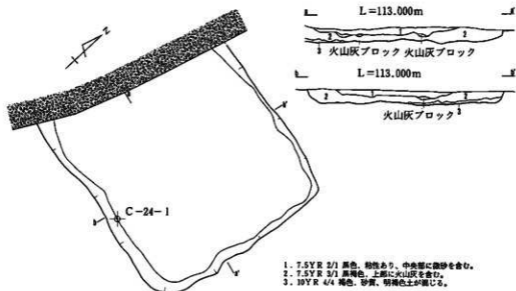
B-36住居跡

遺構 (第16図、図版13)

検出状況・重複関係 88年の試掘時に、表土を除去した段階で存在が確認されていた。B-35溝と北西部分で重複している。新旧関係はB-35溝が新期である。平面形 方形を呈する。規模 4.1×4.0m 床面積 15.9㎡ 主軸方向 N-8°-E 埋土 3層で構成されている。黒褐色土が大部分を占め、中間に褐色の砂質シルトが入っている。壁 外傾している。東・南壁は、壁の立ち上がりが少ない。壁高は16~20cm。床面 壁よりの周辺部をのぞいては、硬く締まっている。柱穴は、4~6本。PP₁、PP₂は、住居跡の柱穴となるか、不明である。周溝はない。カマド 北壁中央部に構築。礫を芯にし、シルト質土で被覆している。B-35溝で北側の礫は消失している。燃烧部の焼土は径38×58cm、厚さ8cmで良く焼けて締まっている。煙道部は掘り込み式と思われる。煙道は僅かに上がり勾配であり、煙出口は円形のピットになっている。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第17図、図版46)

出土状況 カマド・床面より出土している。土器 土師器は坏AⅡ類・壺・鉢、須恵器は坏・



第15図 C-24住居跡状遺構

礎が出土している。67・66は西側床面、73は南側床面から出土している。71は内外面を丁寧にヘラミガキし、内面を黒色処理している鉢である。坏はAⅡ類が中心で、須臾器の量は少ない。

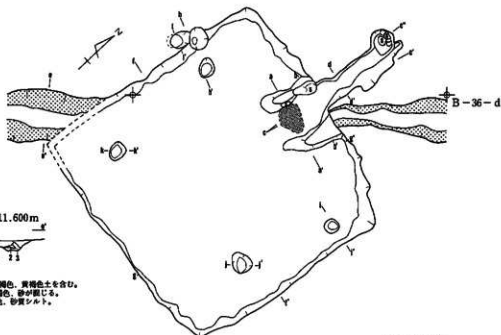
B-41-c 住居跡

遺構 (第18図、図版14)

検出状況・重複関係 B調査区の中央部付近で、B-41-h住居跡の北側に位置している。88年度の試掘調査で、住居跡は確認されていない。平面形 方形 規模 3.6×3.8m 床面積 13.1㎡ 主軸方向 N-1°-E 埋土 4層で構成されている。床面に近い層が暗黒褐色土であるほかは、黒褐色土が大部分を占める。十和田系火山灰は第2層と第3層の間に厚さ5cm前後でブロック状に入っている。土器は第2層以下より出土している。壁 残りはよく、50位の角度をもち立ち上がる。壁高は16~28cm 床面 壁よりの周辺部を除いては、全体が硬く締まっている。柱穴や周溝は検出されない。カマド 北壁の中央部に構築されている。煙道は緩やかに傾斜をもちながら下がる。煙出口の形状は不明である。煙出口付近に使用された礎が数個残っている。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第19~22図、図版47~50)

出土状況 西側埋土下部を中心に、床面付近・床面・カマドから出土している。土器 調査した住居跡では最大量の出土である。土師器は坏AⅠ類・AⅡ類・BⅠ類、甕CⅠ類・CⅡ類・



1. 7.5YR 2/2 黒褐色、黄褐色土を含む。
2. 10YR 3/2 黒褐色、砂が混じる。
3. 10YR 4/4 褐色、砂質シルト。

L=111.600m



L=111.600m



L=111.600m



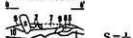
L=111.600m



L=111.600m



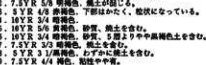
L=111.600m



L=111.600m



L=111.600m



1. 7.5YR 3/4 暗褐色、焼土粒が全体に混じる。
2. 7.5YR 5/8 暗褐色、焼土が混じる。
3. 5YR 4/8 赤褐色、下部はかたく、粒状になっている。
4. 10YR 3/4 暗褐色。
5. 10YR 5/6 黄褐色、砂質、焼土を含む。
6. 10YR 3/4 暗褐色、砂質、5層よりやや黒褐色土を含む。
7. 7.5YR 3/3 暗褐色、焼土を含む。
8. 5YR 3/1 黒褐色、わずかに焼土を含む。
9. 7.5YR 4/4 褐色、粘土や中粒。

1. 7.5YR 2/2 黒褐色、明褐色土を含む。
2. 10YR 3/2 黒褐色、炭灰に明褐色土を多く含む。
3. 10YR 4/4 褐色、砂質。

L=111.600m



L=111.600m



L=111.600m



L=111.600m

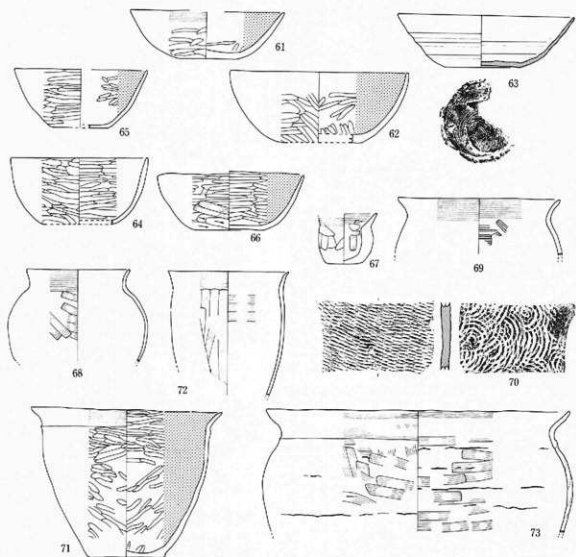


L=111.500m



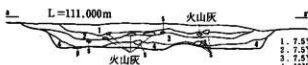
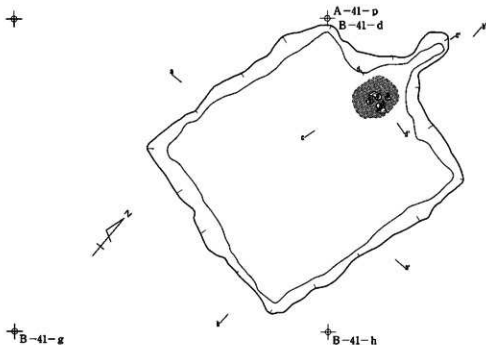
1. 10YR 2/3 黒褐色。

第16図 B-36住居跡

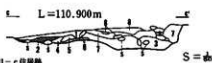


No.	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	口径		
61	カマド	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	ミガキ	再調整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(12.4)	3.8	5.0	A II a	黒色処理
62	床面	土師器(環)	非ロクロ	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(14.4)	5.6 (6.4)	—	A II a	黒色処理
63	床面	須恵器(環)	ロクロ	ロクロ飯	ロクロ飯	別輪込切9度	ロクロ飯	ロクロ飯	—	(14.2)	4.3	6.2	S 環	—
64	床面	土師器(環)	非ロクロ	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.0)	5.3 (5.8)	—	A II b	黒色処理
65	床面	土師器(環)	非ロクロ	ミガキ	ミガキ	再調整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(10.8)	4.6 (4.8)	—	A II a	黒色処理
66	床面	土師器(環)	非ロクロ	ミガキ	ミガキ	再調整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	11.8	4.7	5.5	A II a	黒色処理
67	床面	ヒコトピア系	手捏丸	ナデ	ミガキ	ミガキ	刷毛目	ナデ	ナデ	5.2	4.1	3.0	—	—
68	床面	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ナデ	摩純	—	(11.0)	(9.8)	—	D II 2 b	—
69	床面	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	摩純	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(17.4)	(5.9)	—	C II 2 ()	—
70	床面	須恵器(環)	ロクロ	—	叩き目	—	—	湯て具飯	—	—	—	—	S 環	—
71	床面	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	ミガキ	再調整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	20.5	15.9	8.4	D II 1 a	—
72	カマド	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ナデ	刷毛目	—	(13.0)	(13.2)	—	D II 2 b	—
73	床面	土師器(環)	非ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(32.6)	(13.0)	—	C II 1 b	—

第17図 B-36住居跡出土遺物



1. 7.5Y R 3/2 黒褐色、砂を含む。
2. 7.5Y R 2/2 黒褐色、中央部に火山灰のブロックを含む。
3. 7.5Y R 2/2 黒褐色、わずかに黄褐色土を含む。
4. 10Y R 3/4 暗褐色、黄褐色土が全体に混じる。

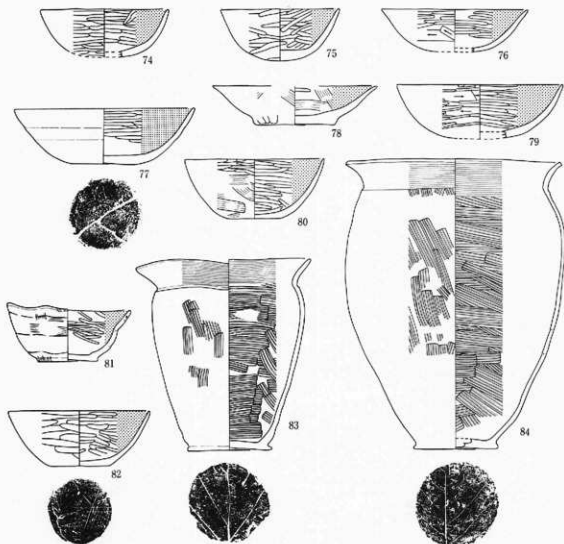


1. 10Y R 4/6 褐色、粘土粒を含む。
2. 10Y R 4/6 褐色、炭化物と粘土粒を含む。
3. 10Y R 4/4 褐色、黄褐色の砂を含む。
4. 10Y R 3/6 黄褐色、炭化物と黄褐色土を含む。
5. 10Y R 4/4 褐色、黄褐色土を含む。
6. 10Y R 5/8 黄褐色、砂質の黄褐色土がブロック状に入る。
7. 10Y R 3/4 暗褐色、褐色、褐色土と黄褐色土が混じる。
8. 10Y R 5/8 黄褐色、砂質。



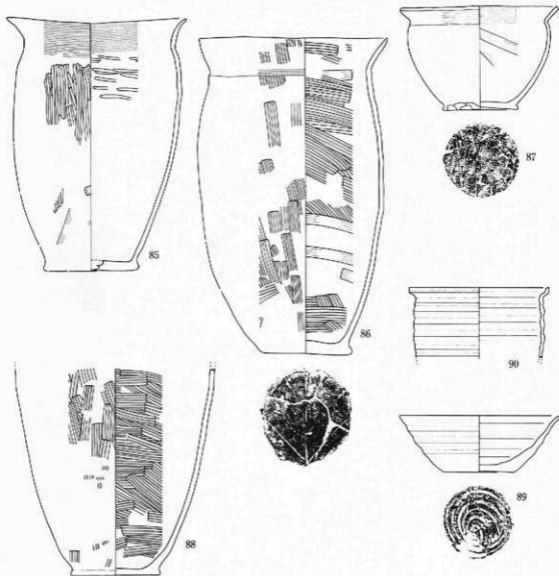
1. 10Y R 4/6 褐色、粘土粒を含む。
2. 10Y R 4/6 褐色、炭化物を含み、黄土粒が混じる。
3. 10Y R 4/6 褐色、黄土粒が全体に混じる。
4. 10Y R 4/4 褐色、砂質の黄褐色土を含む。

第18図 B-41-C 住居跡



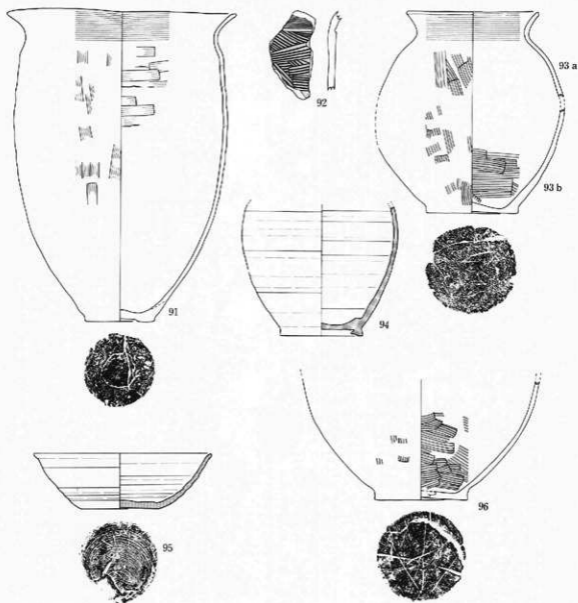
No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm				分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口	径	容	高		
74	埋土下部	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	10.3	3.8	丸底	A I	黒色処理	
75	埋土下部	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(9.6)	4.1	丸底	A I	黒色処理	
76	床面	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ケズリ	ケズリ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.8)	3.4	丸底	A I	黒色処理	
77	埋土下部	土器碗	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	目取未切手	ミガキ	ミガキ	ミガキ	14.5	4.6	5.2	B I	黒色処理	
78	床面	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	西調塗	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.4)	4.4	6.0	A II a	黒色処理	
79	埋土下部	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(13.4)	4.3	丸底	A II a	黒色処理	
80	埋土	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	刷毛目	西調塗	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.2)	4.7	4.6	A II a	黒色処理	
81	床面	土器碗	赤ロクロ	刷毛目	刷毛目	西調塗	ミガキ	ミガキ	ミガキ	9.9	4.7	4.8	A II a	黒色処理	
82	床面	土器碗	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	西調塗	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.4)	4.4	6.0	A II a	黒色処理	
83	床面	土器壺	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	木葉肌	ヨコナデ	刷毛目	ミガキ	18.7	20.5	9.0	C I 2 b		
84	埋土下部	土器壺	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	木葉肌	ヨコナデ	刷毛目	ミガキ	22.7	31.1	9.0	C I 1 b		

第19図 B-41-c 住居跡出土遺物(1)



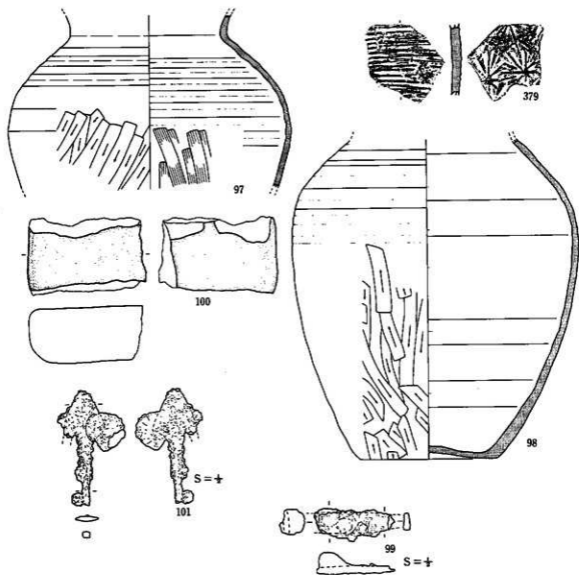
No	地点・層位	種類・器種	成形	外 観 測 量				内 面 測 量			計 測 値 : cm			分類	備 考
				口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	深 度	底 径			
85	埋土下層	土師赤塗	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	再調整	ヨコナデ	ミダキ		19.2	27.4	10.2	C11b		
86	埋土	土師赤塗	赤ロクロ	刷毛目	刷毛目	本無底	刷毛目	刷毛目	ナデ	30.1	34.1	9.8	C12b		
87	埋土	土師赤塗	赤ロクロ	ヨコナデ	押托	再調整	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	(16.6)	11.0	8.0	G		
88	埋土上層	土師赤塗	赤ロクロ	—	刷毛目	再調整	—	刷毛目	刷毛目	—	(32.2)	(9.6)	C1X1b		
89	埋土	あかやき坏	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	回転削り直	ロクロ肌	ロクロ肌		(12.8)	4.5	5.6	A坏		
90	埋土	土師赤塗	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌		(15.0)	(7.5)	—	E1a		

第20図 B-41-c 住居跡出土遺物 (2)



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
91	埋土下部	土師製埴	赤ロクロ	ココナデ	刷毛目	内調整	ココナデ	刷毛目	ナデ	(24.4)	33.4	7.4	CH1b	
92	埋土下部	土師製埴(?)	赤ロクロ	刷毛目	刷毛目	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	F1	
93	灰層	土師製埴	赤ロクロ	ココナデ	刷毛目	内調整	ココナデ	刷毛目	ナデ	(14.2)	(24.4)	9.8	F1	
94	灰層	須恵製埴	ロクロ	—	ロクロ肌	—	—	ロクロ肌	ナデ	—	(14.6)	8.8	S層	
95	埋土下部	須恵製埴	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	内調整	ロクロ肌	ロクロ肌	ナデ	14.8	4.5	6.4	SIF	
96	埋土上部	土師製埴	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉肌	—	刷毛目	ナデ	—	(12.9)	9.9	F1	

第21図 B-41-c 住居跡出土遺物(3)



No	地点・層位	種類・形	成形	外面装飾			内面装飾			計測値:cm			分類	備考	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径			
97	壇上下部	須恵系砂質	ロクロ	—	ケズリ	—	—	刷毛目	—	—	—	(18.5)	—	S型	
98	壇上下部	須恵系砂質	ロクロ	—	ケズリ	—	—	ロクロ目	ナズ	—	—	(34.9)	14.6	S型	
379	壇土	須恵系砂質	ロクロ	—	叩き目	—	—	当て具底	—	—	—	—	—	S型	

No	出土地点・層位	種類	計測値:cm			重量:g	材質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ			
100	壇土	磁石	6.1	9.5	4.4	488	陶礫石、安山岩	

No	出土地点・層位	種類	計測値:cm			重量:g	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
99	灰層	刀子	4.2	1.7	0.4	10.6	
101	灰層	鉄鏝	9.3	3.4	0.5	21.8	

第22図 B-41-c 住居跡出土遺物(4)

E類、壺、鉢があり、須恵器は坏・甕・壺がある。97・98は火山灰の僅かに下の層より出土している。93aと93bは同一個体と思われ、図面で合成している。87は外面が摩耗しているために調整が不明であるが、内面がハケメ調整の鉢である。92は丹塗の土師器壺の破片であると思われる。石製品 両輝石安山岩を利用した砥石で、2面使用している。ほかに、7.0×4.8cmの大きさの黒曜石の石核(380)と剥片が数点出土している。鉄製品 鉄鏝1点と刀子1点が出土している。

B-41-h 住居跡

遺構 (第23図、図版15)

検出状況・重複関係 南部部分が調査区外にあり、全体の約2分の1を調査できたにすぎない。平面形 方形と推定される。規模 西壁で4.8mを測る。床面積 (10.5)㎡ 主軸方向 N-15°-E 埋土 黒褐色土を主体に4層で構成される。下位の層には黄褐色の砂質シルトが混じる。全体に硬く締まっている。壁 南西側は緩やかに外傾している。壁高は8~22cm 床面軟弱である。柱穴や周溝は検出されない。カマド 北壁東寄りに構築。カマド本体は調査区域外にあると思われる。芯に使用されたと思われる礫が残っている。煙道の埋土は良く焼けていて、煙道部は緩やかに傾斜し下がっている。煙出口の形状は円形で、使用された礫が数個残っている。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

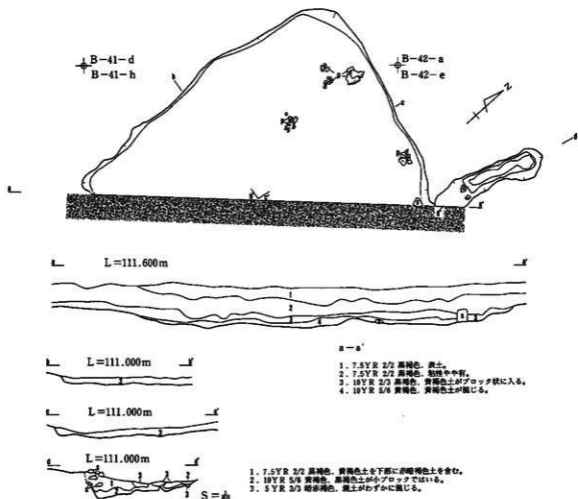
遺物 (第24図、図版51)

出土状況 カマド付近・北側床面を中心に、埋土から床面にかけて出土している。土器 土師器は坏A I類・A II類、甕D類、須恵器は坏、甕がある。106はB-41-c住居跡出土の土器片と334は同じくB-41-c住居跡、埋土上部出土の土器片と接合した。110は口縁部から体部にかけて煤が付着している。鉄製品 鉄鏝が1点出土している。石製品 2.8×2.9cmの大きさの黒曜石の剥片(381)が1点出土している。

B-43住居跡

遺構 (第25図、図版16)

検出状況・重複関係 88年の試掘調査では西壁のラインが確認されていたが、住居跡の東半分は、礫が多く壁の残りもよくないために推定線だけしか、把握できなかった。平面形 東側方向に長軸をもつ、いびつな方形。規模 3.8×3.8m 床面積 14.1㎡ 方軸方向 N-26°-E 埋土 3層で構成されている。埋土の大部分を占める黒褐色土はしまりがなく、黄褐色の砂質シルト土を多く含む。住居跡の中央部付近には10~20cmの角礫や亜角礫が認められ、カマド付近の埋土には酸化鉄と焼土がみられる。壁 北から東側にかけて壁の立ち上がりが少ないが、西側は外傾している。壁高は、8~27cmで西壁の残りが良好である。床面 西南部分が硬く締まっているが、全体的に径10~20cmの角礫が多く凸凹のある床面である。柱穴や周溝は検出さ

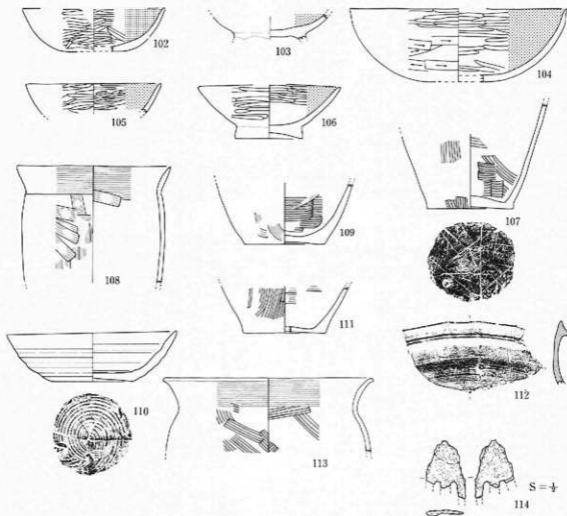


第23図 B-41-h 住居跡

れない。カマド 東壁の中央部で崩壊していて、使用された礫が袖付近に残っている。燃焼部は 58×32 cm、厚さ6cmで焼土の残りは悪い。煙道部は壁隙で径 28×30 cmの凹みと $10 \sim 20$ cmの角隙が認められるが、煙道と煙出口は検出されない。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第26図、図版52)

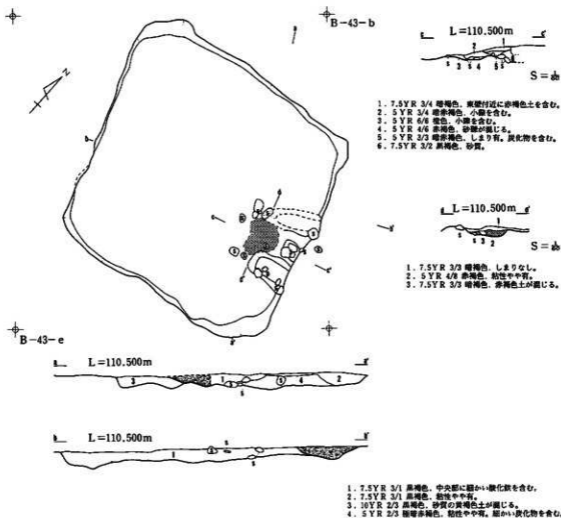
出土状況 カマド付近の床面より出土している。土器 土器は坏B I類、甕C II類・D類・E類、須恵器は坏・甕・壺・甕がある。350はB-43土坑出土の土器片と接合する。115・121は体部外面、116は口縁部から体部内外面にかけて煤が付着している。鉄製品 機種不明のもの1点が出土している。



No	地点・層位	種類・器類	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm	分類	備考		
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面					
102	塚土	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	肉裏整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.4)	3.4	丸底	A 1	黒色結理
103	塚土	土師器杯	赤ロクロ	—	ロクロ痕	台付	—	ミガキ	ミガキ	—	(1.7)	5.8	BI	黒色結理
104	灰面	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ケズリ	肉裏整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(17.4)	5.8	丸底	A 1	黒色結理
105	ホヤド	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	—	(10.8)	(2.4)	—	AI	黒色結理
106	灰面	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ	台付	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(11.4)	4.4	5.4	A II *	黒色結理
107	灰面	土師器壺	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉痕	—	刷毛目	ナデ	—	(11.3)	9.2	DI	1)b
108	灰面	土師器壺	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	—	—	(16.4)	(12.4)	—	DI	2)b
109	灰面	土師器壺	赤ロクロ	—	刷毛目	肉裏整	—	刷毛目	刷毛目	—	(6.6)	8.4	DI	1)d
110	灰面	あかやき杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	刷毛目	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	13.6	4.1	6.4	A II *	—
111	灰面	土師器壺	赤ロクロ	—	刷毛目	肉裏整	—	刷毛目	ナデ	—	(5.0)	(8.8)	DI	1)b
112	塚土	須恵器壺	ロクロ	ロクロ痕	—	—	ロクロ痕	—	—	—	—	—	S	壺
113	灰面	土師器壺	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(22.0)	(7.9)	—	C	II 1)b

No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量: g	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
114	塚土	鉄線	4.7	3.2	0.3	21.8	

第24図 B-41-h 住居跡出土遺物

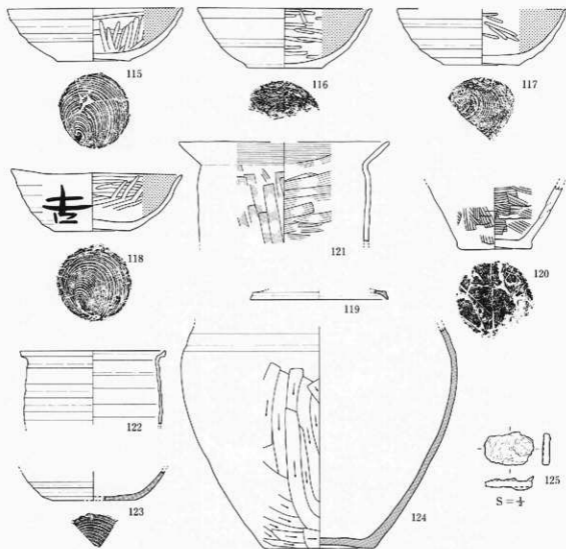


第25図 B-43住居跡

B-44-f 住居跡

遺構 (第27図、図版17)

検出状況・重複関係 B-42溝の東端部の埋土を除去後に、B-44-f 住居跡煙道部付近の焼土を確認した。北側が調査区域外になり、全体の4分の1を検出するに過ぎない。平面形不明 規模 南壁で3.6mを測る。床面積 (2.9)m² 主軸方向 S-6°-E、E-3°-S 埋土4層で構成されている。黒褐色が大部分を占めていて、上位の黒褐色土は微砂が混じり、下位では砂質シルト土が混じっている。全体に締まっている埋土である。壁 緩やかに傾斜している。壁高は5~12cm。床 東側にやや傾斜している。床面は硬く締まっている。柱穴や周溝は



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整				内部調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	器高	器径			
115	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	14.1	4.2	5.8	B I	黒色処理	
116	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(14.0)	4.8	(6.0)	B I	黒色処理	
117	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(13.6)	4.5	(6.0)	B I		
118	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	13.7	5.0	6.0	B I	黒色処理	
119	埋土	須恵器蓋	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	(11.0)	(6.8)	—	S蓋		
120	埋土	土師器壺	滑ロクロ	—	刷毛目	木製痕	—	刷毛目	ナデ	—	(6.8)	(8.0)	D I 1 b		
121	埋土	土師器壺	滑ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(22.4)	(10.7)	—	C H 1 b		
122	埋土上部	土師器壺	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	(15.6)	(7.9)	—	E 1 a		
123	埋土	須恵器杯	ロクロ	—	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	—	—	—	S杯		
124	床面	須恵器壺	ロクロ	—	ナズリ	回転糸切り痕	—	ナデ	ナデ	—	(23.7)	11.8	S壺		

No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
125	床面	不明	2.6	1.7	0.5	3.6	

第26図 B-43住居跡出土遺物

検出されない。カマド 南壁の東寄りに構築されている。礫を芯にしてシルト質土で被覆している。燃焼部の焼土は92×62cmの広い範囲に確認され、厚さ5cmである。煙道部側が良く焼けている。煙道部は、ほぼ水平に作られている。煙出口の形状は不明であるが、使用された須恵器壺(133)の破片が残っている。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物(第28図、図版53)

出土状況 煙道部、カマド付近から出土している。土器 土師器は坏B類、壺E類、壺、須恵器は坏、壺がある。133は煙道部に使用された状態で出土し、B-44-j住居跡出土の土器片と接合する。132はカマド付近より出土している。外面全面および内面口縁部に丹塗が施してある壺で、丹の残りはよくないが口縁部内外面に2本一組の縦線が描かれている。

B-44-g住居跡

遺構(第29図、図版18)

検出状況・重複関係 88年度の試掘調査では、住居跡は確認されていなかった。表土が厚く重機で表土を除去後に住居跡が確認された。平面形 ほぼ方形を呈する。規模 3.4×4.0mを測る。床面積(12.9)㎡ 主軸方向 不明 埋土 4層に細分される。上位は締まりのある黒褐色土、下位は硬く締まった褐色土である。第3層に十和田系火山灰が認められる。壁 南側は削平されていて、残りは良くない。西壁と東壁は50~60°の角度をもって立ち上がる。壁高は南壁から東壁にかけて残りがよくなく、最大でも20cmである。床 北壁付近に、よび褐色シルト質土の貼り床が認められる。全体に硬く締まっているが、径10~20cm大の礫が多く凸凹した感じである。柱穴は西壁の南側に2本検出された。風溝はない。カマド 検出されない。北壁の中央部に構築されていると推定される。付属施設 西壁の北寄りに円形のピットが存在する。貯蔵穴と思われる。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

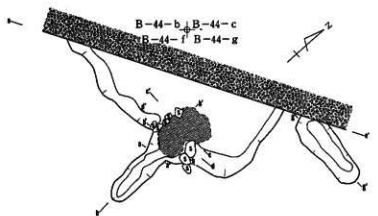
遺物(第30図、図版54)

出土状況 埋土下部や床面より出土している。土器 土師器は、坏B I類、壺C類・D類、E類、壺、須恵器壺がある。145は底部部分の圧痕が調整具か、指によるものかは不明であるが、丹塗がみられる。137の壺は外面をハケメ調整した後にヘラミガキ調整を施している。

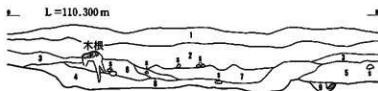
B-44-j住居跡

遺構(第31図、図版19)

検出状況・重複関係 88年度の試掘調査では住居跡は確認されていなかった。B-44-e焼土の第1層の黒褐色土を取り除いた段階で須恵器片と遺構が確認された。平面形 ほぼ方形を呈する。規模 北壁で4.6mを測る。床面積(8.8)㎡ 主軸方向 不明 埋土 3層で構成さ



1. 7.5Y R 3/3 暗褐色。明褐色土と焼土粒を含む。
2. 10Y R 5/6 黄褐色。焼土粒を含む。
3. 5Y R 3/4 暗赤褐色。砂質。
4. 7.5Y R 3/3 暗褐色。砂質。
5. 7.5Y R 3/4 暗褐色。粘性あり。
6. 10Y R 4/6 褐色。焼土を含む。
7. 7.5Y R 4/6 褐色。焼土を含む。
8. 7.5Y R 3/2 暗褐色。焼土粒が混じる。粘性あり。
9. 7.5Y R 3/2 暗褐色。8層より焼土を多く含む。
10. 7.5Y R 3/4 暗褐色。粘性あり。
11. 5Y R 4/8 赤褐色。
12. 10Y R 4/6 褐色。焼土を含む。
13. 7.5Y R 2/1 黒色。粘性あり。



L = 109,500m



1. 10Y R 2/2 黒色。明褐色土が混じる。
2. 10Y R 2/2 黒褐色。焼土粒が混じる。

1. 7.5Y R 3/2 黒褐色。焼土。
2. 7.5Y R 3/1 黒褐色。小礫 ϕ 1~5cm大を含む。
3. 7.5Y R 1.7/1 黒色。小礫を含む。下部に火山灰がはいり。
4. 7.5Y R 2/2 黒褐色。砂質の明褐色土を含む。
5. 7.5Y R 2/2 黒褐色。4層の砂質土は認められない。
6. 10Y R 2/2 黒褐色。砂質の明褐色土がブロック状に含む。
7. 10Y R 2/2 黒褐色。砂質の明褐色土が全体に混じる。
8. 10Y R 2/2 黒褐色。明褐色土は認められない。
9. 10Y R 3/3 暗褐色。しまり有。粘性有。



1. 10Y R 2/2 黒褐色。焼土。炭化物が混じる。
2. 10Y R 2/2 黒褐色。1層より焼土。炭化物が混じる。
3. 5Y R 2/3 暗赤褐色。焼土。炭化物を全体に含む。
4. 10Y R 3/2 黒褐色。炭化物を含む。
5. 10Y R 2/2 黒褐色。砂質土。炭化物を含む。
6. 5Y R 3/3 暗赤褐色。全体が覆っている。ブロック状。
7. 10Y R 2/1 黒色。焼土粒を含む。
8. 10Y R 3/3 暗褐色。砂質。炭化物を含む。
9. 5Y R 2/1 黒褐色。物砂と焼土を含む。
10. 5Y R 4/6 赤褐色。粘性あり。硬くしまる。
11. 7.5Y R 3/2 黒褐色。炭化物。焼土を含む。
12. 5Y R 3/3 暗赤褐色。炭化物。明褐色土が混じる。
13. 5Y R 4/4 におい赤褐色。12層より炭化物が少ない。
14. 7.5Y R 3/2 黒褐色。粘性あり。
15. 2.5Y R 4/8 赤褐色。粘性あり。硬くしまる。
16. 5Y R 4/6 赤褐色。粘性あり。硬くしまる。

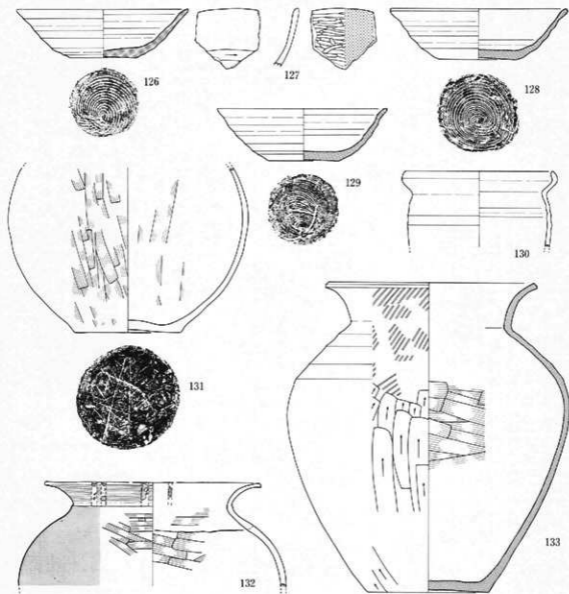
L = 109,500m



1. 5Y R 5/8 明赤褐色。砂質。しまり有。
2. 5Y R 5/8 明赤褐色。粘性や中。硬くしまる。
3. 5Y R 3/3 暗赤褐色。砂質。しまり有。炭化物を含む。
4. 5Y R 2/2 黒褐色。硬くしまっている。
5. 5Y R 4/4 におい赤褐色。粘性なし。
6. 5Y R 2/3 暗赤褐色。砂質。

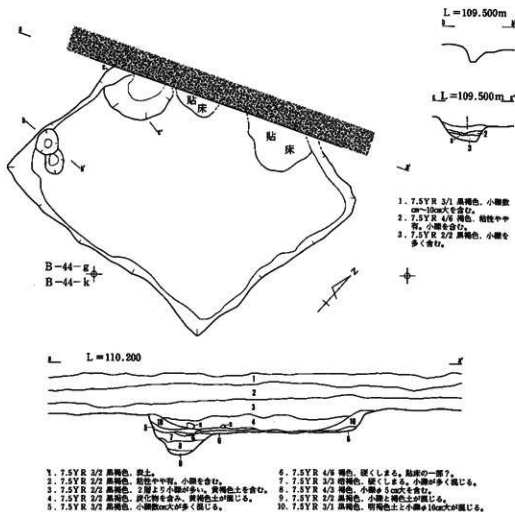
第27図 B-44-f 住居跡

れ、黒褐色土の単層に近い。上位は径10~20mの礫を含み、下位は径5cm前後の礫を多く含んでいる。第5層に十和田系火山灰が含まれている。壁 西壁と北壁は45度の角度をもち立ち上る。壁高は17~35cm 床面 全体に小礫で凸凹している。柱穴は北壁寄りに検出されている。



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	器高	底径		
126	床面	須恵器片	ロケロ	ロケロ底	ロケロ底	刷毛切り肌	ロケロ底	ロケロ底	13.7	3.9	5.4	S片		
127	埋土	土師器片	ロケロ	ロケロ底	ケズリ	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	B I	黒色粘層	
128	藁カマド	須恵器片	ロケロ	ロケロ底	ロケロ底	刷毛切り肌	ロケロ底	ロケロ底	13.5	4.6	5.6	S片		
129	床面	須恵器片	ロケロ	ロケロ底	ロケロ底	刷毛切り肌	ロケロ底	ロケロ底	13.6	4.2	5.6	S片		
130	灰面	土師器片	ロケロ	ロケロ底	ロケロ底	—	ロケロ底	ロケロ底	(15.8)	(8.0)	—	E I a		
131	藁カマド	土師器器	ロケロ	—	刷毛目	木葉肌	—	刷毛目	ナデ	—	(17.0)	11.4	F II	
132	埋土付記	土師器器	ホケロ	ミダキ	刷毛目	—	ミダキ	刷毛目	(23.0)	(11.0)	—	F II		
133	埋土口	須恵器器	ロケロ	ケズリ目	ケズリ	—	ロケロ底	刷毛目	ナデ	21.8	33.1	12.8	S壁	

第28図 B-44-f 住居跡出土遺物



第29図 B-44-g 住居跡

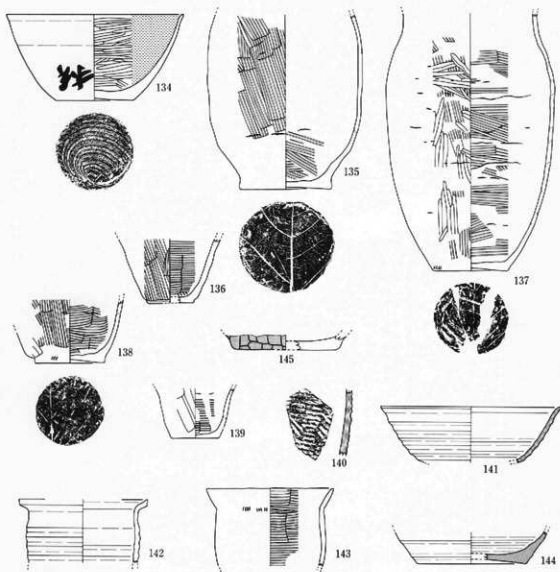
カマド 調査区内では検出されない。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第32図、図版55)

出土状況 床面からの出土は少なく、埋土中から出土している。土器 土師器は坏B I類、須恵器坏、甕がある。151はB-44-f住居跡出土の土器片と接合する。151、148は礫を多く含む埋土より出土している。

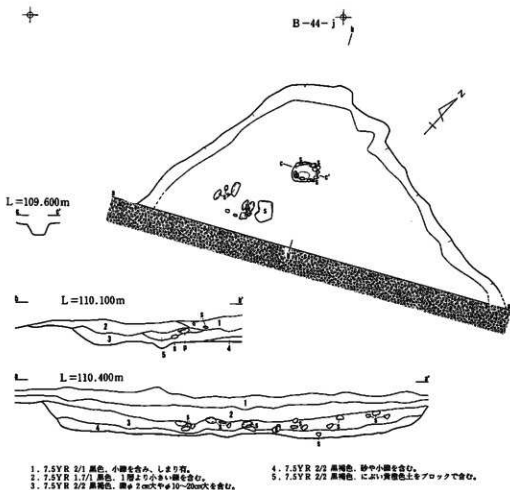
H-59-o 住居跡

遺構 (第33図、図版20)



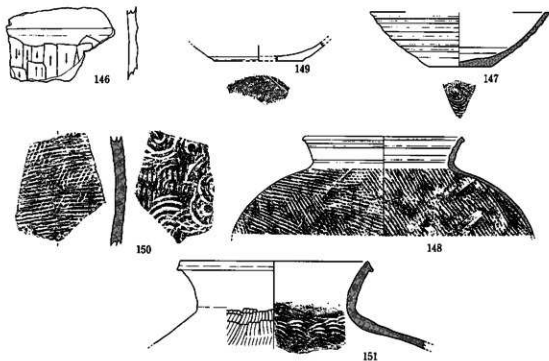
No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径		
134	カマド	土師器 鉢	ロクロ	口縁部 ロクロ肌	胴部 ロクロ肌	底部 目利木目付	口縁部 ミガキ	胴部 ミガキ	底部 ミガキ	14.2	6.9	6.2	B I	黒色処理
135	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉肌	—	刷毛目	刷毛目	—	(18.6)	9.8	C (I) 1b	
136	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	—	刷毛目	再調整	—	刷毛目	刷毛目	—	(5.1)	(3.6)	D (I) 1b	
137	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉肌	—	刷毛目	刷毛目	—	(27.5)	8.0	C II (I) b	
138	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉肌	—	刷毛目	刷毛目	—	(6.9)	7.4	D (I) 1b	
139	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	—	ナデ	再調整	—	刷毛目	刷毛目	—	(5.3)	5.0	D (I) 1	
140	埋土	須恵器 鉢	ロクロ	—	叩き目	—	—	—	—	—	—	—	S 變	
141	埋土	あかやき 鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(14.4)	(4.5)	—	A 坪	
142	埋土	土師器 鉢	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(13.8)	(6.3)	—	E II a	
143	埋土	土師器 鉢	赤ロクロ	帯瓦	帯瓦	—	刷毛目	刷毛目	—	(13.6)	(8.3)	—	D II 2 d	
144	埋土	須恵器 鉢	ロクロ	—	ロクロ肌	—	—	—	—	—	(3.4)	(11.6)	S 變	
145	埋土	土師器 鉢	—	—	—	内塗	—	ナデ	—	—	—	(8.0)	F I	

第30図 B-44-g 住居跡出土遺物



第31図 B-44-j 住居跡

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-60-m 住居跡の南西約5m 付近に位置している。平面形 方形 規模 2.5×2.5m 床面積 5.8m² 主軸方向 S-7'-W 埋土 細かい黄褐色土を含む暗褐色土と黒褐色土が主体を占める7層で構成されている。上位層には炭化物と暗赤褐色土が含まれている。壁 ほぼ直立している。壁高は28~35cm 床面 中央部のピット部分以外は硬く締まっている。周溝、柱穴は検出されない。カマド 南壁の東隅寄りに構築されている。袖部分は燃焼部の両側に竈を3個ずつ配置し、暗褐色のシルトで形作っている。焚口の両側に角亜礫(20~30×35cm)を埋設し、天井に角亜礫(43×17cm)を使用している。焼土は径62×40cm、厚さ7cmの楕円形状に形成され、支脚の石として角礫(17×15cm)が使用されている。煙道は緩やかに傾斜を持ちながら下がる。煙出口の形状は、ほぼ楕円形である。付属施設 中央部に径1.6×1.0m、深さ0.1m 前後の浅いピットが存在する。遺構の時期 出



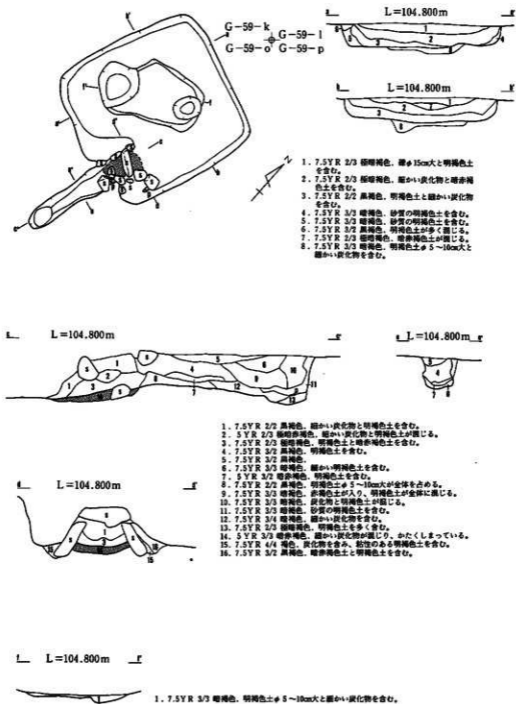
No	地点・階位	種類・器名	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径			
146	埋土	土師器壺	片口口	—	ケズリ	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	—	
147	埋土	須恵器坏	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	(14.4)	4.4	(6.0)	S坏
148	埋土	須恵器壺	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	(41.2)	(25.0)	—	S壺
149	埋土	あかやき坏	口口口	—	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	—	(1.3)	(4.0)	A坏
150	埋土	須恵器壺	口口口	—	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	—	—	—	S壺
151	埋土	須恵器壺	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	口口口	20.0	(9.0)	—	S壺

第32図 B-44-j 住居跡出土遺物

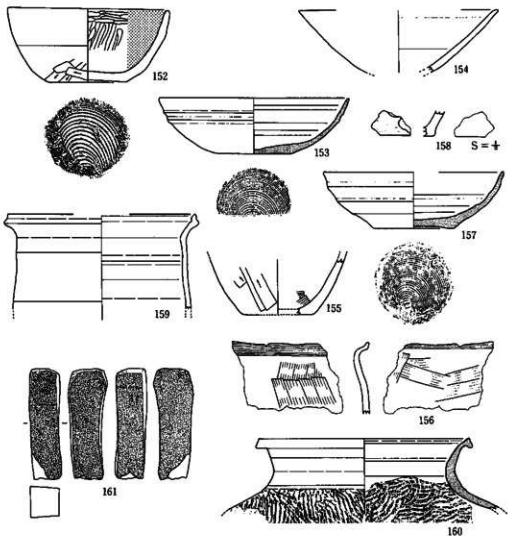
土遺物や住居形成から平安時代である。

遺物 (第34図、図版56)

出土状況 埋土下部を中心に、煙道部・カマドから出土している。遺物の出土は全体に少なく、床面からもあまりない。土器 坏では土師器坏B I類・B II類、須恵器坏、あかやき坏が出土している。154は底部が欠損して器型を正確にとらえられないが、器高の低い坏と推定される。壺は土師器D類・E類、須恵器壺が出土している。158は底部と胴部の破片から推定すると、10cm前後の土師器壺である。内外ともに丁寧に磨かれ丹塗されている。石製品 161は長さ10cm弱で手持ち砥石と推定される。4面の使用痕があり、面の境には磨面と別方向の擦痕がみられる。



第33図 G-59-o 住居跡



No	地点・層位	種類・器類	成形	外面調査			内面調査			寸法: cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	底径		
152	塚土下層	土師製杯	ロクロ	ロクロ痕	ケズリ	細かな切目痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	13.0	5.0	6.0	BⅡ	
153	塚土下層	土師製杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	細かな切目痕	ロクロ痕	ロクロ痕		(13.2)	4.5	5.8	SⅡ	
154	塚土	土師製杯	ロクロ	摩耗	—	—	—	—	—	(16.0)	(5.0)	—	BⅠ	
155	塚土	土師製器	赤ロクロ	—	刷毛目	再調査	—	刷毛目	ナデ	—	(5.0)	(6.8)	DⅠa	
156	コマド跡	土師製器	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	—	—	—	EⅠa	
157	塚土	土師製杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	細かな切目痕	ロクロ痕	ロクロ痕		(14.4)	4.5	6.4	SⅡ	
158	塚土	土師製器	赤ロクロ	—	丹塗	再調査	—	ミガキ	ナデ	—	—	—	F	
159	塚土	土師製器	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	(20.0)	(10.2)	—	EⅠa	
160	塚土	土師製器	ロクロ	ロクロ痕	切目	—	ロクロ痕	当て具痕	—	(22.6)	(7.6)	—	SⅡ	

No	出土地点・層位	器種	計測値: cm			産地: #	石質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ			
161	塚土	磁石	8.9	2.5	2.5	98	刷紋帯	4面使用、手持り?

第34図 G-59-o 住居跡出土遺物

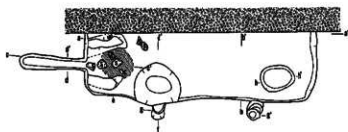
G-60-h 住居跡

遺構 (第35図、図版21)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-60-i 住居跡の北6m付近に位置する。北西部分が調査区外にあり、全体は検出できていない。平面形 方形を呈するものと推定される。規模 東南壁で3.7mを測る。床面積 (3.8) m² 主軸方向 S-44°-W 埋土 4層で構成され、細かい明褐色土を含む黒褐色土が大部分を占める。遺構検出面に浅黄色の火山灰(十和田系火山灰)が認められる。壁 直立 壁高20~30cm 床面 全体が軟弱である。柱穴、周溝は認められない。カマド 南西壁の南隅寄り。袖は黄褐色土と黒褐色土で作られ、燃焼部は径37×50cm、厚さ5cmの浅皿状に形成されている。燃焼部分には支脚用の石(14×15cm)と礫(10~20cm)2個、煙道部との境に表面が焼けている板状の石(16×12cm)がある。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第36図、図版56、57)

出土状況 埋土下部と床面から出土している。住居跡全体を調査していないためか、出土遺物は全体に少ない。土器 坏はB類とあかやき坏が数点出土している。墨書土器162の文字は一部であるために、判読できない。瓦は土師器変D類とE類が破片でしか確認できていない。石製品 168は表に1個、裏に2個の凹みと側面に磨面をもつ。



G-60-g, G-60-h
G-60-k, G-60-l

L=103.500m

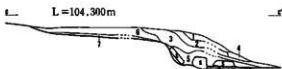


1. 7.5YR 2/1 黒色、シルト質、黄褐色土をわずかに含む。

L=104.300m_r



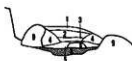
L=104.300m_f



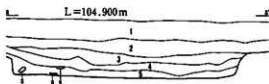
L=104.300m



L=104.400m



1. 10YR 3/2 黒褐色、シルト質、黄褐色土を含む。
2. 7.5YR 1.7/1 黒色、シルト質、黄褐色土を含む。
3. 2.5YR 2/2 極暗赤褐色、黄褐色土と細かい炭化物を含む。
4. 10YR 4/6 褐色、わずかに赤褐色土を含む。
5. 5YR 4/4 におい赤褐色、シルト質。
6. 5YR 2/4 暗暗赤褐色、細かい黄褐色土を含む。
7. 10YR 2/3 黒褐色、細かい黄褐色土を含む。
8. 2.5YR 4/8 赤褐色、しまっている。
9. 10YR 5/6 黄褐色、黒色土が5cm以下が全体に混じる。

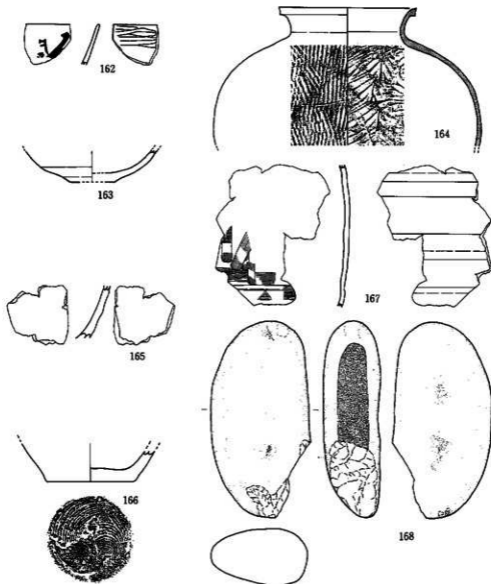


1. 7.5YR 3/2 赤褐色、黄土。
2. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい炭化物と褐色土を含む。
3. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい炭化物と明褐色土が5mm大を含む。
4. 7.5YR 3/2 黒褐色、明褐色土が5~10mm大が混じる。
5. 7.5YR 2/3 極暗褐色、細かい炭化物と明褐色土が混じる。
6. 7.5YR 3/1 黒褐色、明褐色土が多く混じる。

L=104.300m



第35図 G-60-h 住居跡



№	地点・層位	種類・器種	形状	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考	
				口縁径	胴径	底径	口縁径	胴径	底径	口縁径	胴径	底径			
162	埴土	土師器・杯	ロクロ	—	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	—	—	B(1)	
163	埴土	あかやき杯	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—	(2.0)	(3.6)	—	A杯	
164	灰土	灰土器	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—	(11.0)	(22.0)	—	S器	
165	埴土	土師器	浅口クロ	—	(厚純)	—	—	—	—	—	—	—	—	D(11)	
166	灰土	土師器	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—	(3.1)	7.8	—	E(1)	
167	埴土	土師器・壺	ロクロ	—	網毛目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

№	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ			
168	埴土	凹石	15.7	7.8	4.5	705	ダイヤモンド	側面に磨面

第36図 G-60-h住居跡出土遺物

G-60-i 住居跡

遺構 (第37図、図版22)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-59-o住居跡の北約6m付近に位置している。この住居跡は、表土を除去した段階で地床炉と長方形に近い輪郭が検出された。G-60-m住居跡と南東部分で重複している。重複関係はG-60-i住居跡が新期である。平面形 長方形を呈すると推定される。規模 8.0×6.9m 床面積 (53.4)m² 埋土 表土を除去した後で床面が確認されているため、暗褐色土を一部確認しただけである。断面 a-a'、b-b' は検出面を表示している。壁高は検出面から10cm前後。床面 硬く締まっている。G-60-m住居跡と重複する東側の一部に明褐色の砂質シルトで床を貼っている。柱穴はPP₁~PP₂₄と考えられるが、正しい配列は不明である。炉 中央よりやや南寄りに地床炉と推定される。径1.1×0.5mの焼土が検出されている。焼土は細かい炭化物が混じる暗赤褐色土で、非常に硬く締まっている。付属施設 北西隅に土坑を検出している。径1.7×0.7m、深さ0.1m前後の楕円形を呈する。出土遺物はなく住居跡に伴うものかは不明である。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第38図、図版57)

検出状況 埋土がほとんどない状態で精査を行ったので出土遺物は極少数である。遺物は東南壁の北寄りの床面(貼床)、PP₂、PP₃とPP₁₃から出土している。土器 土師器坏、土師器壺と須恵器坏の破片が出土している。図示した土師器坏170の胴部内側には炭化物が付着している。土師器壺169はクロコ整形であるがケズリ、刷毛目調整が顕著である。

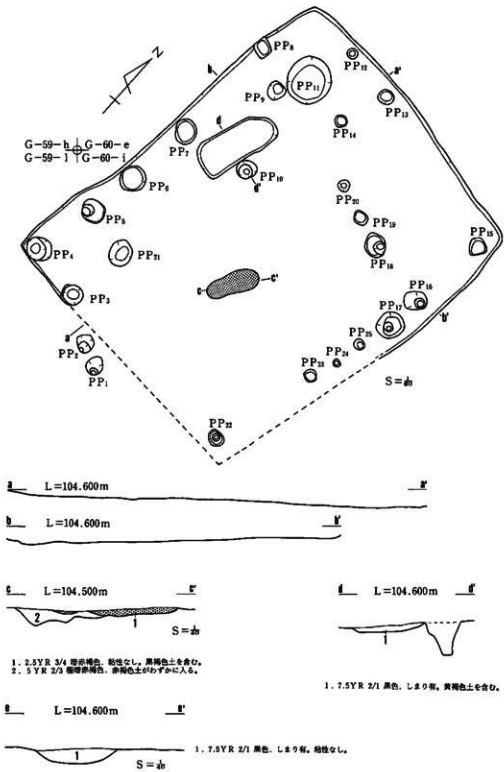
G-60-m住居跡

遺構 (第39、40図、図版22、23)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-59-g住居跡の北東約7mに位置する。カマドが北側に2基と南側に1基の計3基あることから、少なくとも2棟が重複していることを推定できる。新期をG-60-m①住居跡、古期をG-60-m②住居跡とする。G-60-i住居跡と北西部分で重複している。

G-60-m①住居跡

平面形 長方形を呈すると推定される。規模 4.4×5.0m 床面積 24.1m² 1号カマド 主軸方向 S-35°-W 埋土 黒褐色土と極暗褐色土を主体にして8層で構成される。下位層は炭化物と明褐色土を含み、砂質の明褐色土が硬くしめる第4層は、G-60-i住居跡の一部と思われる。壁 外傾から直立 壁高13~42cm 床面 全体に硬く締まる。柱穴はPP₁~PP₃が



1. 2.5YR 3/4 暗赤褐色。粘性なし。黒褐色土を含む。
 2. 5YR 2/3 暗褐色。赤褐色土がわずかに入る。

1. 7.5YR 2/1 黒色。しまり有。黄褐色土を含む。

1. 7.5YR 2/1 黒色。しまり有。粘性なし。

第37図 G-60-1 住居跡



170



169

No.	地点・層位	種類・群名	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	高さ	径		
169	竈床部分	土師器環	ロクロ	ロクロ底	ケズリ	—	ヨコナテ	刷毛目	—	—	—	—	B(1)a	
170	柱穴	土師器坪	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	—	B(1)	黒色結晶

第38図 G-60-i 住居跡出土遺物

考えられる。カマド 南西壁の南寄り、袖は礫(20~30cm)を芯材にして黒褐色土と明褐色土で被覆している。燃焼部は径50×42cm、厚さ8cmの円形を呈し、よく焼けている。土師器甕がカマドと煙出口から出土している。煙道は底面は水平で、煙出口付近で外傾して立ち上がる。

G-60-m②住居跡

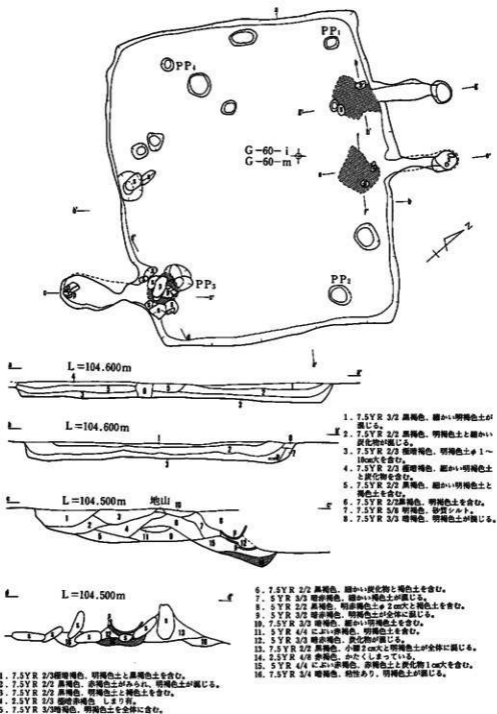
2号カマド 主軸方向 N-34'-E 位置 北東壁の中央部。本体 残存していない。焼土が燃焼部の全面に広がり径60×50cm、厚さ7cmの不整形を呈し、暗褐色土を含み硬く締まる。煙道部断面に一部地山の明褐色土がみられ、煙道は緩やかに傾斜し下がる。煙出口の埋土には小礫が20数個含まれている。

3号カマド 主軸方向 N-36'-E 位置 北東壁の西隅寄り。本体 残存していない。燃焼部の焼土が広い範囲に広がり径70×60cm、厚さ6cmの不整形を呈している。煙道は緩やかに傾斜して下がる。

まとめ・遺構の時期 埋土断面でとらえられなかったが、G-60-m住居跡は少なくとも2棟の住居跡の重複が推定される。これらの住居跡は平面形・規模・床面をほぼ共有し、カマドの作り替えが行われたと考えられる。カマド本体の残存状況や煙道部断面などから2号カマドと3号カマドは古期のものと推定した。出土遺物や住居形式から平安時代である。

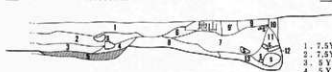
遺物(第41、42図、図版57、58)

出土状況 埋土下部を中心に、床面・カマド1・カマド2から出土している。出土遺物は土器と鉄製品がある。土器 環にはA類・B類・あかやき坪・須恵器坪があり、あかやき坪と須恵器坪が多く出土している。あかやき坪は173と178があり、173の底部が再調整されている。土師器甕はC類・D類・E類があり、E類の甕の出土が僅かに多い。カマド1から出土した176と179は出土状況からみて、セットで使用されたものと推定される。鉄製品 186と185は埋土下部より出土している。185は上半部分が欠損しているが釘と推定される。



第39図 G-60-m住居跡(1)

L=104,500m

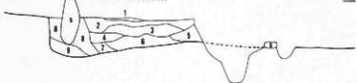


1. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい褐色土が混じる。
2. 7.5YR 2/3 暗褐色、炭化物を含み、褐色土が混じる。
3. 5YR 2/2 黒褐色、褐色土を含む。
4. 5YR 4/4 における赤褐色、褐色土が全体に混じる。
5. 2.5YR 3/4 暗赤褐色、北部は暗赤灰色に近い。
6. 7.5YR 3/3 暗褐色、炭化物を含み、褐色土が混じる。
7. 5YR 3/1 黒褐色、全体が焼けている感じ。
8. 5YR 4/3 における赤褐色、細かい炭化物が混じる。
9. 7.5YR 2/2 黒褐色、明褐色土が混じる。
9. 7.5YR 3/1 黒褐色、9層が焼けている感じ。
10. 7.5YR 2/2 黒褐色、褐色土を含む。
11. 7.5YR 2/3 暗褐色、細かい炭化物と褐色土を含む。
12. 7.5YR 3/2 黒褐色、褐色土を含み、炭化物が混じる。
13. 7.5YR 3/1 黒褐色、粘土があり、褐色に近い。
14. 7.5YR 4/6 褐色、暗褐色土が混じり、しまっている。

L=104,500m



L=104,500m



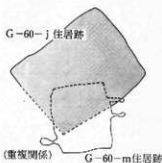
1. 7.5YR 4/4 褐色、黒褐色土が混じり、かたくしまっている。
2. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい炭化物と褐色土が混じる。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色、赤褐色土と褐色土が混じる。
4. 5YR 3/1 黒褐色、褐色土と暗赤褐色土が混じる。
5. 5YR 2/2 黒褐色、明褐色土を含む。

6. 5YR 3/2 暗赤褐色、焼土粒が混じる。
7. 5YR 3/1 黒褐色、明赤褐色土を含み、明褐色土が混じる。
8. 5YR 3/2 暗赤褐色、焼土粒を含み、明褐色土が混じる。
9. 5YR 2/2 黒褐色、粘土あり、明褐色土を含む。

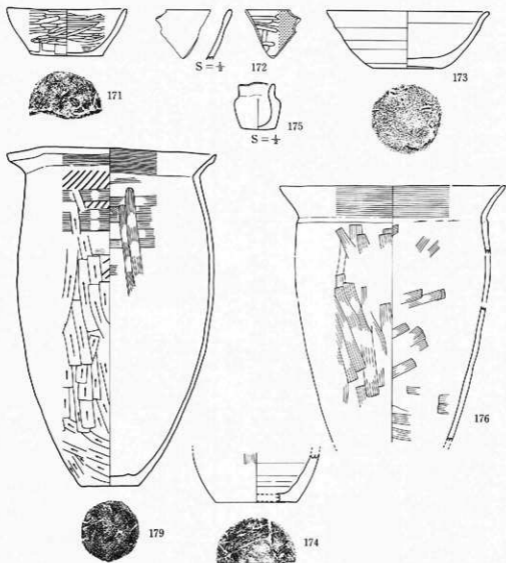
L=104,300m



1. 5YR 4/6 赤褐色、細かい炭化物を含み、黒褐色土が混じる。
2. 5YR 3/1 黒褐色、明褐色土が混じる。
3. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい炭化物を含み、明褐色土が混じる。
4. 7.5YR 3/3 暗褐色、細かい暗赤褐色土と明褐色土が混じる。

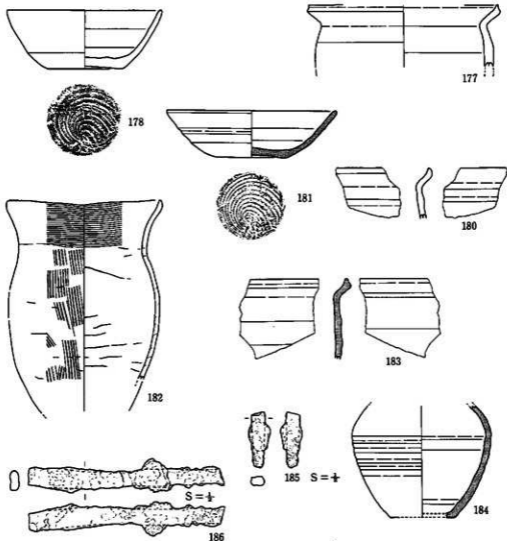


第40図 G-60-m住居跡(2)



No	地点・層位	種類・器類	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口径	体高	底径		
171	オヤド2	土師製杯	赤ロクロ	ミダキ	ミダキ	内裏無	ミダキ	ミダキ	ミダキ	(9.7)	3.8	5.8	A II b	
172	オヤド1	土師製杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	—	B I	黒色結晶
173	オヤド2	赤かやき杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌	内裏無	ロクロ肌	ロクロ肌	—	(13.0)	4.6	5.6	A 3F	
174	オヤド2	土師製壺	ロクロ	—	ロクロ肌	内裏無	—	ロクロ肌	—	—	(5.3)	(8.6)	D (X)	
175	埋土	ヒコナツ土器	手捏ね	—	—	—	—	—	—	2.4	3.8	2.8	小壺	
176	オヤド1	土師製壺	赤ロクロ	ヨコナデ	網毛目	—	ヨコナデ	網毛目	—	(24.0)	(28.2)	—	C I 2 b	
179	オヤド1	土師製壺	赤ロクロ	ヨコナデ	網毛目	内裏無	ヨコナデ	網毛目	ナデ	22.3	36.1	6.2	C II 1 b	

第41図 G-60-m住居跡出土遺物(1)



№	地点・層位	種類・器種	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm		分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ		
177	カマド2	土師器類	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	(39.2)	(6.6)	—	Ⅱ1a
178	カマド2	あかやき球	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	鉄粒付り痕	ロクロ痕	ロクロ痕	—	12.3	4.7	6.0	A呼
180	塚土	土師器類	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	—	—	—	E(1)a
181	カマド2	鉄器類	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	鉄粒付り痕	ロクロ痕	ロクロ痕	—	13.6	3.8	5.6	S呼
182	墓中1	土師器類	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	—	—	16.2	(22.5)	—	CII2b
183	塚土	土師器類	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	—	—	—	S器
184	灰面	須恵器類	ロクロ	—	ロクロ痕	—	—	ロクロ痕	—	—	(11.9)	(7.0)	S器

№	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
185	塚土下部	釘?	13.0	0.7	0.5	3.6	
186	塚土下部	刀子	19.4	0.9	0.5	16.3	

第42図 G-60-m住居跡出土遺物(2)

G-60-P 住居跡

遺構 (第43、44図、図版24)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-60-h住居跡の東南約7m付近に位置する。平面形 方形 規模 2.3×2.3m 床面積 5.4㎡ 主軸方向 カマド1号 E-51'-S、カマド2号 E-20'-N 埋土 黄褐色土を含む黒色土と黒褐色土の4層で構成されている。壁 いくぶん外傾 壁高16~26cm 床面 硬く締まっている。柱穴、周溝は検出されない。カマド カマド1号；南壁の東隅寄り 煙道は僅かに下がり、煙出口でほぼ垂直に立ち上がる。カマド2号；東壁の南隅寄り 煙道は緩やかに傾斜して下がり、煙出部分は円形のピットになっている。北側の袖は数個の角並礫(14~30cm)を芯材にし、シルトで被覆している。南側の袖は、礫が露出して残りが悪い。燃焼部は径51×36cm、厚さ6cmの浅皿状を形成している。煙道部との境がよく焼けて、硬い。付風施設 西側にピット3基検出された。平面形は楕円形を呈し、開口部径40~65×55~80cm、深さ10~20cmの浅皿状である。埋土は、細かい炭化物を含む黒褐色土が主体である。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第45図、図版58)

出土状況 出土遺物はごく僅かである。土器 カマド埋土から出土した土師器D類の187以外は土師器製の破片である。

H-60-c 住居跡

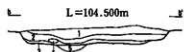
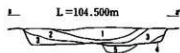
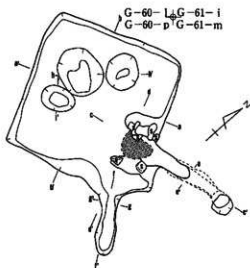
遺構 (第46、47図、図版25)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-60-m住居跡の東約7mに位置する。表土を除去した段階で、ほ場整備による攪乱が著しく北壁の一部を確認できただけであった。南壁付近の焼土の散らばりと一回り小さいプランが検出されたことから、2棟の重複が推定できる。新时期をH-60-c①住居跡、古期をH-60-c②住居跡とする。

H-60-c①住居跡

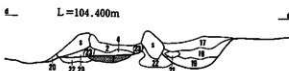
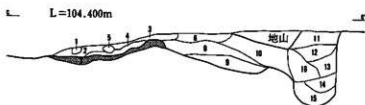
遺構 (第46図、図版25)

平面形 方形と推定される。規模 4.0×3.9m 床面積 (14.4)㎡ 主軸方向 N-1'-W 埋土 8層で構成されている。上位層は炭化物と明褐色土が混じる黒褐色土で、下位層は炭化物が混じる褐色土である。壁 ほぼ直立 壁高21~50cm 床面 軟弱である。南壁寄りは、砂質の黄褐色土で床面を貼っている。柱穴3個を検出、周溝は検出されない。カマド 南壁の東寄り 右側の袖は並礫(30×21cm)を芯材にしてシルトで被覆している。燃焼部は径110×60cm、厚さ10cmの不整形を形成している。3個の礫(16~30×10~16cm)は天井部と左袖の一部と思われる。煙道部は緩やかに傾斜をもちながら下がり、煙出口は円形のピットになっている。



a-a', b-b'

1. 5 YR 1.7/1 黒色、シルト質。
2. 10 YR 2/2 黒褐色、黄褐色土をわずかに含む。
3. 10 YR 3/3 黒褐色、堅くしやう、小礫を含む。
4. 10 YR 5/6 黄褐色、堅くしまっている。
5. 7.5 YR 3/2 黒褐色、h-tのI層。

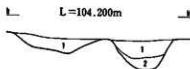


G60-G-60-P住居跡

1. 7.5 YR 2/3 暗褐色、明褐色土を含む。
2. 7.5 YR 3/3 暗褐色、暗赤褐色土をわずかに含む。
3. 5 YR 3/6 暗赤褐色、土礫片を含む。
4. 5 YR 3/4 暗赤褐色、炭化物を少量含む。
5. 7.5 YR 5/6 明褐色。
6. 7.5 YR 3/2 黒褐色、細かい明褐色土が全体に混じる。
7. 5 YR 3/4 暗赤褐色、裏側部分は赤褐色にちかいかい。
8. 7.5 YR 2/2 黒褐色、細かい明褐色土を含む。
9. 7.5 YR 3/2 黒褐色、明褐色土がブロック状に混じる。
10. 7.5 YR 3/1 黒褐色、炭化物5mm穴を含む。

11. 7.5 YR 2/2 黒褐色、細かい炭化物が混じる。
12. 7.5 YR 3/1 黒褐色、炭化物φ1cm大と明褐色土を含む。
13. 7.5 YR 4/3 褐色、砂質シルト、炭化物を含む。
14. 7.5 YR 4/4 褐色、赤褐色土φ5mm穴を含む。
15. 7.5 YR 4/3 褐色、明褐色土が混じる。
16. 7.5 YR 3/2 黒褐色、細かい明褐色土が全体に混じる。
17. 7.5 YR 2/2 黒褐色、炭化物と明褐色土をわずかに含む。
18. 7.5 YR 3/1 黒褐色、炭化物と暗褐色土を含む。

19. 7.5 YR 3/3 暗褐色、炭化物と明褐色土が混じる。
20. 7.5 YR 3/3 暗褐色、炭化物と黄土を含む。
21. 7.5 YR 5/6 明褐色、砂質シルト。
22. 7.5 YR 3/3 暗褐色、明褐色土を含み、非常にしまっている。
23. 7.5 YR 3/2 黒褐色、明褐色土が混じる。



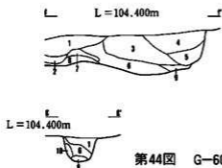
h-h'

1. 7.5 YR 3/2 黒褐色、炭化物、明褐色土を含む。
2. 7.5 YR 4/3 褐色、粘性あり、黒褐色土を含む。

i-i'

1. 7.5 YR 3/1 黒褐色、細かい炭化物、黄土、明褐色土を含む。

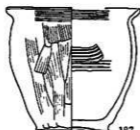
第43図 G-60-p住居跡(1)



f-f', g-g'

1. 7.5Y R 2/2 黒褐色、炭化物、明褐色土を含む。
2. 7.5Y R 3/1 黒褐色、明褐色土と暗褐色土を含む。
3. 7.5Y R 4/2 暗褐色、炭化物が多く混じる。
4. 7.5Y R 2/1 灰色、明褐色土 ϕ 1~2cmと炭化物を含む。
5. 7.5Y R 2/2 黒褐色、砂質の明褐色土を含む。
6. 7.5Y R 4/4 褐色、黒褐色土を含む。
7. 7.5Y R 3/4 暗褐色、黒褐色土をわずかに含む。
8. 7.5Y R 3/3 暗褐色、明褐色土を含む。
9. 7.5Y R 4/3 褐色。
10. 7.5Y R 3/1 黒褐色、明褐色土を含む。

第44図 G-60-p 住居跡 (2)



登録番号	地点層位	輪郭器種	形状	外面調査		
				口縁部	胴部	底部
187	カマド埋土	土師器 壺	舟口クロ	ヨコナア	刷毛目	

内面調査			計測値 cm			分類
口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径	
ヨコナア	刷毛目	ナア	14.3	13.0	7.9	D II 1 a



第45図 G-60-p 住居跡 出土遺物

H-60-c ②住居跡

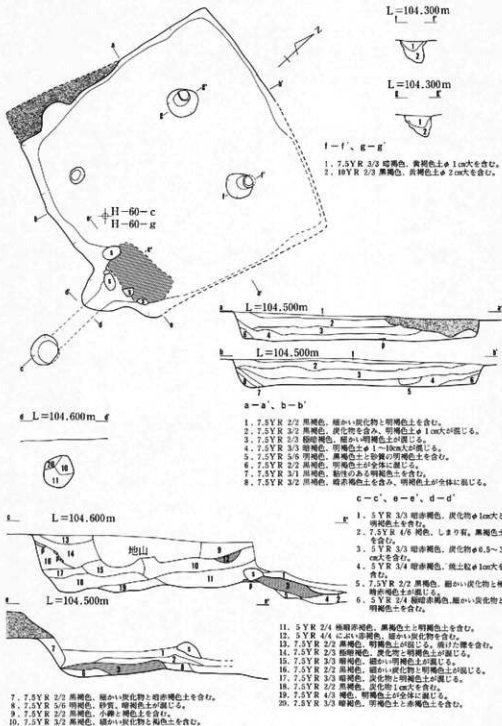
遺構 (第47図、図版25)

平面形 方形と推定される。規模 3.3×(3.2) m 床面積 (9.4) m² 主軸方向 不明 壁 南壁は外傾し、他は不明。壁高はH-60-1 ①住居跡の床面まで2~9 cmである。床面 軟弱、柱穴は4個検出、周溝は検出されない。カマド 南壁の中央部と推定される。煙道・煙出口は不明。

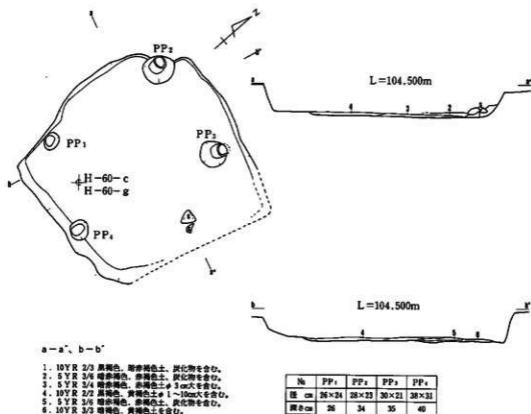
まとめ・遺構の時期 2棟の住居跡の重複と推定される。柱穴1~3は共有し、柱穴4は①住居跡右袖の下から検出されたことから古期の住居跡に帰属しているものと考えられる。出土遺物や住居形式より平安時代である。

遺物 (第48、49図、図版59)

出土状況 埋土下部、H-60-c ②住居跡のカマド付近を中心にカマド本体・床面から出土している。土器 土師器はB I類、B IV類が多く出土している。図示した坯のうち底部が再

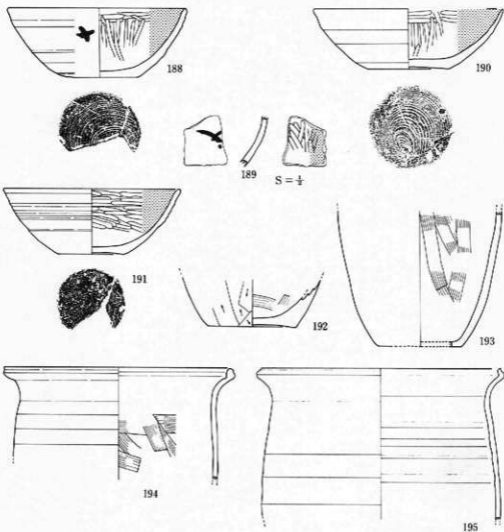


第46図 H-60-C住居跡(1)



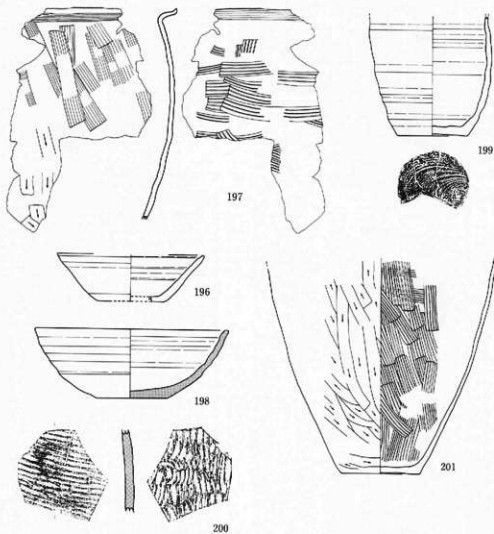
第47図 H-60-c 住居跡 (2)

調整されているのは191だけである。墨書土器188と倒位に書かれた189の文字は判読できない。土師器壺はC類、D類、E類が出土しているが、出土数はE類が多い。



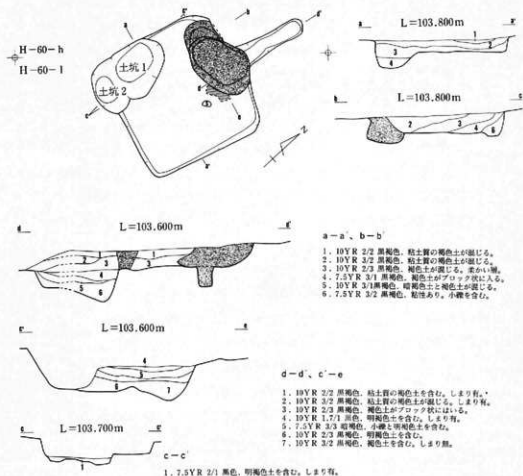
No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
188	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	陶師余すり痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	14.3	5.6	6.4	B I	黒色粘理
189	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ミガキ	ミガキ	—	—	—	—	B I	黒色粘理
190	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	陶師余すり痕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(15.2)	4.5	6.6	B I	黒色粘理
191 (埋土)	土師器杯	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	再製	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(14.2)	5.3	5.2	B I V	黒色粘理
192	埋土上部	土師器壺	津ロクロ	—	ヘラツズリ	再製	—	網毛目	ナデ	—	(3.8)	7.0	D I b	—
193	埋土	土師器壺	津ロクロ	—	ヘラツズリ	—	—	網毛目	—	—	(14.4)	(8.8)	C I b	—
194	床面	土師器壺	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	網毛目	—	24.2	(11.9)	—	E I a	—
195	溝出口	土師器壺	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	(25.4)	(16.0)	—	E I a	—

第48図 H-60-c 住居跡出土遺物 (I)



No.	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	高さ	器径		
196	埋土	あかやき坪	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ底	回転糸切り重	ロクロ肌	ロクロ底	—	(11.8)	(3.8)	(5.2)	A坪	
197	埋土	土師器埴	非ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	—	—	—	E 1 a	
198	床面	須恵器坪	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ底	回転糸切り重	ロクロ肌	ロクロ底	ナデ	(15.4)	5.5	(6.2)	S坪	
199	床面	土師器埴	ロクロ	—	ロクロ底	回転糸切り重	—	ロクロ底	ナデ	—	(12.7)	7.5	S(1)	
200	埋土	須恵器埴	ロクロ	—	タタキ目	—	当て基礎	—	—	—	—	—	S埴	
201	埋土	土師器埴	非ロクロ	—	ヘラナデ目	内調整	—	刷毛目	ナデ	—	(22.9)	8.4	E 1 1)	

第49図 H-60-c 住居跡出土遺物(2)



第50図 H-60-1 住居跡

H-60-1 住居跡

遺構 (第50図、図版26)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、H-60-c住居跡の東約6m付近に位置する。住居跡全体が硬く押し潰されたようであり、埋土も硬く締まっている。平面形 方形 規模 2.1×2.1m 床面積 (4.4)㎡ 主軸方向 N-14°-E 埋土 粘土質の褐色土が混じる黒褐色土が大部分を占める。壁 直立する。壁高12~24cm 床面 硬く締まっている。柱穴、周溝は検出されない。カマド 北壁中央部 本体部分は攪乱により不明である。右袖部分に径40×10cmの範囲で表面が焼けているのが認められる。煙道は、緩やかに上がり勾配である。煙出口の形状は不明である。付属施設 南西部に土坑が1基存在する。規模は径1.3×0.8m、深さ0.1mで、黄褐色土を含む黒色土の埋土である。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物

出土状況 床面やカマド部分からの出土はなく、遺物は埋土から出土している。土器 土師器環と甕の細片が極僅か出土している。細片であり、図化を省略する。

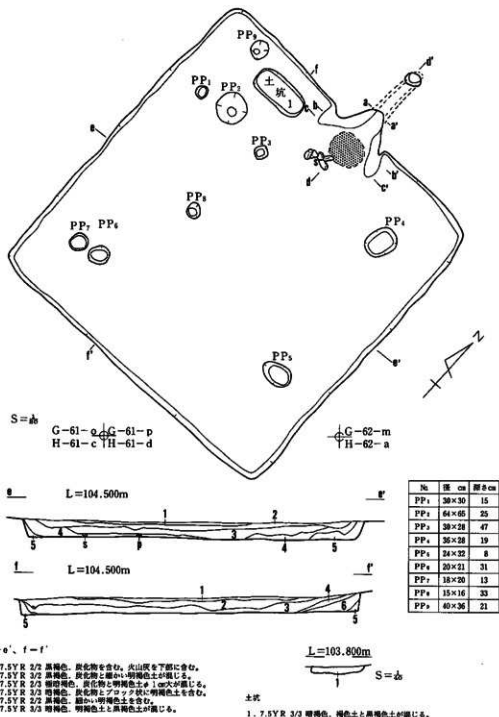
G-61-1 住居跡

遺構 (第51、52図、図版27)

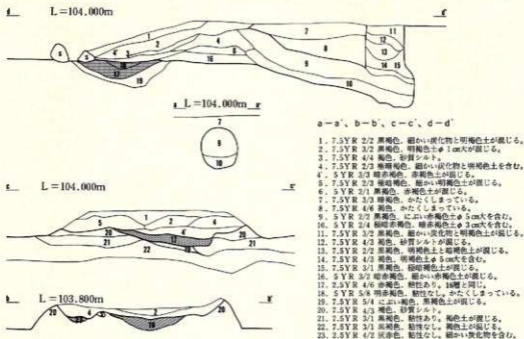
出土状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-62-0住居跡の西南約6mに位置する。表土を除去した後に方形の輪郭が確認されている。本住居跡とH-60-b溝が一部重複し、住居跡の南西壁に溝跡が確認できる。平面形 方形 規模 7.1×7.1m 床面積 51.3㎡ 主軸方向 N-4°-E 埋土 黒褐色土と暗褐色土を主体に6層で構成されている。全体に硬く締まり、細かい炭化物と明褐色土を含んでいる。遺物は埋土全体から出土し、十和田系火山灰は第1層の中央部に多くみられる。壁 直立 壁高30~42cm 床面 全体に硬く締まる。柱穴はPP₁~PP₉が考えられるが、配列は不明である。カマド 北壁中央部 本体部は崩落しており、焚口付近に約20~30cm大の角亜礫が残っている。燃焼部は径80×60cm、厚さ12cmの円形状に形成され、よく焼けて締まっている。煙道は緩やかに傾斜して下がっている。煙道と地山の境はよく焼けて締まっている。煙出口は径28×34cmのほぼ円形を呈している。付属施設 北西隅に土坑がI基存在する。掘り込みも浅く、遺物は出土していない。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第53~56図、図版60、61)

出土状況 火山灰を含む第1層より下の埋土を中心に、床面・カマドから出土している。出土遺物量はC調査区の中でもっとも多い量である。土器 環類では、土師器環AII a・B I類・B V類・B VI類、あかやき環と須恵器環がある。出土数ではB I類、あかやき環と須恵器環が多い。ロクロ使用の土師器環209と205は底部が再調整されている。墨書土器210の文字は判読不能である。あかやき環211・214・212は底部がヘラ切りである。208はあかやきの高台付環で、内面が黒色処理されている。須恵器環215はヘラで再調整されている。須恵器213は「つまみ」がない蓋である。土師器甕C類・D類が出土しているが、土師器甕E類の出土がみられない。土師器甕222は内面が黒色処理されている。土師器甕F類の228と229は口頸部から体部にかけて丹が塗られている。228は口縁部内外面に3本一組の斜線を描き、229は3本一組の縦線を描いている。228は口頸部より下の部分、229は口縁部と胴部を区切る沈線より下の部分に丹が塗られている。石製品 石皿(225)、磨石(226)と砥石(231)の3点が出土している。砥石231は3面に研ぎ面がある。図の上半部と下半部に分かれて出土している。鉄製品 刀子(230)1点が出土している。



第51図 G-61-I 住居跡 (I)



第52図 G-61-1 住居跡(2)

H-61-b 住居跡

遺構 (第57図、図版28)

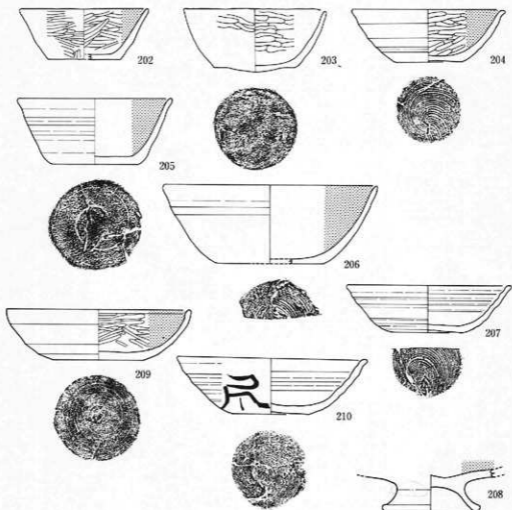
検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-60-P住居跡の東約5mに位置する。H-60-b溝跡と重複関係がある。住居跡が古期のものである。平面形 いびつな方形 規模 2.3×2.5m 床面積 5.4m² 主軸方向 E-6°-N 埋土 褐色土を含む黒褐色土2層で構成されている。壁 上部は削平されているが、直立する。床面 硬く締まっている。柱穴、周溝は検出されない。カマド 東壁の南隅寄り 袖は明褐色土が混じる褐色のシルトで作られている。煙道は検出されなく、煙出口は円形のピットが掘り込まれている。遺構の時期 出土遺物や住居形式より平安時代である。

遺物 (第57図、図版62)

出土状況 埋土部分とカマド部分から数点出土しているだけである。土器 土師器環と土師器壺の細片がある。土師器環256は摩耗が著しくミガキの単位が不鮮明である。他の遺物は図示を省略する。

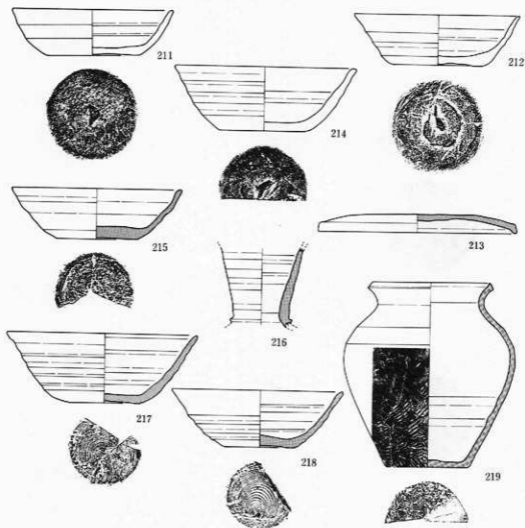
H-61-h 住居跡

遺構 (第58図、図版29)



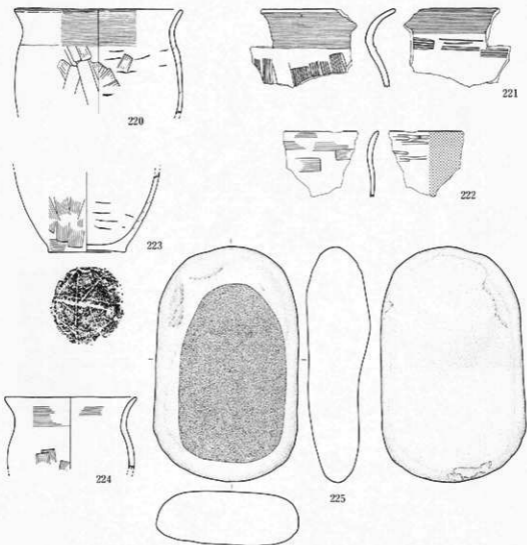
No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整				内面調整			計測値:cm			分類	備考	
				口縁部	胴部	底部		口縁部	胴部	底部	口	径	高さ			径
202	塚土	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ			ミガキ	ミガキ			(19.4)	4.0	5.8	AII*	黒色処理
203	塚土	土師器杯	赤ロクロ	ミガキ	ミガキ			ミガキ	ミガキ			11.4	5.0	6.8	BI	
204	床面	土師器杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		羽根未切り肌	ミガキ	ミガキ			12.1	4.2	5.4	BI	黒色処理
205	塚土	土師器杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		ヘラ切り肌		不明			(12.4)	5.3	7.2	BVI	黒色処理
206	塚土	土師器杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		羽根未切り肌		(摩耗)			(8.6)	6.3	(8.4)	BI	黒色処理
207	塚土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		羽根未切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌			(13.0)	3.8	5.5	A杯	
208	塚土下部	高台付杯	ロクロ	—	—		—	—	—			—	(2.7)	7.8	A(高台)	黒色処理
209	塚土	土師器杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		ヘラ切り肌	ミガキ	ミガキ			(14.8)	4.1	7.0	BV	黒色処理
210	塚土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ肌		羽根未切り肌	ロクロ肌	ロクロ肌			15.0	4.5	6.0	A杯	赤書

第53図 G-61-I 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	種類・器名	形状	外面調整			内面調整			計測値・cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口	径	高		
211	ホマ下地	あおやき环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	へタ切り底	ロタロ底	ロタロ底	12.9	3.8	7.4	A环		
212	埋土	あおやき环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	へタ切り底	ロタロ底	ロタロ底	13.2	4.1	7.4	A环		
213	埋土	須恵器蓋	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	—	ロタロ底	ロタロ底	(15.8)	1.4	—	S蓋		
214	埋土	あおやき环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	へタ切り底	ロタロ底	ロタロ底	(14.4)	5.1	7.1	A环		
215	埋土	須恵器环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	へタ切り底	ロタロ底	ロタロ底	(12.6)	3.9	6.4	S环		
216	灰層	須恵器香	ロタロ	ロタロ底	—	—	ロタロ底	—	—	—	8.1	S香		
217	埋土	須恵器环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	赤切り底	ロタロ底	ロタロ底	15.3	5.6	5.7	S环		
218	埋土	須恵器环	ロタロ	ロタロ底	ロタロ底	赤切り底	ロタロ底	ロタロ底	13.7	4.6	5.6	S环		
219	埋土	須恵器蓋	ロタロ	ロタロ底	大ナリ	不明	ロタロ底	ロタロ底	(12.4)	19.7	8.4	S蓋		

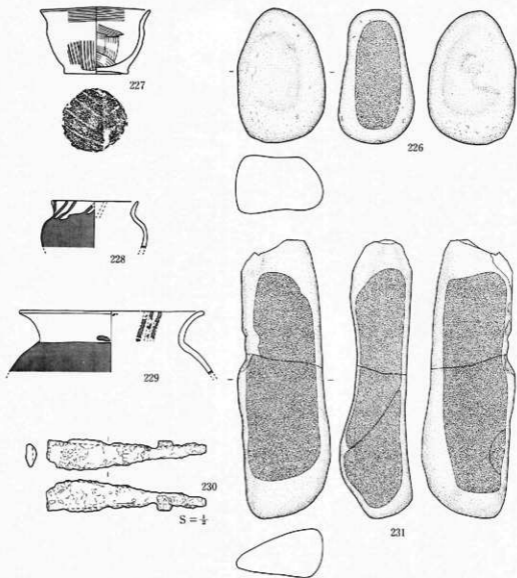
第54図 G-61-1 住居跡出土遺物(2)



No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm		分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口徑	高さ		
220	灰層	土師器類	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(18.0)	(11.7)	—	CH3b
221	埋土	土師器類	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	—	—	—	—	—	—	CI1b
222	埋土	土師器類	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ミダキ	ミダキ	—	—	—	—	CH3a
223	埋土下部	土師器類	赤ロクロ	—	刷毛目	木葉痕	—	ナデ	ナデ	—	(6.6)	8.2	CI1b
224	埋土	土師器類	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	—	—	(14.0)	(7.8)	—	DH3b

No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石	質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ				
225	埋土	石皿	25.2	15.3	6.8	3,800	輝石安山岩	長軸方向に磨面	

第55図 G-61-1 住居跡出土遺物(3)

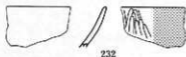
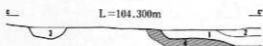
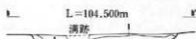
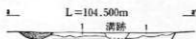
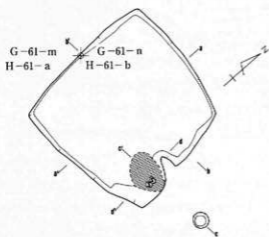


No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口径	高さ	底径		
227	床面	土器器壁	赤ロクロ	ヨコナデ	縞毛目	木葉痕	ヨコナデ	縞毛目	ナデ	(11.6)	7.0	6.8	D II 2 b	
228	埋土	土器器壁	赤ロクロ	ミゴト丹塗	ミゴト丹塗	—	ミガキ	ミガキ	—	(9.2)	(5.0)	—	F	
229	埋土	土器器壁	赤ロクロ	ミゴト丹塗	ミゴト丹塗	—	ミガキ	ミガキ	—	(19.6)	(6.6)	—	F	

No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石質	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ			
226	床面	礫石	10.6	6.9	4.6	535	礫石安山岩	側面に磨痕
231	埋土下部	砥石	29.9	9.3	7.2	2,600	ゲイサイト	3面に研ぎ面

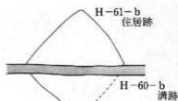
No	出土地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
230	埋土下部	刀子	8.5	1.3	0.3	12.4	先端部欠損

第56図 G-61-1 住居跡出土遺物(4)



232

S=+



(重複関係)

a-a', b-b'

1. 7.5YR 2/2 黒褐色、 ϕ 1cm大の褐色土と炭化物が混じる。
2. 7.5YR 3/1 黒褐色、 ϕ 5mm大の褐色土が混じる。

c-c', d-d'

1. 7.5YR 3/2 黒褐色、細かい炭化物と炭土が混じる。
2. 7.5YR 3/3 暗褐色、明褐色土が全体に混じる。
3. 7.5YR 2/2 黒褐色、褐色土 ϕ 5~10mm大を含む。
4. 5YR 4/3 におい赤褐色、炭化物と炭土(2.5YR 4/6)が混じる。
5. 7.5YR 4/3 褐色、砂質シルト質の明褐色土を含む。
6. 7.5YR 2/2 黒褐色、褐色土と細かい炭化物を含む。
7. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい炭土(5YR 2/3)を含む。
8. 7.5YR 3/2 黒褐色、褐色土 ϕ 5~20mm大を多く含む。
9. 7.5YR 5/6 暗褐色、黒褐色土と炭土が混じり、かたくしまっている。

No.	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	高さ	底径		
232	埋土	土師器片	ロクロ	ロクロ肌	ロクロ面	—	ミガキ	ミガキ	—	—	—	—	B(1)	黒色処理

第57図 H-61-b 住居跡、出土遺物

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-61-1住居跡の南東約4mに位置している。遺構は北側部分でH-62-a住居跡と重複し、東壁付近が用水路工事のために攪乱を受けている。平面形 方形を呈すると推定される。規模 3.1×3.2m 床面積 (9.5)m² 主軸方向不明 埋土 黒褐色土、褐色土、暗褐色土を主体に9層で構成され、全体は硬く締まっている。上位は攪乱により砂利、炭化物、焼土が混じり、下位は明褐色土を含む黒褐色土が大部分を占める。壁 ほぼ直立 壁高20~33cm 床 硬く締まっている。柱穴、周溝は検出されない。カマド 南壁の東寄りと推定される。住居跡の東南部分に攪乱があり、カマドの構造は不明である。燃焼部の焼土は径120×90cm、厚さ8cmの広い範囲に広がっている。煙道、煙出口は検出されない。付属施設 西壁付近にピットを4基検出している。規模は径50~97×50~60cm、深さ8~31cm、埋土は粘性をもつ黒褐色土である。遺構の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

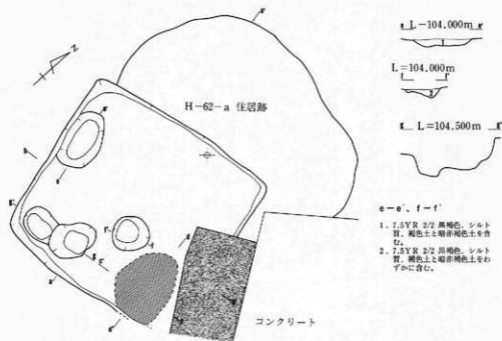
遺物 (第59図、図版62)

出土状況 カマド部分 (攪乱を受けた焼土部分) と埋土から出土している。攪乱を受けているためか出土遺物はごく僅かである。土器 土師器坏B類と推定される234、ログロ使用の土師器甕236と須恵器甕235を除いては土師器の破片である。

G-62-0住居跡

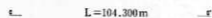
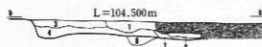
遺構 (第60、61図、図版30)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-61-1住居跡の北東約2m付近に位置している。表土を除去している段階で煙道部の隙が確認でき、輪郭の検出を行った。平面形 方形 規模 7.6×7.2m 床面積 54.0m² 主軸方向 N-5°-W 埋土 細かい明褐色土と小礫を含む黒色土と黒褐色土を主体に5層で構成されている。埋土は全体が硬く締まり、十和田系火山灰は第1層と第2層の間に検出される。壁 直立壁高16~39cm 床面 壁際を除いて硬く締まっている。柱穴はPP₁~PP₄が考えられる。柱穴はPP₁とPP₄は対角線上にあり、PP₂とPP₃は壁に寄せている。カマド 北壁の中央部 本体部は崩落し、カマドに使用した礫が数個散乱している。燃焼部はよく焼けて硬く締まり、径62×56cm、厚さ8cmの不整形を呈している。また、燃焼部付近に径1×1mの範囲で床面より5~10cm低い区域がある。煙道は緩やかに上がり勾配である。煙道と煙出口は幅10~30cmの平な隙を用いて作られ、煙出口に近いところに40~50cmの長さの隙を横位に載せている。煙道部の隙は根元部分を暗褐色土で固め、砂質の褐色土で隙を覆うようにして作られている。煙出口は隙を4個配列し、径31×28cmの楕円形を形作っている。付属施設 北東隅と南壁中央に土坑が2基検出されている。規模は径60×50cm前後、深さ20~30cm前後の楕円形を呈している。PP₃から鉄製品が出土している。遺構



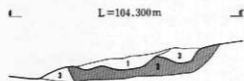
a-a', b-b'

1. 7.5YR 4/2 灰褐色、黒褐色土、明褐色土が混じる。
2. 7.5YR 3/1 黒褐色、明褐色土がブロックに含まれる。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい明褐色土を含む。
4. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい明褐色土を含む。
5. 7.5YR 2/3 棕褐色、炭化物と明褐色土を含む。
6. 7.5YR 4/3 褐色、粘性あり、粒土が混じる。
7. 7.5YR 3/3 暗褐色、粘性あり、細かい炭化物を含む。
8. 7.5YR 2/2 黒褐色、f-f' の2層と同じ。
9. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい炭化物と明褐色土を含む。

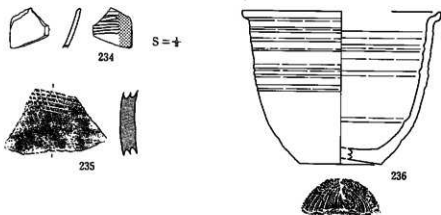


c-c', d-d'

1. 7.5YR 2/1 黒色、赤褐色土φ10cm穴を含む。
2. 5YR 3/6 暗赤褐色、シルト質、赤褐色土φ2~5cm穴と細かい炭化物を含む。
3. 10YR 4/6 褐色、しまっている。赤褐色土を含む。
4. 7.5YR 4/3 細かい黄褐色、黒土が混じる。



第58図 H-61-h 住居跡



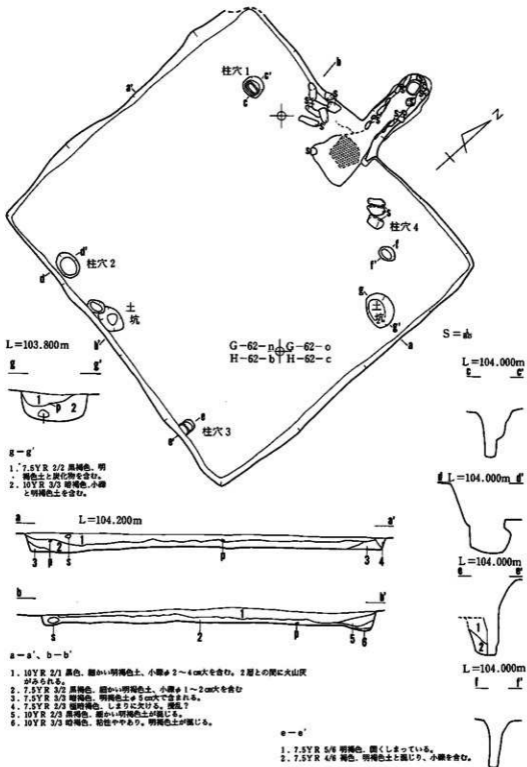
第59図 H-61-h住居跡出土遺物

No.	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口	径	高さ			底径
234	埋土	土師器坏	ロクロ	—	ロクロ痕	—	—	ミガキ	—	—	—	—	B(1)	黒色処理	
235	埋土	須恵器甕	ロクロ	—	タタキ目	—	—	ロクロ痕	—	—	—	—	S類		
236	カマド	土師器甕	ロクロ	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ロクロ痕	ロクロ痕			(15.8)	12.2	(6.5)	E1a	

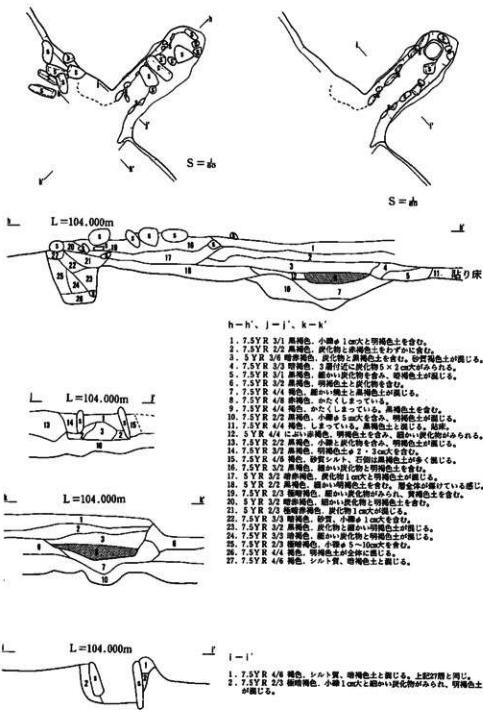
の時期 出土遺物や住居形式から平安時代である。

遺物 (第62～65図、図版62～64)

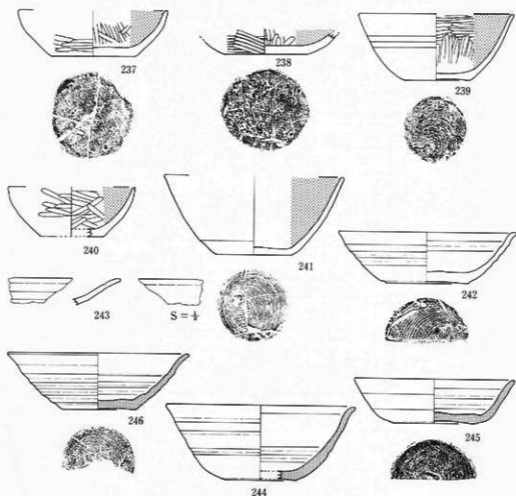
出土状況 埋土を主体に、床面・カマド・掘方部分から出土している。出土数はG-60-1住居跡より少ないが、C調査区では比較的多く出土している。土器 坏では、土師器坏B I類、あかやき坏と須恵器坏があり、多く出土している。土師器坏237と238の底部は再調整されている。238は内面が黒色処理されているが、胴部外面が刷毛目調整されているので土師器甕の可能性もある。あかやき坏243は破片資料であるが、器高が低い「皿」状の坏と推定される。図示している須恵器坏の244は底部がヘラ切りである。甕類では、土師器甕C類・D類は出土しているが、E類の出土はみられない。251と247は土師器F類に近い器型である。土師器甕250・248・251・252の底部は再調整の痕がみられる。249はG-60-1住居跡出土228と同様に3本一組の斜線が口縁部に描かれ、口縁部より下の胴部には丹が塗られている。石製品 剥片石器、磨石、石皿、石鏃、砥石の6点が埋土と掘方から出土している。鉄製品 刃部が欠損している穂道具と推定される鉄製品(254)と刀子(257)の2点が出土している。土製品 埋土から土鍾(255・256)が2点出土している。



第60図 G-62-o 住居跡 (1)

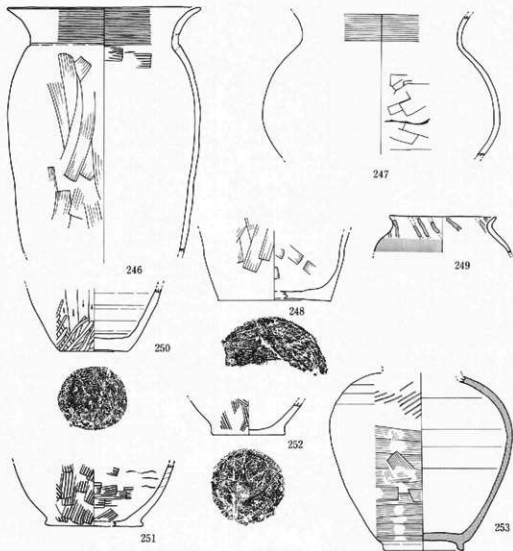


第61図 G-62-o住居跡(2)



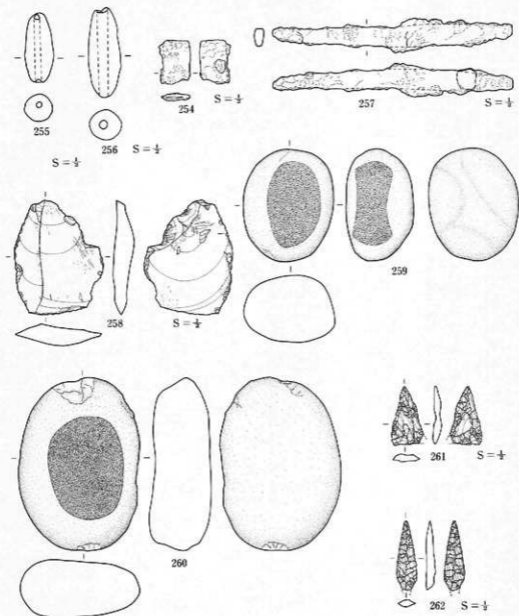
№	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	高さ	底径		
237	瓶方	土師器杯	ロクワ	ミガキ	ミガキ	再調整	ミガキ	ミガキ		(12.0)	3.7	6.8	BV	黒色処理
238	鉢圓	土師器杯	漆ロクワ	—	刷毛目	再調整	—	ミガキ		—	(1.2)	6.9	BV	棕色処理
239	瓶方	土師器杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	刷毛目切り重	ミガキ	ミガキ		(12.4)	5.3	5.2	BI	黒色処理
240	瓶方	土師器杯	ロクワ	ミガキ	ミガキ		ミガキ	ミガキ		(10.2)	4.9	(5.0)	BI	棕色処理
241	埴土	土師器杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	刷毛目切り重	不明	ナゲ		(14.4)	6.3	5.8	BI	黒色処理
242	瓶方	あかやき杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	刷毛目切り重	ロクワ肌	ロクワ肌		(14.2)	4.1	6.6	A坪	
243	埴土	あかやき杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	—	ロクワ肌	ロクワ肌	—	—	—	—	A坪	
244	埴土	須恵器杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	刷毛目切り重	ロクワ肌	ロクワ肌		(15.2)	6.0	5.8	S坪	
245	瓶方	須恵器杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	ヘラ切り	ロクワ肌	ロクワ肌		(12.8)	3.5	6.6	S坪	
246	床面	須恵器杯	ロクワ	ロクワ肌	ロクワ肌	刷毛目切り重	ロクワ肌	ロクワ肌		(14.6)	4.5	5.9	S坪	

第62図 G-62-o 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	種類・形種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm		分類	備考	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高			器径
246	カマド	土師製壺	赤ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(20.6)	(24.0)	—	C I 1 b	
247	埴土	土師製壺	ロクロ	ヨコナデ	ミダキ	—	ヨコナデ	刷毛目	—	(14.9)	—	—	F	
248	カマド	土師製壺	赤ロクロ	—	刷毛目	内調整	—	刷毛目	ナデ	—	(7.4)	12.0	C I 1 b	
249	埴土	土師製壺	ロクロ	ミダキ内塗	ミダキ丹塗	—	ミダキ丹塗	ミダキ	—	(11.4)	(3.8)	—	F	
250	埴土	土師製壺	ロクロ	—	ナズリミダキ	内調整	—	ロクロ裏	ナデ	—	(6.7)	7.2	D I 1 a	
251	カマド	土師製壺	赤ロクロ	—	刷毛目	内調整	—	刷毛目	ナデ	—	(6.6)	(10.4)	C I 1 b	
252	カマド	土師製壺	赤ロクロ	—	刷毛目	内調整	—	ナデ	ナデ	—	(3.7)	7.8	D I 1 b	
253	床面	須恵製壺	ロクロ	—	ミダキ丹塗	—	—	ロクロ裏	—	(19.6)	8.5	S 壺		

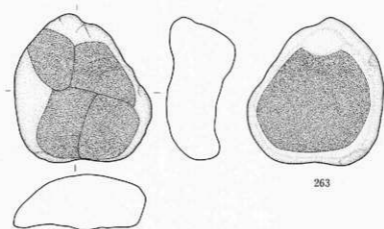
第63図 G-62-o 住居跡出土遺物(2)



No	出土地点・層位	現長	最大径	孔径	重量	現長/最大径	備考
255	埋土	37	15	3	7.9	2.5	完整
256	埋土	49	17	6	11.2	2.9	ほぼ完成形(先端小欠)

長さ、径単位：mm 重量：g

第64図 G-62-o 住居跡出土遺物(3)



No	出土地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	特 徴・備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
254	埋土	磨製片?	12.31	1.5	0.3	1.8	刃部欠損
257	土坑	刀子	12.7	1.1	0.5	15.8	完形

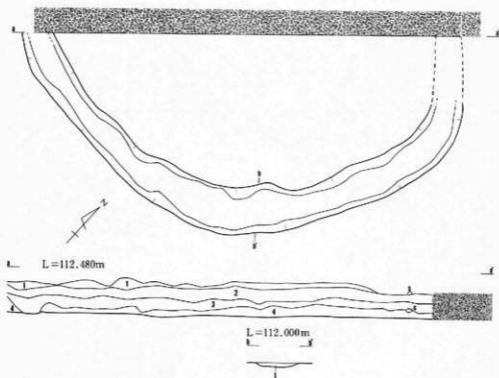
No	出土地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	石 質	特 徴・備 考
			長 さ	幅	厚 さ			
258	掘方	割片石鏃	6.1	4.7	1.9	29.5	黄紋岩	一面に刃部形成
259	埋土	磨石	9.0	7.2	5.4	449.9	ダイサイト	一面面に磨面
260	埋土	石皿	18.5	12.5	5.8	2290	ダイサイト	敲打石と兼用?
261	埋土	石鏃	(3.1)	(1.7)	0.4	(2.0)	珪質凝灰岩	基部の一部欠損
262	埋土	石鏃	(3.7)	2.7	0.7	13.9	チャート質輝綠凝灰岩	基部破損
263	埋土	有溝砥石	11.5	10.6	5.2	755	ダイサイト	

第65図 G-62-o 住居跡出土遺物 (4)

(2) 円形周溝跡・方形周溝跡

A-37-j, A-37-k
A-37-n, A-37-o

A-37-l
A-37-p



a-a'

1. 7.5YR 3/3 暗褐色、灰土
2. 7.5YR 2/2 黒褐色、小礫φ2・3cm大を含む。
3. 7.5YR 2/1 黒色、もろり砂、小礫を含む。
4. 10YR 2/3 暗褐色、小礫と褐色土が混じる。

b-b'

1. 7.5YR 2/2 黒褐色、小礫と細かい炭化物を含み、しまる。

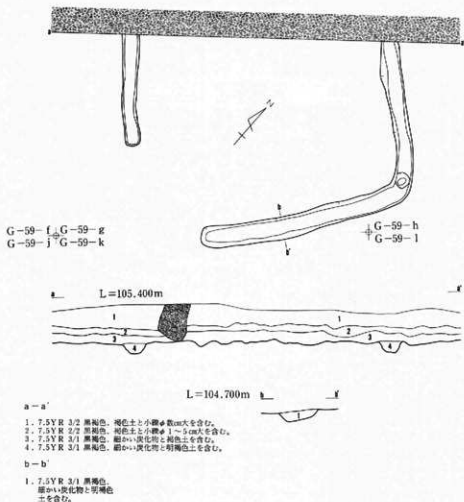
第66図 A-37円形周溝跡

(2) 円形周溝跡・方形周溝跡

A-37円形周溝跡

遺構 (第66図、図版31)

検出状況・重複関係 B調査区の東部に位置し、B-36住居跡とA-37焼土遺構の東側約2mにある。平面形・規模 遺構の北側約2分の1が調査区外にあり、正確な規模、平面形は不明である。検出された部分から径6m前後の円形を呈するものと推定される。溝幅 上部が削平されているので0.4~0.7mを測るのみである。深さ 0.1m前後を測る。溝埋土 細かい炭化物を含む黒褐色土の単層である。遺構の時期 出土遺物はなく不明である。



第67図 G-59-g 方形周溝跡

G-59-g 方形周溝跡

遺構 (第67図、図版31)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-59-o住居跡の北北西4mに位置している。平面形・規模 遺構の北側約3分の1以上が調査区外であり、正確な規模、平面形は不明である。検出された部分から一辺約4.5mの方形を呈するものと推定される。溝幅 上部が削平されているので0.3~0.5mを測るのみである。深さ 0.1m前後である。溝埋土 黒褐色土の単層である。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版65)

埋土から須恵器片(264)が出土している。

(3) 土坑

調査区別にみると、A調査区3基、B調査区2基、C調査区12基、合計17基検出されている。時期別の検出数は、縄文時代5基、平安時代6基、不明6基である。

C-10土坑

遺構 (第68図、図版32)

検出状況・重複関係 A調査区の中央部にあり、D-10住居跡の北東約5m付近にある。北西部が調査区外にあり、全体の2分の1を調査したにすぎない。平面形 不整な円形 規模 開口部径1.2×0.6m、底部径1.1×0.6m、深さ0.5mである。断面形 鉢状 壁 緩やかに外傾 底面 凸凹していて、径0.3×0.2mの範囲で焼土が薄く広がっている部分が見られる。埋土 黒褐色土が主体で上位層に炭化物が見られ、全体に褐色土を含む。遺構の時期 出土遺物はなく不明である。

C-11土坑

遺構 (第68図、図版32)

検出状況・重複関係 A調査区の中央部にあり、D-11住居跡状遺構と一部重複している。北側部分が調査区外にあり、全体の約2分の1を調査したにすぎない。D-11住居跡状遺構との新旧関係はD-11土坑が古期である。平面形 円形を呈すると推定される。規模 開口部径1.4×0.7m、底部径1.1×0.5m、深さ1.7mである。断面形 ビーカー状 壁 直立～僅かに湾曲 底面 湾曲している。埋土 黒褐色土と暗褐色土が卓越している。中に炭化物を含み、下位は砂質褐色土が主体の層である。遺構の時期 出土遺物はなく不明である。

C-17土坑

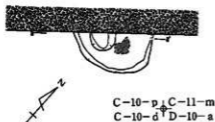
遺構 (第68図、図版32)

検出状況・重複関係 A調査区の東側にあり、D-15住居跡の北東約40m付近にある。北側部分が調査区外にあり、全体の約3分の1を調査したにすぎない。平面形 ほぼ円形 規模 開口部径1.1×0.7m、底部径0.9×0.7m、深さ0.5mである。断面形 鍋底型 壁 直立 底面 凸凹している。埋土 上位部分に炭化物を含む、黒褐色土と暗褐色土が主体の層である。第3層は人為的に形成された層である。遺構の時期 出土遺物はなく不明である。

B-36土坑

遺構 (第69図、図版32)

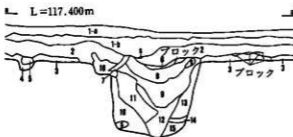
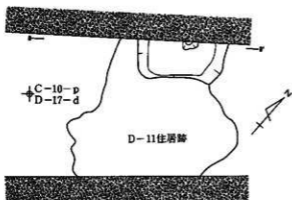
C-10土坑



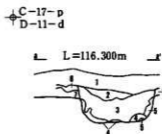
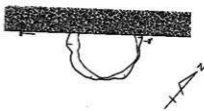
C-10土坑 a-a'

1. 10Y R 3/2 黒褐色。細かい炭化物を含み、褐色土が混じる。
2. 10Y R 2/3 黒褐色。炭化物を含み、褐色土が混じる。
3. 10Y R 3/3 暗褐色。粘性なし。褐色土を含む。
4. 10Y R 2/2 黒褐色。小礫が1cm程度を含む。
5. 10Y R 3/4 暗褐色。褐色土を含む。
6. 10Y R 3/3 暗褐色。炭化物と褐色土を含む。
7. 10Y R 2/2 黒褐色。腐敗のためか、しまりなし。
8. 10Y R 3/3 暗褐色。小礫と褐色土が混じる。
9. 7.5Y R 3/1 黒褐色。小礫が1cm程度が混じり、しまっている。
10. 7.5Y R 3/2 黒褐色。褐色土と砂質の明褐色土が混じる。

C-11土坑



C-17土坑



C-17土坑 a-a'

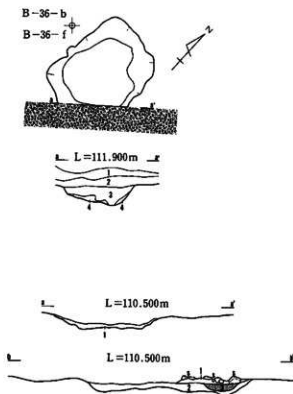
1. 10Y R 2/3 黒褐色。黄土。
2. 10Y R 2/2 黒褐色。砂質シルト質土。
3. 7.5Y R 3/2 黒褐色。炭化物を含み、褐色土が混じる。
4. 10Y R 3/4 暗褐色。炭化物を含み、褐色土が混じる。
5. 10Y R 4/6 褐色。砂質の褐色土が混じる。
6. 7.5Y R 3/3 黒褐色。砂質の褐色土を含む。
7. 10Y R 3/3 暗褐色。ごく僅か炭化物を含む。粘性やや有。

C-11土坑 a-a'

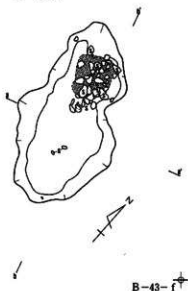
1. 10Y R 2/3 黒褐色。砂質シルト。
- 1a. は炭化物を多く含み、木根のみられる層。
- 1b. は炭化物の含まない、粘性のない層。
2. 7.5Y R 2/2 黒褐色。シルト質土。
3. 10Y R 3/3 暗褐色。細かい炭化物を含む。
4. 10Y R 3/4 暗褐色。褐色土が混じる。粘性なし。
5. 10Y R 3/4 暗褐色。炭化物と褐色土が混じる。
6. 10Y R 3/2 暗褐色。砂質の明褐色土を含む。
7. 10Y R 3/2 黒褐色。木根による腐敗層。
8. 7.5Y R 2/2 黒褐色。細かい炭化物を含む。
9. 10Y R 3/3 暗褐色。明褐色土を含む。粘性なし。
10. 10Y R 4/4 褐色。暗褐色土が混じる。粘性なし。
11. 10Y R 3/3 暗褐色。細かい炭化物を含む。
12. 10Y R 4/6 褐色。暗褐色土を含む。粘性なし。
13. 10Y R 4/4 褐色。暗褐色土を含む。粘性やや有。
14. 10Y R 5/4 土が混じり、13層よりも粘性あり。
15. 10Y R 3/3 暗褐色。黒褐色土が混じり、しまり有。

第68図 C-10、C-11、C-17土坑

B-36土坑



B-43土坑



B-36土坑 a-a'

1. 10YR 2/3 黒褐色、重土。
2. 10YR 2/3 黒褐色、明褐色土がブロック状ではいる。
3. 10YR 2/3 黒褐色、炭化物を含む。
4. 10YR 4/6 褐色、砂質、黒褐色土が混じる。

B-43土坑 a-a'、b-b'

1. 10YR 2/3 黒褐色、黄褐色土を含む。
2. 10YR 5/8 黄褐色、砂質シルト。
3. 5YR 3/6 暗赤褐色、下部分に暗赤褐色土を含む。

第69図 B-36・B-43土坑

検出状況・重複関係 B調査区の中央部に位置し、B-36住居跡の南側約1mで検出された。
平面形 不整な円形である。規模 開口部径1.3×1.6m、底部径1.0×1.0m、深さ0.4mである。
断面形 鉢状を呈し、壁は緩やかに外傾する。底面 全体に凸凹する。埋土 4層に細分され、上位はしまりのない黒褐色土、下位はしまりのある黒褐色土である。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版65)

内外面にハケメ調整のある土師器製の破片 (265~268) が出土している。

B-43土坑

遺構 (第69図、図版32)

検出状況・重複関係 B調査区の東側に位置しB-43住居跡に隣接している。平面形 南北に長軸をもつ不整形である。規模 開口部径3.0×1.7m、底部径2.4×1.0m、深さ0.2mである。

断面形 皿状 壁 緩やかに外傾する。底面 楕根のため凸凹している。埋土 3層で構成され、上位がしまりのある黒褐色土、下位は黄褐色土である。北側の黄褐色土面に径0.7×0.6m、厚さ10cmの焼土が形成されている。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版65)

焼土より上位からロクロ使用の土師器甕 (270)、内外ともハケメ調整されているロクロ未使用の土師器甕 (271)、外面がヘラミガキ調整されている土師器壺 (272)、須恵器壺 (269)、須恵器環、椀形鉄滓 (273) が出土している。また焼土よりエゾマスオガイ (274) が出土している。

H-59-d 土坑

遺構 (第70図、図版32)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-m住居跡の南側5m付近にある。断面図から2つの土坑が重複しているものと思われる。新旧関係は、北側部分が新しい時期のものと思われる。

土坑 (旧) 平面形 不整形である。規模 開口部径1.3×1.3m、底部径1.1×1.1m、深さ0.5mである。断面形 鉢状を呈する。壁 緩やかに外傾する。底面 著しく凸凹している。埋土 細かい黄褐色土を含む上位層と数センチ大の黄褐色土を含む下位層の4層で構成されている。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

土坑 (新) 平面形 不整形である。規模 開口部径1.4×1.3m、底部径0.4×0.5m、深さ0.5mである。断面形 鉢状を呈する。壁 東側は内湾しているが、他はゆるやかに外傾する。底面 凸凹している。埋土 細かい炭化物を含む上位層と数センチ大の黄褐色土を含む下位層の3層で構成されている。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第73図、図版66)

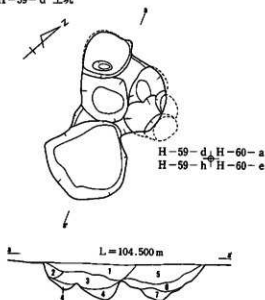
埋土から縄文土器細片が数点出土している。土坑 (新) から275、土坑 (旧) からは277が出土している。

G-60-k 土坑

遺構 (第70図、図版33)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-i住居跡とG-60-h住居跡に隣接している。平面形 円形である。規模 開口部径1.5×1.6m、底部径1.4×1.3m、深さ0.5mである。断面形 浅皿状を呈する。壁 緩やかに外傾する。底面 湾曲している。埋土 3層で構成され、上位はしまりのない黒褐色土と黒色土、下位は暗褐色土である。遺構の時期 出土遺物がなく不明である。

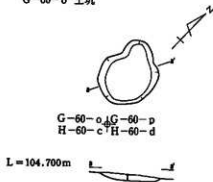
H-59-d 土坑



a-a'

1. 7.5YR 1.7/1 黒色、粘性なし、細かい黄褐色土を含む。
2. 7.5YR 3/3 暗褐色、黄褐色土φ 1~2cm穴を含む。
3. 10YR 2/3 黒色、黄褐色土φ 2cm穴を含む。
4. 10YR 2/2 黒褐色、黄褐色土と暗褐色土を含む。
5. 7.5YR 3/1 黒色、細かい炭化物、黄褐色土を含む。
6. 10YR 2/2 黒褐色、暗褐色土φ 18cm穴を含む。
7. 10YR 3/3 暗褐色、黄褐色が混じる。

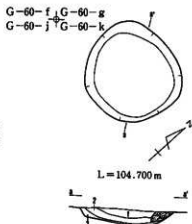
G-60-o 土坑



G-60-O土坑 a-a'

1. 7.5YR 2/2 黒褐色、炭化物を含む。赤褐色土が層の上平面にみられる。

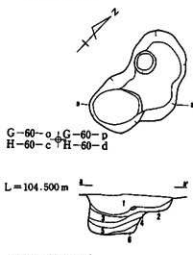
G-60-k 土坑



G-60-K土坑 a-a'

1. 7.5YR 1.7/2 黒色、しまり青。
2. 10YR 2/2 暗褐色、しまり青、粘性やや有。
3. 10YR 3/3 暗褐色、しまり青、褐色土を含む。

G-60-p 土坑



G-60-P土坑 a-a'

1. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい炭化物が混じる。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色、赤褐色土が中央部にはいる。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色、暗褐色土を含む。
4. 7.5YR 3/3 暗褐色、褐色土が混じる。
5. 7.5YR 2/2 黒褐色、細かい炭化物が混じる。
6. 7.5YR 2/2 暗褐色、褐色土が混じる。

第70図 H-59-d・G-60-k・G-60-o・G-60-p土坑

G-60-m 土坑

遺構 (第71図、図版33)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-m住居跡の南に隣接している。平面形 南北に長軸をもつ棒状を呈している。規模 開口部径2.3×0.5m、底部径2.1×0.3m、深さ0.3mである。断面形 ビーカー状を呈する。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。底面 水平である。埋土 3層で構成され、上位は暗褐色土と黒褐色土に黄褐色のバミスが混じり、下位は黄褐色の砂質シルト土である。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版66)

埋土より、土師器細片が2点(278a・278b)出土している。土師器杯と土師器甕の細片である。

G-60-o 土坑

遺構 (第70図、図版33)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-p住居跡とG-60-p土坑の西側に隣接している。平面形 不整形である。規模 開口部径1.1×0.8m、底部径0.8×0.7m、深さ0.1mである。断面形 浅皿状を呈する。壁 立ち上がりがなく緩やかに外傾している。底面 水平である。埋土 単層で、赤褐色の焼土が層の上位にみられ、炭化物が混じる。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版66)

出土した遺物は土師器杯281、土師器甕283、須恵器壺282の破片等が数点である。

G-60-p 土坑

遺構 (第70図、図版33)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-p住居跡とG-60-o土坑に隣接する。平面形 不整形を呈している。規模 開口部径1.8×0.8m、底部径1.6×0.8m、深さ0.7mである。断面形 鍋底形を呈する。壁 外傾している。底面 全体に凸凹している。埋土 黒褐色土と暗褐色土で第1層と第2層の間に一部分焼土が薄く堆積している。遺構の時期 出土遺物がなく不明である。

G-61-i 土坑

遺構 (第71図、図版34)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-60-h住居跡の東側に隣接している。

平面形 円形である。規模 開口部径1.4×1.4m、底部径1.2×1.1m、深さ0.2mである。断面形 皿状を呈する。壁 緩やかに立ち上がる。底面 全体に凸凹している。埋土 2層で構成され、黒褐色土層中に暗赤褐色の焼土と炭化物が含まれている。焼土は径0.4×0.2m、厚さ2cmで形成されている。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版66)

出土した遺物は土師器甕285、須恵器坏284等の破片が数点である。

H-61-b 土坑

遺構 (第71図、図版34)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-61-b住居跡の東側約2mとG-61-0掘立柱建物跡の南側に隣接している。平面形 ほぼ円形である。規模 開口部径1.3×1.2m、底部径0.9×1.0m、深さ0.5mである。断面形 ビーカー状を呈する。壁 上半は直立し、下半はわずかに外反する。底面 水平である。埋土 5層で構成され、上位は径5mm大の礫を含む黒褐色土、下位は黄褐色土の粒子を含む暗褐色土である。黒褐色土は人為的な埋め戻しである。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (図版66)

出土遺物は土師器坏286である。

G-62-p 土坑

遺構 (第71図、図版34)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-62-0住居跡の東側に隣接している。平面形 不整形である。規模 開口部径3.1×2.4m、底部径1.0×1.0m、深さ1.0mである。埋土 5層で、全体に径1～5cm大の礫が混じる層と径5～15cm大の礫が混じる層で構成されている。礫の混じる層は人為的な埋め戻しである。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第73図、図版66)

出土した遺物は縄文前期の土器片が数点である。287と288には繊維が含まれている。

G-63-i 土坑

遺構 (第72図、図版34)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、G-62-i掘立柱建物跡の東側に隣接している。平面形 円形である。規模 開口部径1.6×1.0m、底部径0.8×0.7m、深さ0.3mである。断面形 皿状を呈する。壁 外傾している。底面 水平である。埋土 径1cm大の礫の混じる

黒褐色土の2層で構成されている。遺構の時期 出土遺物がなく不明である。

H-63-b 土坑

遺構 (第72図、図版34)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-63-a 焼土遺構に隣接している。平面形 楕円形である。規模 開口部径2.2×2.0m、底部径1.5×1.3m、深さ0.8mである。断面形 鍋底型を呈する。壁 緩やかに外傾している。底面 緩やかに波打っている。埋土 礫が混じり、硬く締まった6層で構成されている。第3層は径5～10cm大の礫が多く混じり、縄文土器片が出土している。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第73図、図版66)

出土遺物は290である。胎土に砂礫を多く含み、8mm程の厚さをもっている。

H-63-l 土坑

遺構 (第72図、図版35)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-64-i 土坑と隣接している。平面形 円形である。規模 開口部径1.2×1.1m、底部径0.8×0.9m、深さ0.3mである。断面形 皿状を呈する。壁 外傾している。底面 凸凹している。埋土 径1～3cmの小礫の混じる黒色土と径3～10cmの礫の混じる暗褐色土の2層で構成されている。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第73図、図版66)

出土遺物は291である。胎土に繊維を含み、裏側に煤が付着している。

H-64-i 土坑

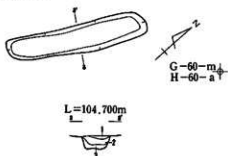
遺構 (第72図、図版35)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-63-i 土坑と隣接している。平面形 円形である。規模 開口部径1.8×1.6m、底部径1.4×1.3m、深さ0.4mである。断面形 皿状を呈する。壁 外傾している。底面 凸凹している。埋土 礫の混じる黒褐色土と壁の崩壊土(暗褐色土)の3層で構成される。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第73図、図版66)

出土遺物は293と292である。焼成は良好で292の胎土には細かい長石がみられる。

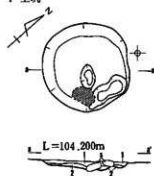
G-60-m 土坑



G-60-m土坑 a-a'

1. 10YR 3/3 暗褐色、黄褐色土φ1cm穴を含む。
2. 7.5YR 2/1 黒色、黄褐色土φ8cm穴を含む。
3. 10YR 5/6 黄褐色、黒褐色土が混じる。

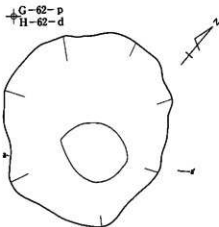
G-61-i 土坑



G-61-i土坑 a-a'

1. 7.5YR 3/1 黒褐色、細かい炭化物が全体に混じり、暗赤褐色土がみられる。
2. 7.5YR 2/3 暗褐色、明褐色土が混じる。

G-62-p 土坑



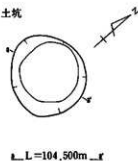
G-62-p
H-62-d

G-62-p土坑 a-a'

1. 7.5YR 3/1 黒褐色、小堀φ1~5cm穴が混じる。
2. 7.5YR 2/1 黒褐色、小堀φ2~3cm穴を含む。
3. 7.5YR 2/2 黒褐色、褐色の砂質土が入る。
4. 7.5YR 2/1 黒褐色、小堀φ2~3cm穴が混じる。
5. 7.5YR 3/1~2/1 暗褐色~黒色、小堀φ3~10cm穴が混じる。

G-61-u G-61-o
H-61-b H-61-c

H-61-b 土坑



L=104,500m

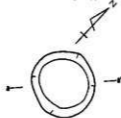
H-61-b土坑 a-a'

1. 10YR 2/2 暗褐色、小堀φ5mm穴を含む。
2. 7.5YR 2/1 黒色、小堀φ5mm穴と黄褐色土を含む。
3. 10YR 3/2 黒褐色、黄褐色土φ10mm穴を含む。
4. 10YR 2/1 黒色、黄褐色土と細かい炭化物を含む。
5. 10YR 3/3 暗褐色、黄褐色土φ2~3cm穴を含む。
6. 7.5YR 1.7/1 黒色、小堀φ5mm穴を含む。

第71図 G-60-m・G-61-i・H-61-b・G-62-p土坑

G-63-i 土坑

G-62-h, G-63-e
G-62-i, G-63-j



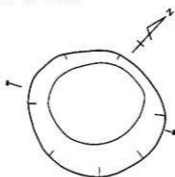
L = 103.800m



a-a'

1. 7.5Y R 3/1 黒褐色。小礫φ 5cm大をまじり含む。
2. 7.5Y R 3/2 黒褐色。細い炭化物と小礫を含む。

H-63-b 土坑



L = 104.100m



a-a'

1. 7.5Y R 2/1 黒色。小礫φ 1~4cm大を含む。
2. 7.5Y R 1.7/1 黒色。小礫φ 2~3cm大を含む。
3. 10Y R 2/2 黒褐色。炭化物と小礫φ 5cm大を含む。
4. 7.5Y R 3/3 暗褐色。小礫φ 1~3cm大を含む。
5. 7.5Y R 3/4 暗褐色。小礫φ 2~10cm大を含む。
6. 10Y R 6/8 明黄褐色。砂質土が混じる。

H-63-c
H-63-g

H-63-l 土坑

H-63-h, H-64-e
H-63-i, H-64-i



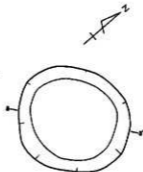
L = 104.100m



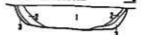
a-a'

1. 7.5Y R 1.7/1 黒色。小礫φ 1~3cm大を含む。
2. 7.5Y R 3/3 暗褐色。小礫φ 3~10cm大が混じる。

H-64-e
H-64-i 土坑



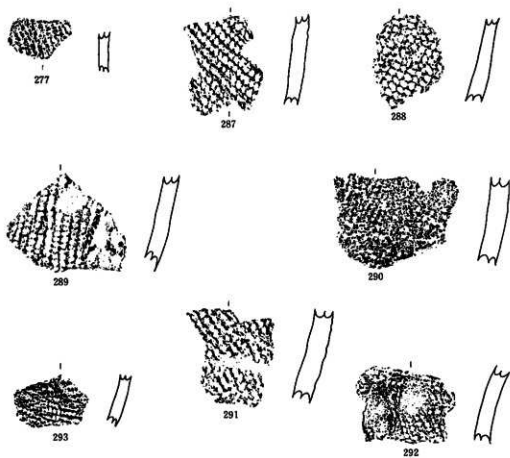
L = 104.100m



a-a'

1. 7.5Y R 1.7/1 黒色。小礫φ 1~3cm大を含む。
2. 10Y R 2/2 黒褐色。シルト質。
3. 7.5Y R 3/3 暗褐色。小礫φ 3cm大を含む。

第72図 G-63-i・H-63-b・H-63-l・H-64-i 土坑



S=+

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	時期分類	備考
275	II-29-f 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文	不明	写真図版参照
276	II-29-d 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文	不明	写真図版参照
277	II-29-d 土坑埋土	深鉢	底部	帯糸文、帯付唇	不明	
287	G-42-P 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文 (R L)、縷線合	縄文前期	
288	G-42-P 土坑埋土	深鉢	底部	単筋斜織文	縄文前期	
289	G-42-P 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文 L R、縷線合	縄文前期	
290	H-43-b 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文、砂繪合、縷線縷垂	縄文中期	
291	H-43-1 土坑埋土	深鉢	底部	複筋織文 R L、縷線合、帯付唇	縄文前期	
292	H-43-1 土坑埋土	深鉢	底部	単筋織文 R L	縄文中期	
293	H-43-1 土坑埋土	深鉢	底部	複筋織文 R L	縄文中期	

第73図 土坑 出土土器

(4) 陥し穴状遺構

D-18陥し穴状遺構

遺構 (第74図、図版35)

検出状況・重複関係 段丘の縁辺部分にあたるA調査区の中央に位置し、D-15住居跡の東約25m付近にある。平面形 ほぼ円形を呈している。規模 開口部径0.9×(0.5)m、底部径0.7×(0.4)m、深さ1.2m 断面形 ビーカー状を呈している。壁 下半部は垂直に立ち上がり、上半部は緩やかに外傾する。副穴 中央部に0.2×0.2mの規模で1個もつ。埋土 小礫と細かい炭化物を含む黒褐色土と明褐色土を主体に構成されている。埋土は砂質の暗褐色土が多く混じり、人為的な堆積である。遺構の時期 出土物はないが、形状から縄文時代と思われる。

H-63-d陥し穴状遺構

遺構 (第74図、図版35)

検出状況・重複関係 段丘の縁辺部分のC調査区の西側に位置し、G-62-o住居跡の東側約25m付近にある。平面形 ほぼ円形を呈している。規模 開口部径1.7×1.4m、底部径1.0×0.7m、深さ1.2m 断面形 ビーカー状を呈している。壁 下半部は垂直に立ち上がり、上半部は緩やかに立ち上がる。副穴 中央部に0.2×0.3mの規模で1個もつ。埋土 小礫径1~10cmを含む黒褐色土と、明褐色土を含む黒褐色土と黄褐色土の4層で構成されている。遺構の時期 出土物はないが、形状から縄文時代と思われる。

(5) 掘立柱建物跡

G-61-o掘立柱建物跡

遺構 (第75図、図版36)

検出状況・重複関係 C調査区の西にあり、G-61-1住居跡の南側約3mに位置する。H-60-b溝跡と一部重複しているが新旧関係は不明である。規模 南北2間×東西2間桁行の東側柱列が2.92m、同中間柱列が3.06m、同西側柱列が3.27m、梁行の南側柱列が3.09m、同中間柱列が2.98m、同北側柱列が3.13mである。棟方向 N-12'-W 柱間寸法 桁行の東側柱列が南から1.52+1.40m、同中間柱列が1.53+1.58m、同西側柱列が1.81+1.46mであり、梁行の南側柱列の東から1.61+1.48m、同中間柱列が1.55+1.43m、同北側柱列が1.54+1.59mである。柱痕跡 径18~38cmの円形を呈し、深さ20~46cmである。埋土 細かい炭化物と明褐色土を含む、黒褐色土~暗褐色土である。遺構の時期 出土物はなく、時期は不明である。

G-62-1掘立柱建物跡

C-18 陥し穴



C-18-n, C-18-o
D-18-b, D-18-c

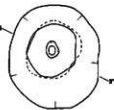


a-a'

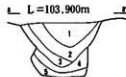
1. 10Y R 2/3 黒褐色、黄土。
1-aは炭化物を多く含む、木根のみられる層。
1-bは炭化物を含まない、粘性のない層。
2. 7.5Y R 2/2 黒褐色、シルト質土のもろい層。
3. 10Y R 3/2 暗褐色、炭化物を含む、粘性やや有。
4. 10Y R 2/2 黒褐色、粘性なく、もろい層。
5. 10Y R 2/3 黒褐色、褐色土が混じる。粘性なし。
6. 10Y R 4/4 褐色、炭化物を含む。粘性なし。
7. 10Y R 4/4 褐色、暗褐色土を含む。粘性なし。

8. 10Y R 2/3 黒褐色、暗褐色土を含む。しまりなし。
9. 10Y R 4/6 褐色、小礫を含む。
10. 10Y R 2/2 黒褐色、暗褐色土が混じる。しまりなし。
11. 7.5Y R 2/2 黒褐色、炭化物を含む。
12. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物を含む。暗褐色土が混じる。
13. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物を含む。粘性なし。
14. 10Y R 4/4 褐色、暗褐色土が混じる。しまりなし。
15. 10Y R 4/4 褐色、暗褐色土が混じる。14層に似ている。
16. 10Y R 3/3 暗褐色、黒褐色土が混じる。

H-63-d 陥し穴

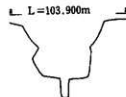


G-63-p
H-63-d

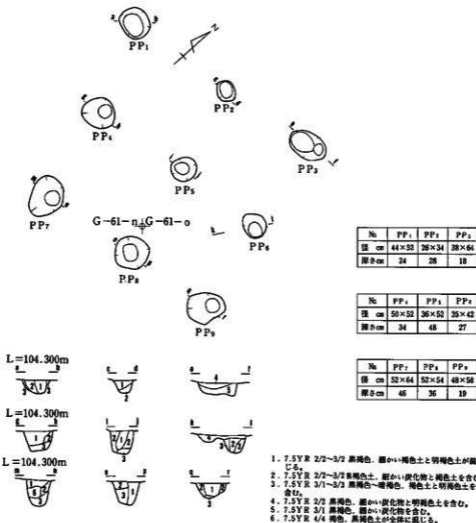


a-a'

1. 7.5Y R 1.7/1 黒色、小礫φ 3~10cm大を含む、しまっている。
2. 10Y R 1.7/1 黒色、小礫φ 1~2cm大を含む。粘性なし。
3. 10Y R 2/2 黒褐色、小礫φ 2cm大と明褐色土を含む。
4. 10Y R 3/2 黒褐色、砂質の明褐色土と小礫を含む。
5. 10Y R 5/6 黄褐色、砂質の明褐色土と小礫を含む。



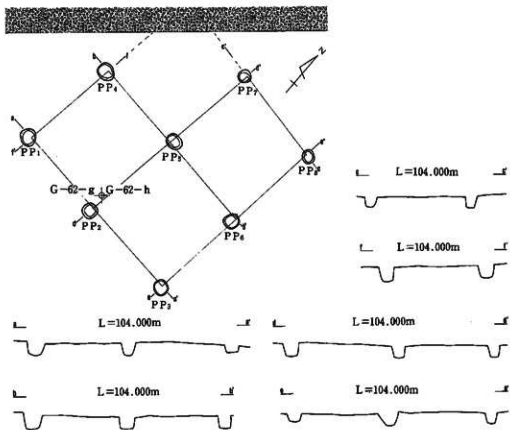
第74図 C-18・H-63-d 陥し穴状遺構



第75図 G-61-o 掘立柱建物跡

遺構 (第76図、図版36)

検出状況・重複関係 C調査区の西側にあり、G-62-o住居跡の北5mに位置している。重複関係はなく、北西隅が調査区外になり全体は検出されていない。規模 南北2間×東西2間と推定される。桁行の東側柱列が3.20m、同中間柱列が3.29m、梁行の南側柱列が3.18m、同中間柱列が3.13mである。棟方向 N-2'-E 柱間寸法 桁行の東側柱列が南から1.58+1.62m、同中間柱列が1.74+1.55m、同西側柱列が1.62+αmであり、梁行の南側柱列の東から1.66+1.52m、同中間柱列が1.58+1.55m、同北側柱列が1.64+αmである。柱痕跡 径20~30cmの円形を呈し、深さ10~20cmである。埋土 明褐色土の混じる黒褐色である。遺構の時期 出土遺物はなく、時期は不明である。



No	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄	PP ₅	PP ₆	PP ₇	PP ₈
徑 cm	25×27	23×24	24×25	26×28	23×25	22×24	21×21	20×22
埋深 cm	20	20	10	21	19	20	19	17

第76图 G-62-I 掘立柱建物跡

(6) 焼土遺構

B調査区の東側から3基、C調査区の西側から2基、計5基検出された。検出された5基の焼土遺構は、検出面が住居跡と同じである。出土遺物からB調査区の3基とC調査区のH-63-1b焼土遺構は平安時代のものであり、C調査区のH-62-a焼土遺構は縄文時代のものである。

A-37焼土遺構

遺構 (第77図、図版36)

検出状況・重複関係 B調査区の東部に位置し、B-36住居跡とA-37円形周溝跡に近接する。平面形 不整形 規模 1.9×0.9mで厚さは13cmを測る。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (第77図、図版67)

外面にハケメ調整後に赤彩を施している土師器壺(294)と思われるものと、ロクロ不使用の土師器甕の底部やロクロ使用の土師器杯の口縁部片等が出土している。

B-44-e 焼土遺構

遺構 (第77図、図版36)

検出状況・重複関係 B調査区の東端部に位置し、B-44-j住居跡の西側約2mにある。平面形 不整な楕円形 規模 1.7×0.8mで厚さ8cm前後を測る。焼土が形成されている黒褐色土は10cm前後で薄く、その下は礫層である。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

遺物 (第77図、図版67)

ロクロ使用の土師器杯(297)、土師器甕(298)と須恵器杯(299)、須恵器甕(301)の破片が数点出土している。

B-44-k 焼土遺構

遺構 (第77図、図版37)

検出状況・重複関係 B調査区の東端部に位置し、B-44-j住居跡の東側約2mにある。平面形 不整の円形 規模 1.2×0.7m前後を測る。焼土は、黒褐色土をはさんで上の部分と下の部分に形成されている。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

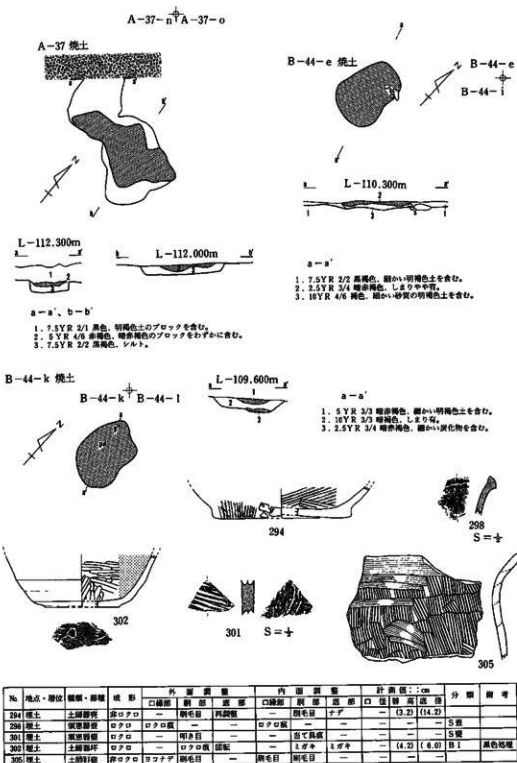
遺物 (第77図、図版67)

ロクロ使用の土師器杯(302)、ロクロ不使用の土師器甕(305)と須恵器杯、須恵器甕の破片が出土している。

H-62-a 焼土遺構

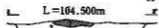
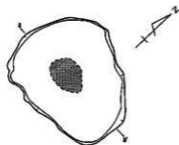
遺構 (第78図、図版37)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-62-a住居跡とG-62-o住居跡に近



第77図 A-37・B-44-e・B-44-k 焼土遺構・出土遺物

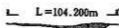
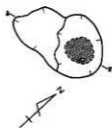
H-62-a 焼土



1. 5 YR 3/6 暗赤褐色、炭化物と黒褐色土が混じる。
2. 7.5 YR 2/2 黒褐色、褐色土と明褐色土が混じる。

H-63-d 焼土

G-63-a G-63-o
H-63-b H-63-c



1. 2.5 YR 1.7/1 赤黒色、シルト質。
2. 10R 5/3 赤色、小礫φ2・3cmを含む。

第78図 H-62-a・H-63-b 焼土遺構

接する。平面形 不整形 規模 0.7×0.6mで厚さは11cmを測る。全体に5～10mm大の炭化物が混じっている。遺構の時期 出土遺物から縄文時代である。

遺物 (第79図、図版68)

出土状況 第1層の細かい炭化物を含む暗赤褐色土から出土している。土器306、307、308、309、310、311は土器体部や文様から同一個体であると思われる。

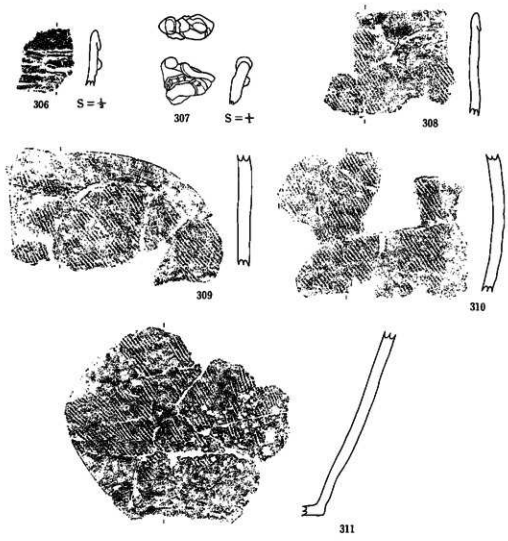
H-63-b 焼土遺構

遺構 (第78図、図版37)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、H-63-b土坑に近接する。平面形 ほぼ円形 規模 0.5×0.4mで厚さ10cmを測る。焼土が形成されている黒褐色の下の礫層までよく焼けている。遺構の時期 出土遺物から平安時代である。

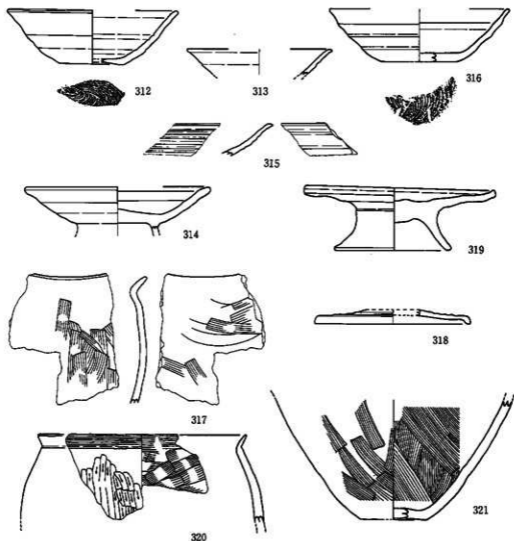
遺物 (第80図、図版69)

出土状況 表土除去の段階で焼土が確認され、土器も遺構付近に散乱している状態であった。土器、あかやき坏、土師器壺、土師器蓋が出土している。あかやき坏313と315は口径に比べて器高が低く、皿にちかい坏である。土師器壺317、320、321は砂等が混じった胎土をもち、調整も荒い壺である。318は色調が赤褐色の蓋で、「つまみ」の有無は不明である。高台付皿319は器面が湾曲している。高台付坏314の底部には回転糸切り痕がみられ、坏の部分と高台部分が別々に作られたことが推定される。



No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外形	時期分類	備考
306	1層	銅鉢	口縁部	折り返し口縁。胎付。横位絞線文(?)	縄文中期初期	
307	1層	銅鉢	口縁部	小突起。胎等上縁体存在	縄文中期初期	
308	1層	銅鉢	口縁部	折り返し口縁。単線縄文 R L	縄文中期初期	
309	1層	銅鉢	体部	単線縄文 R L。横位絞線文	#	同一器体
310	1層	銅鉢	体部	単線縄文 R L	#	
311	1層	銅鉢	体部-底部	単線縄文 R L	#	

第79図 H-62-a 焼土遺構出土遺物



No.	地点・層位	種類・器種	成形	外面調査			内面調査			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	口径		
312	埴土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	回転糸切り底	ロクロ底	ロクロ底	—	(13.6)	4.4	(5.0)	A杯	
313	埴土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	(11.6)	2.0	—	A杯	
314	埴土	高台付杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	回転糸切り底	ロクロ底	ロクロ底	ナデ	(14.6)	(3.5)	—	A杯	
315	埴土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	—	—	—	A杯	
316	埴土	あかやき杯	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	回転糸切り底	ロクロ底	ロクロ底	—	(14.4)	4.2	(5.8)	A杯	
317	埴土	土師器蓋	深ロクロ	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	—	—	—	—	C II 2 b	
318	埴土	土師器蓋	ロクロ	ロクロ底	—	—	ロクロ底	—	—	(12.8)	3.6	(12.4)	蓋	
319	埴土	高台付皿	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	15.2	5.2	9.4	A	
320	埴土	土師器蓋	深ロクロ	ヨコナデ	ナズリ	—	ヨコナデ	刷毛目	—	—	—	—	C II 3 ()	
321	埴土	土師器蓋	深ロクロ	—	刷毛目	ナデ	—	刷毛目	ナデ	—	(12.7)	7.0	C I 1 b	

第80図 H-63-b 埴土遺構出土遺物

(7) 炭窯

B-45炭窯

遺構 (第81図、図版37)

検出状況・重複関係 B調査区の東端部に位置しB-44-j住居跡の東側約8m付近にある。平面形 不整な楕円形を呈する。規模 開口部径0.9×1.8m、底部径0.7×1.7m、深さ18cmである。断面形 皿状を呈する。壁 緩やかに外傾している。埋土 黒褐色土の単層で、底部付近からクリの炭(炭化材)が出土している。

遺物 (第81図、図版69)

出土遺物は、土師器壺の体部と思われる細片(322)が出土している。

↑ B-46-j
↑ B-46-m



L=109.500m



a-a'

1. 7.5YR 2/2 黒褐色。底部部分に多量の炭化物あり。

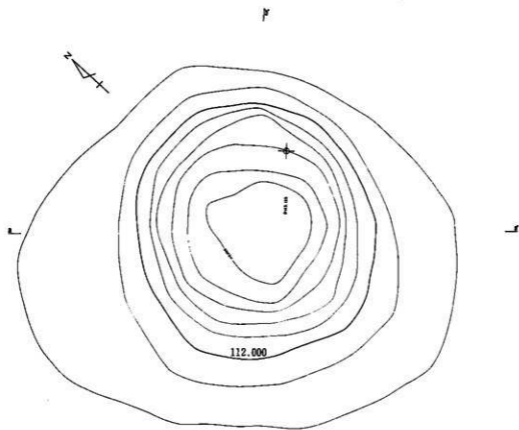
第81図 B-45炭窯跡

(8) 塚

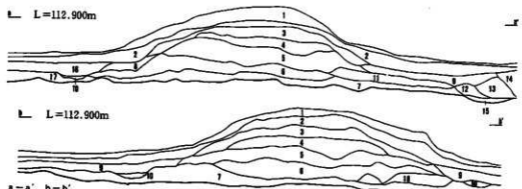
A-39塚

遺構 (第82図、図版38)

検出状況・重複関係 B調査区の東側にあり、段丘の縁辺部分にある。地元では「こうべ塚」と呼ばれている。平面形 楕円形を呈している。規模 5.7×6.6m、高さ1.2m 断面土層 色調、土性等により18層に細分されるが、盛土とみられるのは第6層より上である。第1・2層は現在の表土で10cm大の小礫を含む黒色土であり、特に第2層では粘性をもつ土は非常に乏しい。第3～6層は、10～20cm大の小礫を含む締まりの欠ける層である。第6・7層は地山に相当する層と思われる。第10層の黒褐色土は平面ではとらえられなかったが、断面から周溝の一部となる可能性がある。遺構の時期 遺物は埋土から縄文土器片、弥生土器片と須恵器片が出土しているが、遺構の時期を決めるものでないと思われる。時期は不明である。

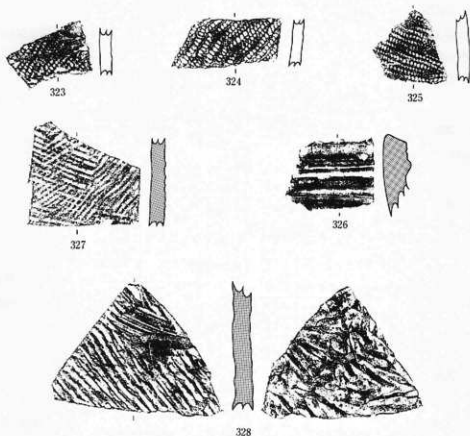


A-39-o B-39-d
A-39-o B-39-c



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR 2/1 黒色、黄土 2. 7.5YR 1.7/1 黒色、礫φ20cmを含む。 3. 7.5YR 3/1 黒褐色、礫φ10cmを含む。しまり、粘性なし。 4. 7.5YR 3/1 黒褐色、礫φ10~20cmを含む。しまりなし。 5. 7.5YR 2/2 黒褐色、小礫φ数cmを含む。 6. 7.5YR 3/1 黒褐色、硬く、しまっている。礫を含まない。 7. 7.5YR 2/1 黒褐色、礫φ10cmを含む。しまり有。 8. 7.5YR 2/1 黒褐色、礫の少ない層。2層に似ている。 9. 7.5YR 2/2 黒褐色、小礫φ5cmを含む。しまりなし。 | <ol style="list-style-type: none"> 10. 7.5YR 3/1 黒褐色、小礫を含み、硬くしまる。 11. 7.5YR 3/1 黒褐色、礫φ5~10cmを含む。しまりなし。 12. 7.5YR 3/1 黒褐色、礫φ10cmを多く含む。 13. 7.5YR 2/3 強増褐色、砂質の増褐色土と小礫を含む。 14. 混成層。 15. 7.5YR 2/2 黒褐色、礫大の礫と砂質の増褐色土の混合層。 16. 7.5YR 3/1 黒褐色、小礫φ5cmを含み、硬くしまる。 17. 7.5YR 2/1 黒色、礫は少なく、硬くしまっている。 18. 7.5YR 2/3 強増褐色、礫φ20cmを多く含む、しまっている。 |
|--|--|

第82図 A-39塚



S = 1/4

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の種類・形状・外面	内面調整	時期分類	備考
323	埋土	深鉢	体部	単筋織文 L R	ミゴキ	縄文後期	
324	埋土	深鉢	体部	単筋織文 L R	ミゴキ	縄文後期	
325	埋土	深鉢	体部	単筋織文 R L	不明	弥生	

No	地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm				分類	備考
				口縁部	胴部	高部	口縁部	胴部	底面	口径	体高	底径	底厚		
326	埋土	須恵形深鉢	ロクロ	ロクロ底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	S地	
327	埋土	須恵形深鉢	ロクロ	—	明き目	—	—	十字	—	—	—	—	—	S地	
328	埋土	須恵形深鉢	ロクロ	—	明き目	—	—	当て鼻痕	—	—	—	—	—	S地	

第83図 A-39塚 出土遺物

遺物 (第83図、図版70)

縄文土器323、324は単節縄文RLで内面にミガキ調整がみられる。縄文後期の土器と思われる。弥生土器325は斜位の単節縄文RLがみられる。須恵器土器片327、328は叩き目と当て具痕跡がみられる。

(9) 溝跡

A調査区で4条、B調査区で5条、C調査区で2条の計11条が検出されている。

D-11溝跡

遺構 (第84図、図版39)

検出状況・重複関係 A調査区の西側にあり、D-11住居跡の北東約3m付近に位置している。調査区が狭く、検出された部分は少ない。全長 2.4m 溝幅 0.6m 深さ 0.2m 前後 断面形 削平されているために浅皿状を呈している。底面 凸凹している。埋土 黒褐色土の単層 遺物は出土していない。

D-17溝跡

遺構 (第84図、図版39)

検出状況・重複関係 A調査区の中央部にあり、D-17土坑の南西約3mにある。全長 2.2m 溝幅 0.3m 深さ 0.1m 断面形 削平されているために浅皿状を呈している。底面 若干の凸凹がみられる。埋土 黒褐色の単層 遺物は出土していない。

D-18溝跡

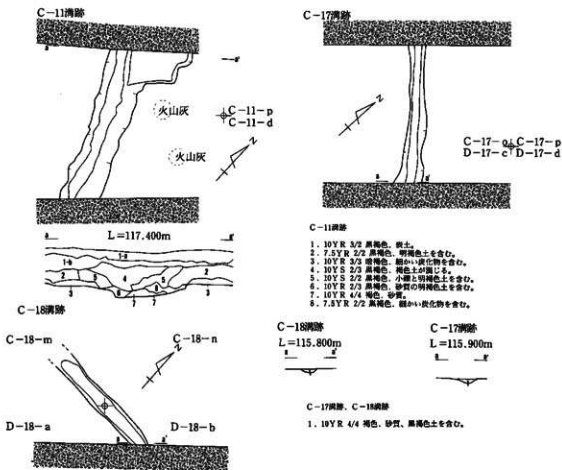
遺構 (第84図、図版39)

検出状況・重複関係 A調査区の中央部にあり、D-18陥穴状遺構の南側約2mに位置している。全長 1.8m 溝幅 0.3m 深さ 0.1m 前後 断面形 削平されているために浅皿状を呈している。底面 若干の凸凹がみられる。埋土 黒褐色の単層 遺物は出土していない。

D-19溝跡

遺構 (第85図、図版39)

検出状況・重複関係 A調査区の東側にあり、D-18陥穴状遺構の北東約12~20mに位置している。全長 2.2m 溝幅 0.3m 前後 深さ 0.1m 前後 断面形 削平されているために浅皿状を呈している。底面 若干の凸凹がみられる。埋土 黒褐色の単層 遺物は出土してい



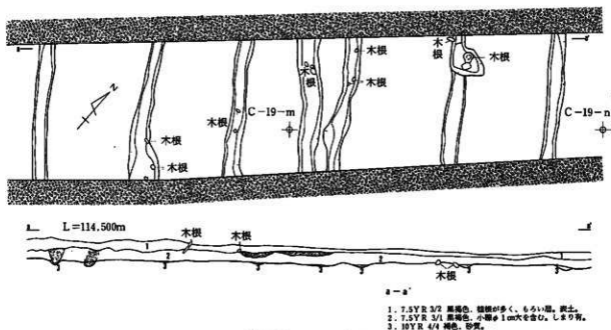
第84図 C-11・C-17・C-18溝跡

ない。

B-31-b 溝跡

遺構 (第86図、図版39)

検出状況・重複関係 B調査区の西側に位置している。調査区をほぼ南北方向に横断し、西端部は調査区域外に延びている。全長 約14m 溝幅 0.3~0.4m 深さ 0.1mを測る。底面耕作等による攪乱が見られる。埋土 黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。



第85図 C-19溝跡

B-31-c 溝跡

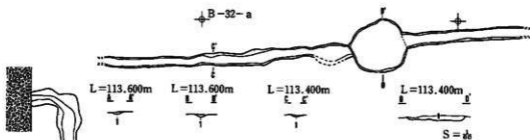
遺構 (第86図、図版39)

検出状況・重複関係 B調査区の西側に位置している。調査区を東西に横断し、両端部は調査区域外に延びている。全長 8 m 溝幅 0.2m 前後 深さ 0.25~0.6mを測る。底面 耕作等による攪乱が見られる。埋土 黒褐色の単層である。遺物は出土していない。

B-32溝跡

遺構 (第87図、図版40)

検出状況・重複関係 B調査区の西側に位置している。調査区を南北に横断し、両端部は調査区域外に延びている。全長 約35m 溝幅 0.4~1.2m 深さ 0.25~0.6m 断面形 浅い皿状を呈している。底面 植根による凸凹が見られる。埋土 上位は黒褐色土、下位は黄褐色土である。遺物は出土していない。



B-31-b 溝跡 A-A', B-B'
1. 10YR 2/2 黒褐色。しまりやや粗。

B-31-c 溝跡 C-C', D-D'
1. 10YR 2/2 黒褐色。しまりやや粗。

B-35溝跡

遺構 (第87図、図版40)

検出状況・重複関係 B調査区の中央に位置している。調査区を東西に横断し、B-36住居跡を横切りながら両端部は調査区域外に延びている。全長 約67m 溝幅 0.8~1.3m 深さ 0.15~0.25m 断面形 逆台形を呈する。底面耕作等による凸凹が見られる。埋土 硬く締まった黒褐色土で構成され、下位は砂質シルト質の褐色土が混入している。

遺物 (第87図、図版40)

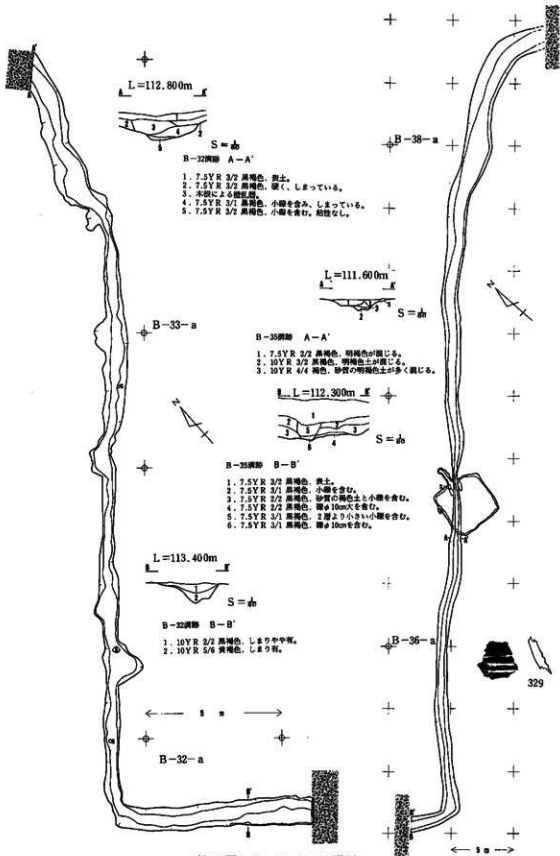
西端の溝埋土から縄文土器片 (329) とB-36住居跡付近の埋土から土師器坏片 (330)、土師器甕片 (331、332) が出土している。

B-42溝跡

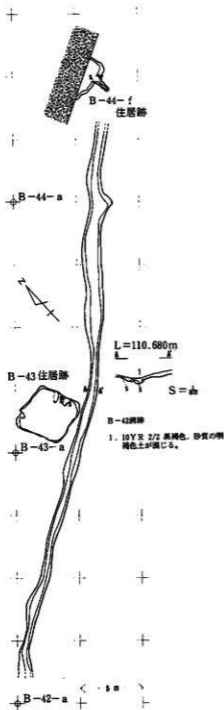
遺構 (第88図、図版40)

検出状況・重複関係 B調査区の東側に位置している。調査区を東西に横断し、南端部は削平されているためにB-44グリット付近で消滅している。全長 約44m 溝幅 0.6~1.4m 深さ 0.1m前後 断面形 逆台形を呈する。底面 植根のために凸凹している。埋土 シルト質の黒褐色である。遺物は出土していない。

第86図 B-31-b・B-31-c 溝跡



第87図 B-32・B-35溝跡



第88図 B-42溝跡

H-59-b 溝跡

遺構 (第89図、図版41)

検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置している。調査区を東西に横断している。東端部は削平されているため、H-60グリット付近で消滅している。全長 約19m 溝幅 0.5~1.3m 深さ 0.1~0.2m 断面形 浅皿状を呈している。底面 凸凹している。埋土 明褐色土を含む黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

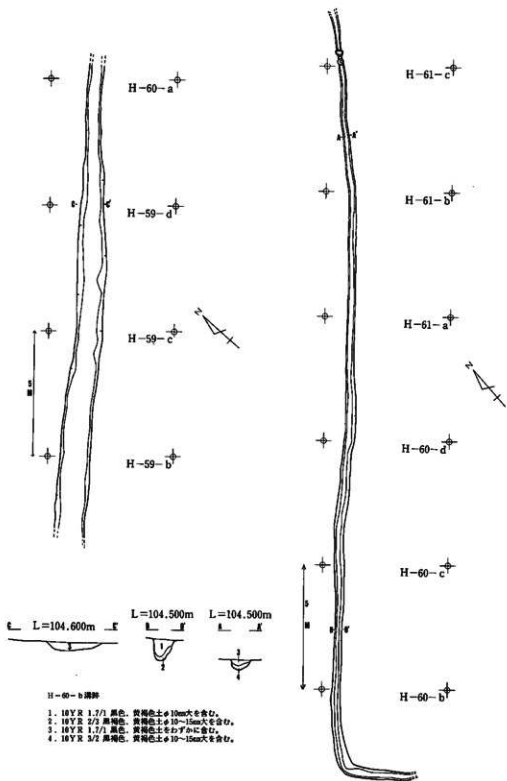
H-60-b 溝跡

遺構 (第89図、図版41)

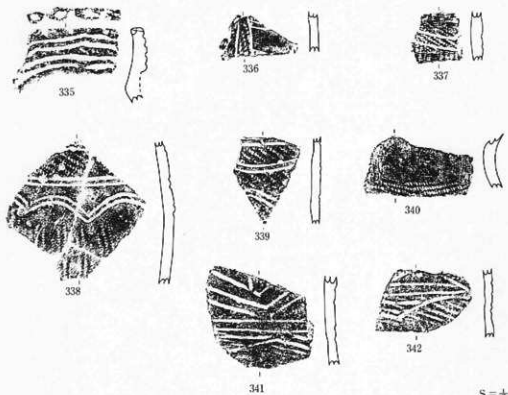
検出状況・重複関係 C調査区の西側に位置し、調査区を東西に横断している。H-61-b 住居跡を横切り、G-61-1 住居跡付近で消滅している。全長 約33m 溝幅 0.2~0.4m 深さ 0.1~0.3m 断面形 U字形を呈している。底面 凸凹している。埋土 明褐色土を含む黒色土と黒褐色土の2層で構成されている。遺物は土師器の細片が数点出土している。

遺物 (図版70)

H-60-C 住居跡付近の埋土より土師器片 (333、334) が出土している。



第89図 H-59-b・H-60-b 溝跡



S = +

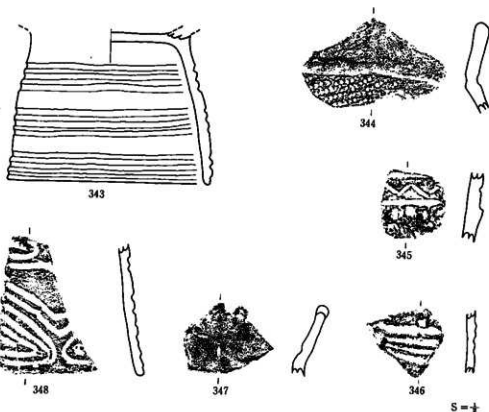
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・胎形・外面	内面調整	時期分類	備考
335	B-40	壺?	口縁部	口唇部刺突・節目、平行沈線文	ミダキ	弥生	
336	B-40	壺	体部	鋭角的な沈線施文、(斜位) 縄文R.L.、磨消	ミダキ	弥生) 同一個体
337	B-40	壺	体部	平行沈線文、横位単節縄文R.L.、斜位単節縄文R.L.	ミダキ	弥生	
338	B-40	壺	体部	単節縄文R.L.(斜位)、見L(横位)、平行沈線文、連弧文	ミダキ	弥生) 同一個体
339	B-40	壺	体部	単節縄文R.L.(斜位)、平行沈線文	ミダキ	弥生	
340	B-40	壺	体部	単節縄文R.L.(斜位)	ミダキ	弥生	
341	B-40	壺	体部	沈線文、単節縄文R.L.(斜位)	ミダキ	弥生) 同一個体
342	B-40	壺	体部	沈線文、単節縄文R.L.(斜位)	ミダキ	弥生	

第90図 遺構外(B-40)出土産物

2. 遺構外の出土遺物

遺物(第90図、図版71)

(335~340)は、B-40付近より出土した土器片である。335は壺型土器の口縁部で4本の平行沈線をもち、口唇部に刻目と刺突がみられる。336と337は同一個体と思われる。336は鋭角的な沈線が施文されていて、単節斜縄文(R.L.)を施した後に磨り消している。337はより太い沈線で平行沈線を施している。縄文は平行沈線より上は単節縄文(R.L.)を横位に施し、平行沈線より下は単節斜縄文(R.L.)を施している。338と339は同一個体の壺と思われる。平行沈線文と沈線による連弧文が施されている。縄文は平行沈線より上は単節縄文(R.L.)を横位に施



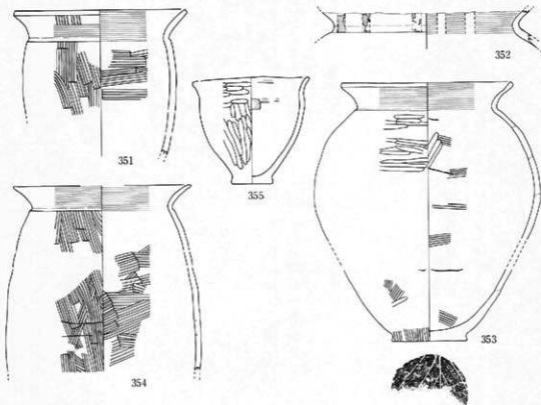
No.	出土地点・部位	器種	部位	文様の特徴・形状・外面	時期分類	備考
343	H-61-b	高坏	胴部	平行沈線文	弥生前期	
344	G-62-o	(浅)鉢	口縁部	波状口縁、内面沈線、単節縄文LR	弥生前期	
345	H-63-g・h	深鉢	頸部	隆帯、鋸歯状沈線文	縄文前期末～中期初頭	
346	G-64	(浅)鉢	頸部	沈線文	弥生前期	
347	G-65-p	深鉢	口縁部	B突起、内面沈線	弥生前期	
348	G-65-m・n	高坏	胴部	菱形工字文	弥生前期	

第91図 遺構外（C調査区）出土遺物

文し、平行沈線より下は単節斜縄文（RL）が施されている。340は単節斜縄文（RL）が施されている。341と342は同一個体の甕と思われる。単節斜縄文（RL）の後に沈線で重菱形文を施している。

遺物（第91図、図版71）

（343～348）は、C調査区出土の遺構外土器である。345は、深鉢の頸部で鋸歯状の沈線文をもつ。縄文前期末から中期初頭である。343高坏の脚部で三本一對の鋭角の平行沈線文をもつ。弥生前期のものと思われる。344は、波状口縁の一部で内面に一条の沈線をもつ。体部には単節縄文（LR）を施している。弥生前期のものと思われる。346は、頸部に沈線文をもつ鉢である。



No	地点・層位	種類・容積	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	胴高	底径		
351	塚土	土師器壺	赤ロクロ	ココナデ	網毛目	—	ココナデ	網毛目	—	(18.2)	(15.5)	—	C I 1 b	
352	塚土	土師器壺	赤ロクロ	—	ミダキ	—	—	ココナデ	—	—	(4.0)	—	F()	
353	塚土	土師器壺	赤ロクロ	ココナデ	ミダキ	本葉広	ココナデ	ミダキ	ナデ	(18.0)	(28.0)	8.9	F II	
354	塚土	土師器壺	赤ロクロ	ココナデ	網毛目	—	ココナデ	網毛目	—	(18.8)	(29.0)	—	C I 1 b	
355	塚土	土師器壺	赤ロクロ	ミダキ	ミダキ	内調整	ナデ	網毛目	—	12.5	11.4	4.4		

第92図 遺構外(C-26)出土遺物

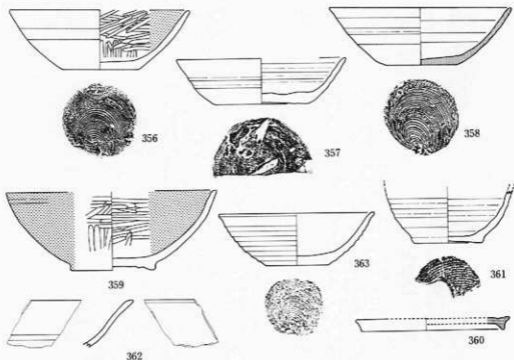
弥生前期のもと思われる。347は、深鉢の口縁部分で内面に一条の沈線をもつ。弥生前期のもと思われる。348は、高坏の脚部で変形工字文が施されている。弥生前期のもと思われる。

遺物(第92図、図版72)

(351~354)は、C-26付近より出土した土器である。351と354は外面調整がハケメの斐でありC I類に属する。352と353は壺型土器で、352は口唇部内に赤彩を施した跡がみられる。355はB-41-e付近の風倒木跡より出土している。

遺物(第93図、図版73)

(356~362)は、C調査区の遺構外出土遺物である356、357、358はC-61-e・d付近出土



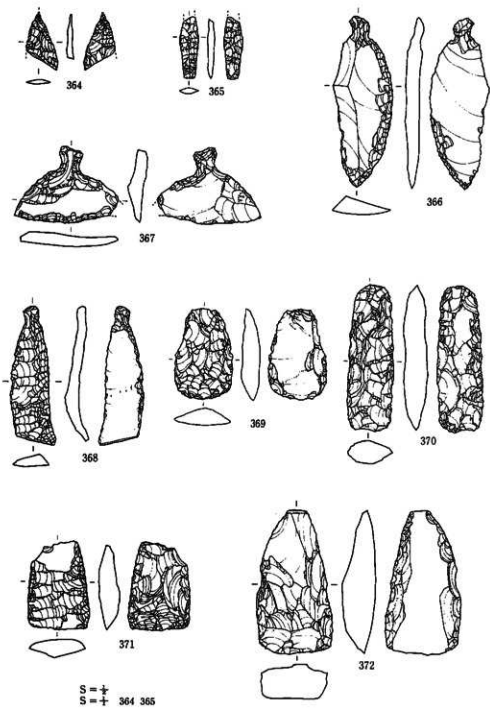
No	地点・層位	種類・器類	成形	外面調整			内面調整			計測値:cm			分類	備考
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	口径		
356	H-61-c-d	土師器環	ロクロ	ロクロ威	ロクロ威	須恵赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(14.4)	4.6	6.0	B1	黒色処理
357	H-61-c-d	あかやき環	ロクロ	ロクロ威	ロクロ威	ヘラ切り	ロクロ威	ロクロ威	—	(13.6)	3.6	7.5	A環	—
358	H-61-c-d	須恵器環	ロクロ	ロクロ威	ロクロ威	須恵赤褐色	ロクロ威	ロクロ威	—	14.6	4.6	5.6	S環	—
359	G-62-a-p	土師器環	非ロクロ	ミガキ	ミガキ	台付?	ミガキ	ミガキ	ミガキ	(16.8)	6.3	6.8	A1C	磨製黒色処理
360	G-63	須恵器蓋	ロクロ	—	—	—	—	—	—	(12.4)	1.0	—	S蓋	—
361	G-63	土師器甕	ロクロ	—	ロクロ威	赤切り威	—	ロクロ威	—	—	(4.5)	5.4	E(Ⅰ)	—
362	G-63	あかやき環	ロクロ	ロクロ威	ロクロ威	—	ロクロ威	ロクロ威	—	—	—	—	A環	—
363	H-65-d	あかやき環	ロクロ	ロクロ威	ロクロ威	須恵赤褐色	ロクロ威	ロクロ威	—	12.4	4.2	5.0	A環	—

第93図 遺構外（C調査区）出土遺物

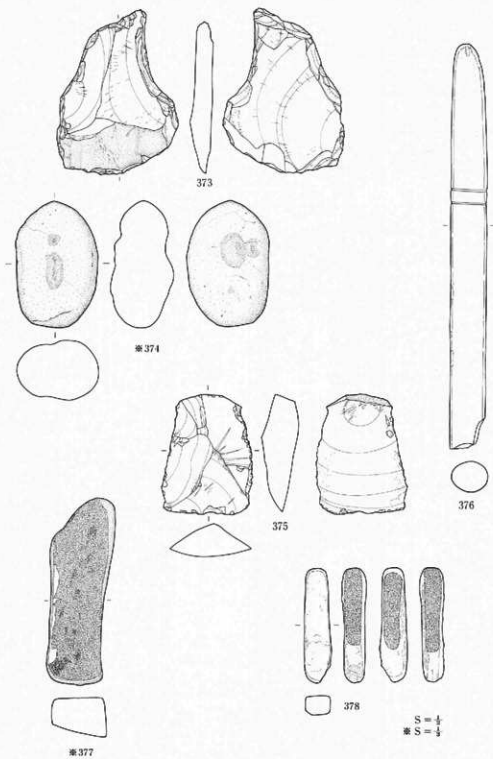
の土師器環、あかやき環、須恵器環である。357の底部切り離しは、ヘラ切りである。359、360、361、362はG-63付近出土の土師器環、あかやき環、土師器甕、須恵器蓋である。359の底部は平底でなく、両面に黒色処理がされている。362は器高の底い、「皿」にちかい環である。

遺物・石器（第94、95図、図版74、75）

遺構外出土の石製品は364、365の石鏃2点、石匙3点、石篋4点、打製石斧1点、凹石1点、剥片石器1点、砥石2点、石棒1点の合計15点である。368は先端部分が直線的に切られ、剥離や加工調整からみて未製品の可能性がある。打製石斧373の側面に敲打痕がみられる。凹石374は表に3個、裏に2個の凹みをもつ。砥石378は三面の磨り面があり、大きさから手持ちの砥石と推定される。



第94図 遺構外出遺物(石器I)



第95圖 遺構外出遺物（石器2）

No	出土地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	石 質	特 徴・備 考
			長 さ	幅	厚 さ			
364	G-60	石鏃	(2.4)	(1.6)	(0.3)	1.1	珪質粘板岩	基部破損
365	H-65	石鏃	(3.3)	(1.0)	(3.5)	1.1	珪質凝灰岩	基部、先端部欠損
366	G-62	石鏃	9.1	3.2	0.9	20.3	珪質凝灰岩	
367	H-60	石鏃	4.1	(5.2)	(0.8)	12.9	珪質粘板岩	刃部一部破損
368	G-64	石鏃	7.2	2.8	0.8	12.5	珪質凝灰岩	未製品か(?)
369	D-13	石鏃	7.2	4.6	1.4	52.4	凝灰質硬質砂岩	
370	H-63-b	石鏃	11.6	3.7	1.9	98	珪質泥岩	
371	G-65	石鏃	(4.7)	3.3	(1.1)	18.8	珪質泥岩	基部破損
372	G-64	石鏃	7.7	4.0	1.8	61.0	珪質凝灰岩	

No	出土地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	石 質	特 徴・備 考
			長 さ	幅	厚 さ			
373	G-62	打製石斧	(12.4)	(9.6)	(1.8)	249.0	凝灰質粘板岩	基部破損
374	G-62-o-p	凹石	10.1	6.6	4.9	385.0	ディサント	
375	G-65	剥片石鏃	(6.4)	(4.8)	(1.9)	51.9	珪質凝灰岩	基部破損
376	H-59~60	石鏃	(32.4)	(2.9)	(2.3)	433.0	凝灰岩ホルンフェルス	頸部2本の欠損
377	D-18	礫石	14.9	5.0	3.1	322.0	新長石斑紋岩	
378	G-62	礫石	9.2	2.2	1.5	57.9	千枚岩	3面破損

遺構外出土遺物 (石器)

V. まとめ

1. 竪穴住居跡

(1) 縄文時代

縄文時代前期末葉から中期初頭と推定される竪穴住居跡が1棟検出されている。平面形は楕円形を呈するものと推定される。規模は径4.1×(3.6) mのものである。炉は土器埋設炉で、住居跡のほぼ中央に位置している。壁は大半が削平されており、平安時代の竪穴住居跡と重複している。柱穴状のピットは検出されているが、柱穴配列は不明である。床面は炉付近が特に硬く締まっている。出土遺物は少なく、前期末葉から中期初頭の特徴をもつ土器が出土している。住居跡の占地は段丘の縁辺部で、平安時代の竪穴住居跡が検出されている位置である。

(2) 古代

平安時代と推定される竪穴住居跡が25棟検出されている。(住居跡同士の重複3棟、住居跡状遺構2棟を含む) 調査区別の住居跡の検出数は、A調査区6棟、B調査区8棟、C調査区11棟である。調査面積の違いもあるが、竪穴住居跡の密度はB調査区からC調査区の西側の段丘の縁辺部が濃い。

全体を調査できたものは13棟、調査区域外へでることにより部分調査になるもの12棟である。当該時期の竪穴住居跡が重複関係をもつもの2棟である。新旧関係のある複数のカマドの存在から、重複していると考えられる住居跡は4棟である。

床面積が計測できたものは25棟である。最小は5.4㎡のG-60-P住居跡、最大は54.0㎡のG-62-0住居跡である。G-60-i住居跡は壁際にカマドは検出されず、中央部分に炉と推定される焼土が確認できたことからカマドをもつ型式の竪穴住居跡とは違っている。

主軸方向は、カマドが設置された壁に直交する線が真北と作る角度として計測している。したがって、ほぼカマド-煙道部方向に近似する。(壁と煙道部の方向のズレが大きい場合、カマドの方向を主軸方向としている)

〈カマド位置の動き〉G-60-m住居跡とH-60-c住居跡はカマドの作り替えがあると推定される。G-60-m住居跡のカマドは、北東壁の西寄り(3号カマド)から北東壁の中央部2号カマド、それから南西壁の南隅寄り(1号カマド)へと移動している。H-60-c住居跡のカマドは南壁の中央部(H-60-c②住居跡)から、西壁の南隅寄り(H-60-c①住居跡)へとカマドが移動している。

住居跡	平面形	規模	床面積	主軸方向	柱穴	カマドの位置	煙道部	ピット	時代	備考
C-3	不明	3.7×()	(5.2)	E-8'-N	-	東壁南寄り	掘込	1	平安	部分調査
D-6住居跡状	不明 (方形?)	3.2×()	(4.7)	-	-	-	-	-	平安	部分調査
D-10	不明 (方形?)	一辺7mと 推定	(7.0)	-	5	-	-	1	平安	部分調査
D-11	不明 (方形?)	2.0×()	(2.3)	S-22'-E	1	南西壁東隅	-	-	平安	部分調査
D-11住居跡状	不整形	2.3×()	(3.7)	-	-	-	-	-	平安	部分調査
D-15	不明 (方形?)	3.6×()	(4.1)	-	2	南東壁西寄り	-	-	平安	部分調査
C-24住居跡状	方形	3.1×3.0	9.8	-	-	なし	-	-	不明	
B-36	方形	4.1×4.0	15.9	N-8'-E	4	北壁中央部	掘込	-	平安	溝と重複
B-41-c	方形	3.6×3.8	13.1	N-1'-E	0	北壁中央部	削貫	0	平安	
B-41-h	方形(?)	4.6×()	(10.5)	N-15'-E	0	北壁東寄り	掘込	0	平安	部分調査
B-43	方形(?)	3.8×3.8	14.1	N-26'-E	0	東壁中央部	不明	0	平安	
B-44-f	不明	3.6×()	(2.9)	S-6'-E E-3'-S	0	南壁東寄り 東壁南寄り	削貫 削貫	0	平安	部分調査
B-44-g	方形	3.4×4.0	(12.9)	不明	2	(北壁中央)	不明	-	平安	部分調査
B-44-j	方形(?)	4.6×()	(8.8)	不明	1	不明	不明	0	平安	部分調査

掘込：掘り込み式 削貫：削り貫き式

第2表 古代住居跡一覧表(1)

住居跡	平面形	規模	床面積	主軸方向	柱穴	カマドの位置	煙道部	ピット	時代	備考
G-59-o	方形	2.5×2.5	5.8	S-7-W	0	南壁東寄り	掘込	1	平安	
G-60-h	方形	3.7×()	(3.8)	S-44-W	0	南西壁南寄り	掘込	0	平安	部分調査
G-60-i	長方形	8.0×6.9	(53.4)	—	24	—	—	1	平安	地床炉(?)重複
G-60-m	長方形	4.4×5.0	24.1	S-35-W N-34-E N-36-E	3	南西壁南寄り 北西壁中央部 北西壁西隅	掘込 刳貫 刳貫	0	平安	重複
G-60-p	方形	2.3×2.3	5.4	E-51-S E-20-N	0	南壁東隅り 東壁南隅寄り	掘込 刳貫	3	平安	
H-60-c	(方形)	4.0×3.9	14.4	N-1-W	3	南壁東隅寄り	刳貫	0	平安	
H-60-1	方形	2.1×2.1	(4.4)	N-14-E	0	北壁中央部	掘込(?)	1	平安	
G-61-1	方形	7.1×7.1	51.3	N-4-E	9	北壁中央部	刳貫	1	平安	
H-61-b	方形	2.3×2.5	(5.4)	E-6-N	0	東壁南隅寄り	掘込(?)	1	平安	溝と重複
H-61-h	方形	3.1×3.2	(9.5)	不明	0	南壁東寄り	不明	4	平安	部分調査
G-62-o	方形	7.6×7.2	54.0	N-5-W	2	北壁中央部	刳貫	2	平安	

第3表 古代住居跡一覧表(2)

()は調査範囲での確認および推定

2. ビット

17基のビットが検出されている。出土遺物から時期別の内訳は、縄文時代5基、平安時代6基、不明6基である。

縄文時代 (5基)	平安時代 (6基)	不明 (6基)
H-59-d	B-36	C-10
G-62-p	B-43	C-11
H-63-b	G-60-m	C-17
H-63-1	G-60-o	G-60-k
H-64-i	G-61-i	G-60-p
	H-61-b	G-63-i

第4表 ビット一覧表

縄文時代のビットの平面形は円形2基、楕円形1基、不整形2基である。開口部径は1.1×1.2～2.4×3.1mとバラツキがあるが、1～2mのものが主体である。深さは0.3～1.0mと浅い。出土遺物は縄文土器で、少量である。

平安時代のビットの平面形は円形2基、棒状1基、不整形3基である。B-43土坑とG-61-i土坑の埋土には焼土がみられる。開口部径は0.8×1.1m～1.7×3.0mとバラツキがある。深さは0.1～0.5mと浅い。出土遺物は土師器と須恵器であり、B-43土坑以外は少量である。

3. 焼土遺構

5基の焼土遺構が検出されている。縄文時代1基、平安時代4基である。平面形は円形であるH-63-b焼土遺構、楕円形近いB-44-e焼土遺構とB-44-k焼土遺構以外は不整形である。規模は、長径が0.5～1.9m、短径が0.4～0.9mで、焼土の厚さは0.1m前後である。

H-62-a焼土遺構は出土遺物から、H-62-a住居跡の時期とほぼ同じ縄文時代前期末葉から中期初頭と考えられる。また、H-63-b焼土遺構は、あかやき坏、土師器甕等の出土遺物から平安時代の新期に位置づけられる。

遺構名	時代	平面形	規模(m)	厚さ(m)
H-62-a 焼土遺構	縄文	不整形	0.6×0.7	0.1
A-37 焼土遺構	平安	不整形	0.9×1.9	0.1
B-44-e 焼土遺構	平安	ほぼ楕円形	0.8×1.7	0.1
B-44-k 焼土遺構	平安	円形にちかい不整形	0.7×1.2	0.1
H-63-b 焼土遺構	平安	円形	0.4×0.5	0.1

第5表 焼土遺構一覧表

4. 出土遺物 (古代)

ここでは、本遺跡の主に竪穴住居跡から出土した土器器について分類し、各遺構ごとに時間的な前後関係をみていきたい。項目数に入れた数は、竪穴住居跡の床面や埋土下部から出土した遺物だけではないので、確実なセット関係や共伴関係を把握するには十分な資料ではない。

坏形土器

ロクロ使用の有無から、A類：ロクロ未使用のもの、B類：ロクロ使用のものに分けられる。

1) ロクロ未使用のものは、底の形状や黒色処理の有無から次のように細分した。

A I類：丸底のもの

A II類：平底のもの

更に、A I類はA I a類：黒色処理するもの、A I b類：黒色処理しないもの、A I c類：両面に異色処理するものに分けられる。

2) ロクロを使用するB類は底部切り離し技法の種類、再調整の有無から5つに分類した。

B I類：回転糸切り無調整のもの

B II類：回転糸切りの後、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの

B III類：静止糸切りの後、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの

B IV類：底部全面に手持ちヘラケズリを行い、切り離しが不明のもの

B V類：体部下端から底部に回転ヘラケズリを行い、切り離しが不明のもの

B VI類：底部切り離しがヘラケズリのもの

壺形土器

ロクロ未使用のものと、ロクロ使用のものに分けられる。ロクロ未使用の壺については器高に一定の基準を設け、体部球型の壺以外に対し、大型の壺をC類、中・小型の壺をD類としこれに器高・口縁部の形状・外面の調整技法を加味しこれらを組み合わせて分類した。

1) 器高と段の有無

C類 (器高が20cm以上の大型の壺)

C I類：口縁部と体部をつなぐ頸部に明瞭な段を持つもの

C II類：口縁部と体部をつなぐ頸部に特に識別できる段を持たないもの

D類 (器高が20cm未満の中・小型の壺)

D I類：口縁部と体部をつなぐ頸部に明瞭な段を持つもの

D II類：口縁部と体部をつなぐ頸部に特に識別できる段を持たないもの

2) 口縁部の形状

1. 口縁部が強く外反するもの

2. 口縁部が外傾するもの

遺物名		C-3住	B-36住	B-41-c住	B-41-h住	B-43住	B-44-f住	B-44-g住	B-44-j住	C-26
土器 環	A I			3	2					
	A II a		4	5	1					
	A (I) a				1					
	A (I) c	1								
	A II b		1							
	B I	1		1		4		1		
	B IV	1								
	B ()				1		1			
土器 中・小 環	C I 1 b		1	1						2
	C I 2 b			2						
	C II 1 b		1	2	1	1				
	C II 2 ()		1							
	C III () b							1		
	C (X) b			1				1		
	D I 1 a									1
	D I 2 b			1						
	D II 1 a		1							
	D II 2 b		2		1					
土器 環	D II 2 d							1		
	D (X) b	1		2	1		2			
	D (X) d				1					
	D (X X)							1		
	E I a	1				1	1			
	E I ()	1								
	E () a									
	E II a	1		1				1		
	E III ()	1								
	土器 環	F I								
F II							2			1
F ()				2				1		1
鉢	G	1	1					1	1	
あかやき(瓦)	環	1		1	1					
須恵器CS環	1	1	1		1	3		1		
須恵器CS環	1	1	1	1		1	2	3		
小環土器			1							
鉄製品			2	1	1					
石製品		1		1						
須恵器CS壺	1		3		1					
須恵器CS壺			1							

第6表 遺物別出土遺物(1)

分類	遺物名	遺物名											
		G-10-a位	G-10-b位	G-10-c位	G-10-d位	G-10-e位	H-10-a位	H-10-b位	G-11-1位	H-11-1位	H-11-2位	G-12-a位	H-12-b位
土師器 土 器 環	BI	1	1		1		4		8			4	
	BI	1			1		1						
	BIV				1		3						
	BV								1			2	
	BVI								1				
大 土 器 類	B(I)	2	1	3	1		5		1	2	1		
	CI1b								1			1	
	CI2b				2							1	
	CI3b								1				
	CH2b				1								
	CH3a								1				
	CH3b								1				2
	CH3()												1
	CH1b				1		1						
	C(Ⅰ)a								1				
	C(Ⅰ)b						2		8			2	1
中 小 土 器 類	DH1a					1							
	DH2b								1				
	DH3b								1				
	D(Ⅰ)a	1										1	
	D(Ⅰ)b						2		2			2	
D(ⅠX)		1		2									
ロ ク ロ 使 用 器	EIa	1			1		5				1		
	E(I)						1						
	EIIb												
	EIII()						1						
	E(Ⅰ)a	2		2	3		2						
	E(Ⅰ)b	2									1		
	E(ⅠX)	1	2	6			2			2	1		
遺F	1							4			3		
赤かやき(AKF)	1	1		3		3		7		1	3	11	
須恵器(SF)	5		1	4		3		14		1	4		
須恵器(SB)	4	3		1		2				1	2		
須恵器(SB)				2		2		5			1		
鉄 器				1				1			3		
石製品	1	1						3			6		

第7表 遺構別出土遺物(2)

3. 口縁部が直立気味に立ち上がるもの

3) 外面の調整技法

a. 入念なヘラミガキ調整が施されるもの

b. ハケメ調整が施されるもの

c. 最終調整でヘラミガキ調整されているが、前段階のハケメ調整が大きく露出しているもの

4) ロクロ使用した甕をE類とする。大きさからE I類：器高20cm以上のもの、E II類：器高20cm以下のものに分類する。E I類、E II類とも口唇部の特長からそれぞれふたつに細分した。

E I a類：口唇部が引き出されるもの

E I b類：口唇部が単に丸くおさまられるもの

E II a類：口唇部が引き出されるもの

E II b類：口唇部が単に丸くおさまられるもの

壺形土器

胴部が球型のをF類とする。大きさからF I類：器高30cm以上のもの、F II類：器高30cm以下のものに分けられる。

鉢形土器

相対的に坯より口縁部が短く外反し、口唇部が上下に引き出され、最大径が体部中半～上半にある口径に比べ器高の高いものをG類とする。

5. 出土遺物分類群の帰属と時期

さきに記載した土師器と須恵器等の特徴と遺物の比較的出土した各遺構（住居跡）から、時間的な序列をもつ3つの土器群が設定できる。

（図6は、主に出土した坯や甕を項目別にし、図化したものである。厳密な分類ではない。）

I群：B-41-c住居跡とB-36住居跡の出土遺物が指標になる。土師器は坯がA I・A II類、甕がC I・C II類、D類、壺の組成である。須恵器坯や須恵器甕も出土しているが、次のII群とは大きく異なる。

I群の住居跡3棟はB調査区の中央部分に位置し、住居跡の規模が一辺4m程、カマドの位置が北壁であるなど似ている点が多い。

II群：G-61-1住居跡とG-62-0住居跡の出土遺物が指標となる。土師器は坯が主にB I・B II類、甕がC I・C II類とD類、あかやき坯(A坯)、須恵器坯、須恵器甕の組成である。II群としたうちG-61-1住居跡とG-62-0住居跡では土師器壺(F)が出土している。

II群の住居跡は6棟である。6棟のうちG-61-1住居跡・B-43住居跡・B-44-g住居跡とG-60-m住居跡・G-62-0住居跡・H-60-c住居跡の違いがあると思われるが、細

須 惠 器 坏	S			(B-44-j 住)
	A		(B-44-f 住)	
あ か や き 坏	A			H-61-h 住
	B	H-60-c 住 G-62-o 住 G-60-m 住 B-43 住 B-44-g 住 G-61-l 住	(G-60-p 住)	G-60-h 住 (G-60-i 住) G-59-o 住 H-61-b 住 C-3 住
ロ ク ロ 未 使 用 坏	A	B-36 住 B-41-h 住 B-41-c 住		
		ロクロ未使用壺 C 類	ロクロ未使用壺 D 類	ロクロ使用壺 E 類
				須 惠 器 壺 S 壺

図6 主な出土坏、壺と出土遺構（住居跡）

分できるほどの裏付けはなく同一群扱いとする。6棟の住居跡の特徴は、規模では一辺7m大のG-61-l住居跡・G-62-o住居跡と一辺4m程のB-43住居跡・B-44-g住居跡・G-60-m住居跡・H-60-c住居跡に二分される。また、カマド位置では北壁のB-44-g住居跡・G-60-m住居跡・G-61-l住居跡・G-62-o住居跡、南壁のH-60-c住居跡・G-60-m住居跡、東壁のB-43住居跡に三分される。G-60-m住居跡はカマドの移動があるが、時期は特定できなかった。

III群：C-3住居跡とG-59-o住居跡の出土遺物が指標となる。土師器は坏がB類、壺がE類、あかやき坏(A坏)、須惠器坏、須惠器壺の組成である。III群のC-3住居跡、G-59-

○住居跡とG-61-h住居跡では土師器甕D類が僅かに出土している。

Ⅲ群とした住居跡は5棟である。G-60-i住居跡はカマドはなく、地床炉が検出されている。他の住居跡のカマドは東壁がC-3住居跡・H-61-b住居跡、南壁がG-59-o住居跡・G-60-h住居跡（本文中では「南西壁南寄り」としている）。住居跡の規模では、一辺が2.5 m前後のG-59-o住居跡・H-61-b住居跡と一辺が4 m弱のG-60-h住居跡・H-61-b住居跡に二分される。

以上のⅠ群～Ⅲ群の時期は、高橋（1982）の岩手県の土師器の編年に対比させるとおおよそ次のようになると思われる。

Ⅰ群は高橋のⅢ-1群に近いものと考えられ、9世紀代に位置づけられる。Ⅱ群はⅢ-2群の古い時期、Ⅲ群はⅢ-2群の新しい時期に位置づけられる。したがって、Ⅱ群は9世紀末から10世紀前半、Ⅲ群は10世紀後半に位置すると思われる。

さらに、焼土遺構として調査しているあかやき坏と土師器甕の出土したH-63-b焼土遺構の時期は、10世紀末から11世紀代のものと思われる。（類例として、北上市川端遺跡、北上市塚遺跡と北上市極楽寺跡出土の赤焼き土器があげられる。）

引用文献・報告書

- 氏 家 和 典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底坯をめぐって」山形の考古と歴史
- 司 東 真 雄 1968 「北上市史第一巻原始・古代(1)」北上市
- 沼 山 源 喜 治 1969 「胆沢城址出土の糸切轆轤土師器とその編年の考察」北奥古代文化第2号
- 小笠原 好 彦 1971 「丹塗土師器と黒色土師器」考古学研究18-2
- 小笠原 好 彦 1976 「東北地方における平安時代の土器についての二・三の問題」東北考古学の諸問題
- 桑 原 滋 郎 1976 「須恵系土器について」東北考古学の諸問題
- 桑 原 滋 郎 1976 「東北地方北部および北海道の所謂第一型式の土師器について」
- 高 橋 信 雄 1977 「岩手県のロクロ使用土師器について」考古風土記2
- 北上市教育委員会 1977 「尻引遺跡調査報告書」北上市教育委員会
- 佐久間 豊 1978 「奈良平安期土器の型式学的分析」考古学雑誌25-2
- 歴史時代土器研究会 1978 「歴史時代土器の研究Ⅰ—東日本に於ける土器編年—」歴史時代土器研究会
- 白 鳥 良 一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」研究紀要Ⅶ
- 本 堂 寿 一 1980 「極楽寺伝座主坊緊急発掘調査報告書」北上市立博物館研究報告3
- 吉 良 哲 明 1980 「原色日本貝類図鑑」保育社
- 岩手県文化振興事業団 1981 「宮野目十三塚発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団
- 一戸町教育委員会 1981 「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」一戸町教育委員会
- 盛岡市教育委員会 1981 「志波城跡Ⅰ」盛岡市教育委員会
- 岩手県教育委員会 1982 「猫谷地遺跡」岩手県文化財調査報告書第71号
- 斉 藤 淳 也 1982 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」(猫谷地遺跡)
- 岩手県文化振興事業団 1982 「金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ」岩手県文化振興事業団
- 高 橋 信 雄 1982 「古代」岩手の土器 岩手県立博物館
- 仙台市教育委員会 1982 「栗遺跡発掘調査報告書」
- 高 橋 信 雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土師器の対比」北奥古代文化13
- 相 原 康 二 1983 「岩手南部(北上川中流域)における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」考古学論叢Ⅰ
- 八戸市教育委員会 1983 「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ」八戸市教育委員会
- 小井川 和 夫 1984 「いわゆる赤焼土器について」東北歴史資料館研究紀要10
- 吉 沢 幹 夫 1984 「宮城県出土の墨書土器について」東北歴史資料館研究紀要10
- 成 瀬 正 和 1984 「赤色塗彩土器・漆塗土器について」寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 埼玉県教育委員会
- 江釣子村教育委員会 1985 「江釣子遺跡群—昭和62年度—」江釣子村教育委員会
- 江釣子村教育委員会 1985 「江釣子遺跡群—昭和59年度—」江釣子村教育委員会
- 平凡社 1985 「世界海産貝類大図鑑」

岩手県文化振興事業団	1986	「桂平遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1986	「古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
野田村教育委員会	1987	「古館山」	野田村文化財調査報告書
岩手県文化振興事業団	1987	「飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1988	「平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
北上市教育委員会	1988	「藤沢遺跡調査報告書」	北上市教育委員会
岩手県文化振興事業団	1988	「石田・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
北上市教育委員会	1988	「牡丹畑遺跡」	北上市教育委員会
岩手県文化振興事業団	1989	「夏本遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1989	「管波Ⅰ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1989	「源道遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
江釣子村教育委員会	1989	「江釣子遺跡群—昭和63年度—」	江釣子村教育委員会
光井文行	1989	「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について」	研究紀要Ⅶ 岩手県文化振興事業団
和賀町教育委員	1989	「和賀町遺跡分布調査報告書Ⅰ」	和賀町教育委員会
岩手県文化振興事業団	1989	「南日誌遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1990	「岩崎城西遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団
岩手県文化振興事業団	1991	「上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書」	岩手県文化振興事業団

写 真 图 版



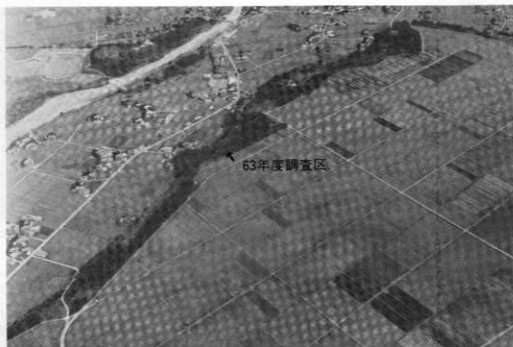
北から

写真図版1 空中写真(1)



西から

写真図版 2 平成元年度調査区



西から



西から

写真図版3 空中写真(2)



D-10付近調査前（西から）



B-35付近調査前（東から）



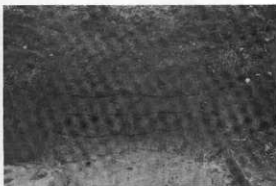
B-44付近調査前（東から）



C調査区調査前



土層断面（1）



土層断面（2）

写真図版4 遠景・土層断面



全 景



東西断面（北から）



南北断面



地床炉断面

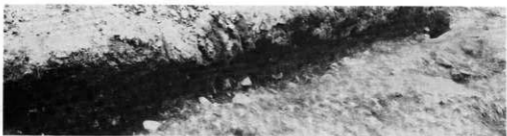


土器内部

写真図版 5 H-62-a 住居跡



全 景 (東から)



東西断面



カマド現況



柱穴断面

写真図版 6 C-3住居跡



全 景



土層断面(東西)



南北断面



作業風景

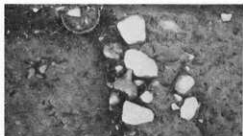
写真図版 7 D-6 住居跡状遺構



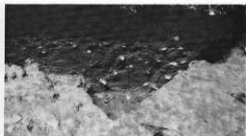
全 景 (西から)



土層断面

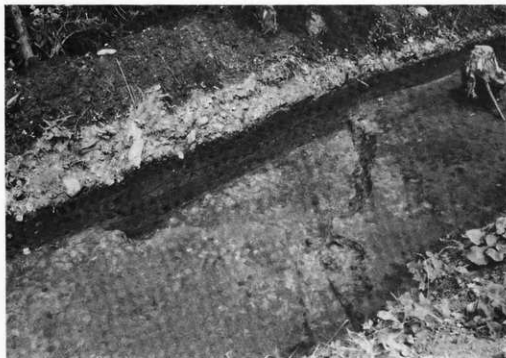


土器出土状況

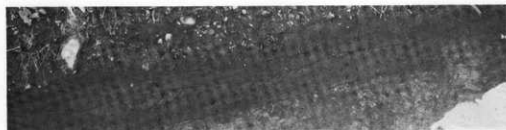


東隅断面

写真図版 8 D-10住居跡



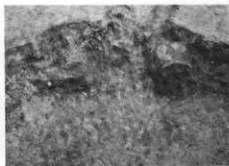
全 景 (南から)



土層断面 (南から)



カマド断面

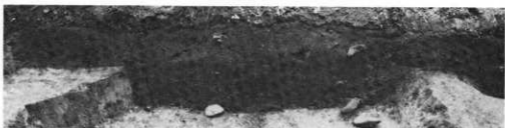


カマド断面

写真図版 9 D-11 住居跡



全 景



土層断面



土坑との
重複関係



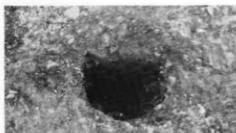
写真図版10 D-II住居状遺構



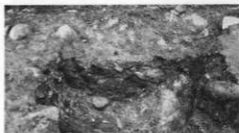
全 景 (南から)



土層断面



柱穴断面

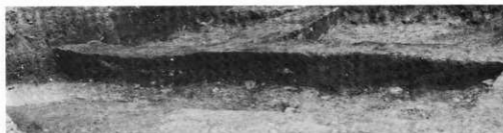


ビット断面

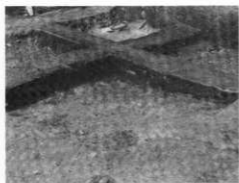
写真図版II D-15住居跡



全景 (西から)



南北断面

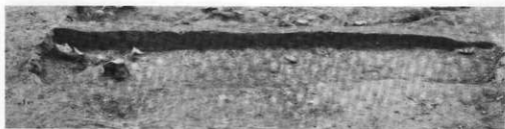


東西断面

写真図版12 C-24住居跡状遺構



全 景 (南から)



東西断面



カマド 断ち割り



煙道断面

写真図版13 B-36住居跡



全 景 (南から)



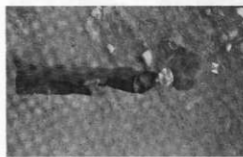
南北断面



東西断面



カマド断面



煙道断面

写真図版14 B-41-c 住居跡



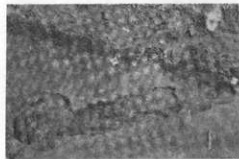
全 景 (西から)



東西断面



煙道断面



煙道先端

写真図版15 B-41-h 住居跡



全景 (西から)



東西断面

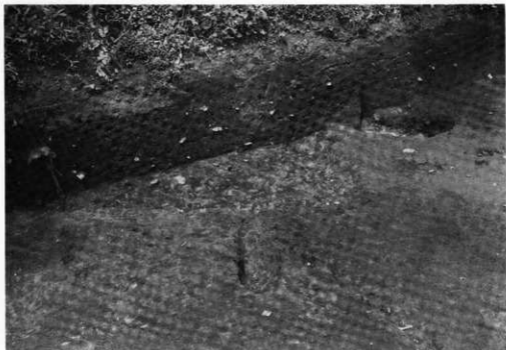


カマド現況

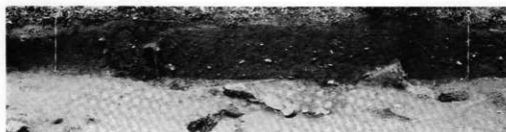


カマド断面

写真図版16 B-43住居跡



全 景 (南から)



東西断面



カマド1 断ち割り



カマド2 断面

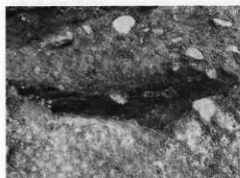
写真図版17 B-44-f 住居跡



全 景 (南から)



東西断面

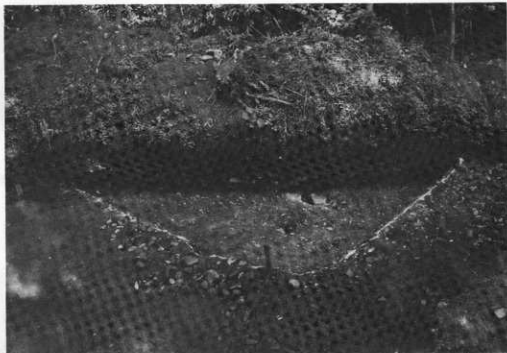


ピット 断面



ピット 完掘

写真図版18 B-44-g 住居跡



全 景 (北から)



東西断面

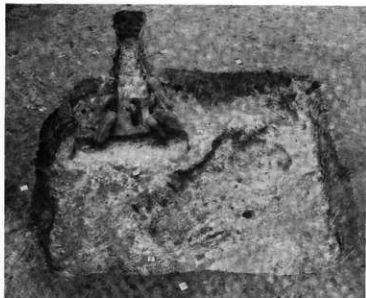


南北断面



土器出土状況

写真図版19 B-44-j 住居跡



全 景 (北東から)



カマド 断ち割り



煙道断面



カマド 断面

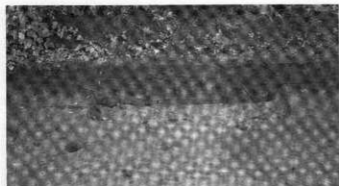


南北断面 (東から)

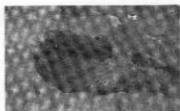


東西断面 (北から)

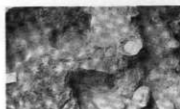
写真図版20 G-59-o 住居跡



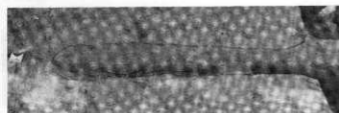
全 景 (南から)



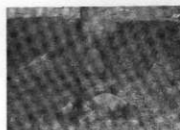
カマド 断面



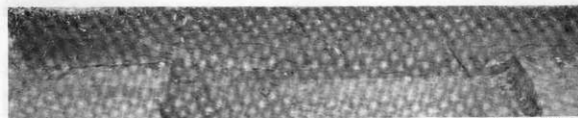
カマド 断面



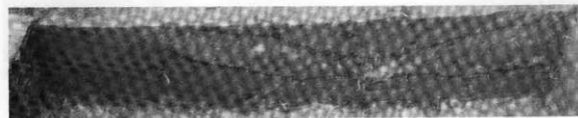
煙道断面



カマド



東西断面 (南から)

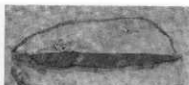


南北断面 (東から)

写真図版21 G-60-h 住居跡



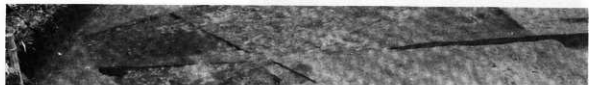
G-60-i 住居跡 全景 (南西から)



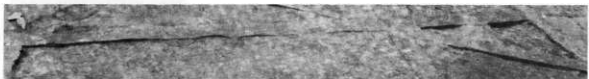
焼土断面



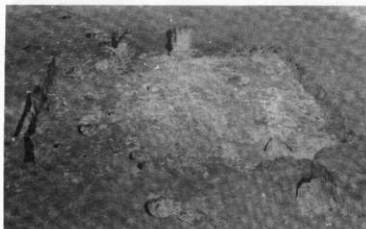
焼土完掘



南北断面 (西から)



東西断面 (南から)



G-60-m 住居跡 全景



カマド | 断面

写真図版22 G-60-i 住居跡、G-60-m 住居跡 (1)



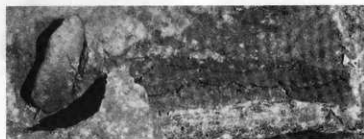
カマド1 煙道断面



カマド1 断ち割り



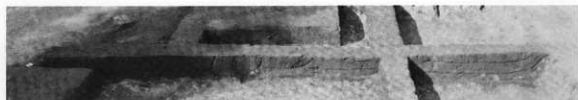
カマド2 断ち割り



カマド3 煙道断面



カマド3 断ち割り



南北断面 (西から)



東西断面 (北から)

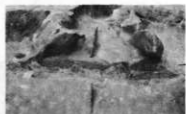
写真図版23 G-60-m住居跡 (2)



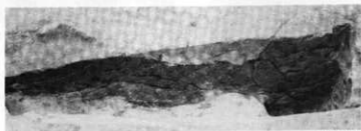
全 景 (西から)



カマド 断面



カマド 断ち割り



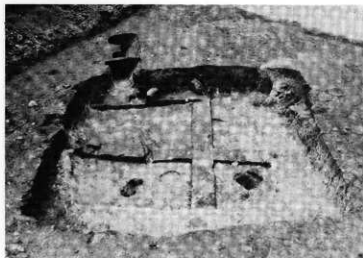
煙道断面



東西断面 (南から)



南北断面 (西から)



全 景 (北東から)



カマド 断面



カマド 断ち割り



煙道断面



床面状況

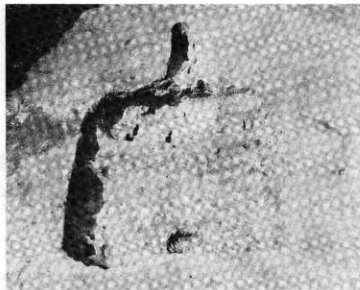


南北断面 (東から)

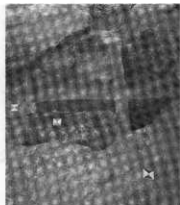


東西断面 (南から)

写真図版25 H-60-c 住居跡



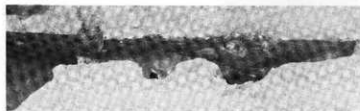
全景



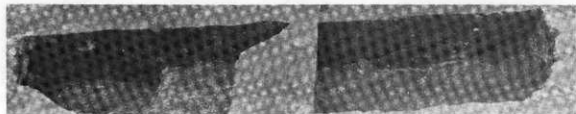
カマド 断面



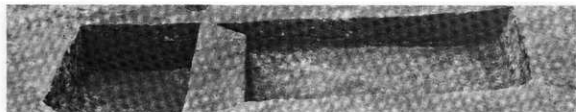
カマド 断面



煙道断面



南北断面

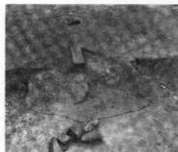


東西断面

写真図版26 H-60-1 住居跡



全 景 (南から)



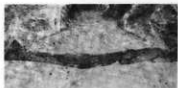
カマド 検出状況



カマド 断面



煙道断面



カマド 断ち割り



南北断面



東西断面

写真図版27 G-61-1 住居跡



全 景 (南から)



カマド 断面



カマド 断ち割り



煙道断面



南北断面 (西から)

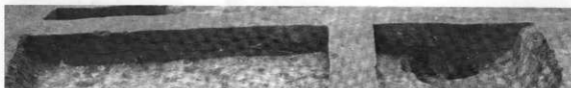


東西断面 (北から)

写真図版28 H-61-b住居跡



全 景 (北から)



南北断面 (西から)



東西断面 (北から)

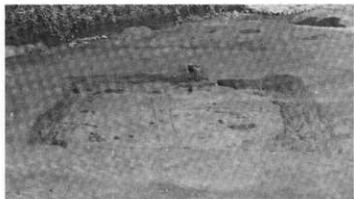


カマド 断面



カマド 断面

写真図版29 H-61-h住居跡



全 景



カマド 現況



カマド 断面



煙道断面



カマド 先端



南北断面 (西から)



東西断面 (北から)

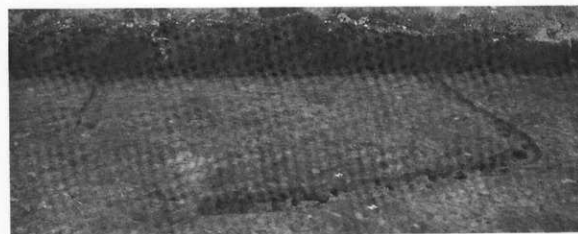
写真図版30 G-62-o 住居跡



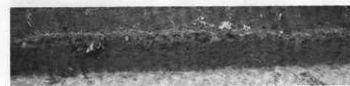
A-37円形周溝跡 全景



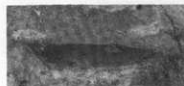
A-37円形周溝跡 断面



G-59-g 方形周溝跡 全景

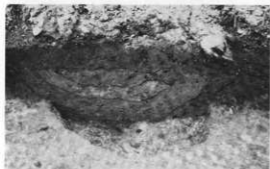


方形周溝跡 断面



周溝 断面

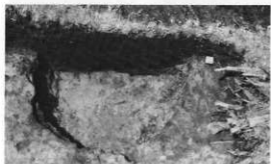
写真図版31 円形周溝跡、方形周溝跡



D-10土坑



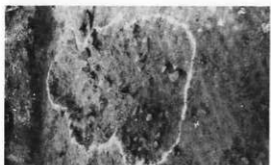
D-11土坑



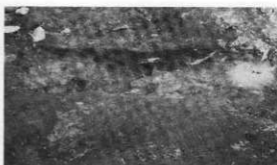
D-17土坑



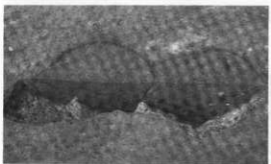
B-36土坑



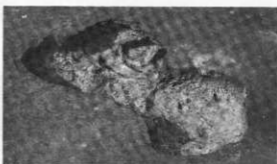
B-43土坑 全景



B-43土坑 烧土断面

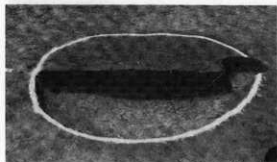


H-59-d 土坑 断面

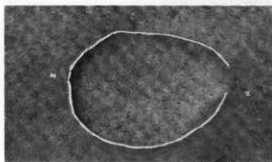


H-59-d土坑 全景

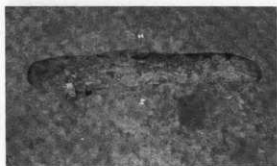
写真図版32 土坑 (1)



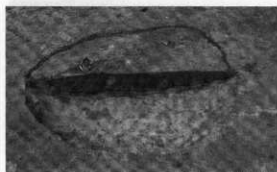
G-60-k 土坑 断面



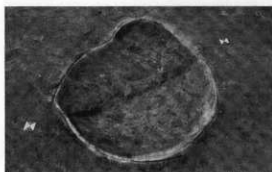
G-60-k 土坑 全景



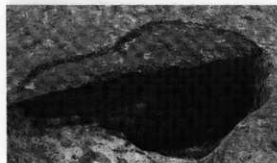
G-60-m 土坑



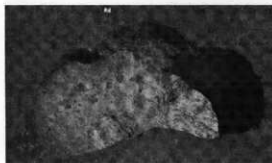
G-60-o 土坑 断面



G-60-o 土坑 全景

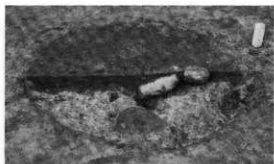


G-60-p 土坑 断面

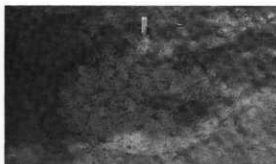


G-60-p 土坑 全景

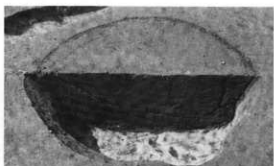
写真图版33 土坑 (2)



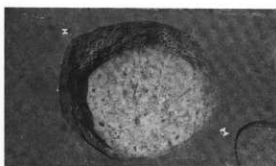
G-61-i 土坑 断面



G-61-i 土坑 全景



H-61-b 土坑 断面



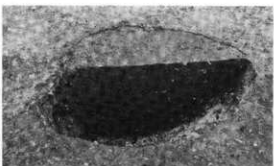
H-61-b 土坑 全景



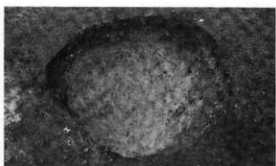
G-62-p 土坑 断面



G-62-p 土坑 全景



H-63-b 土坑 断面

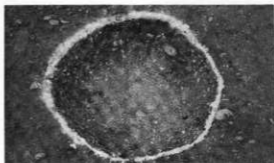


H-63-b 土坑 全景

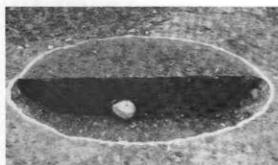
写真图版34 土坑 (3)



H-63-i 土坑 断面



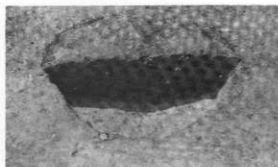
H-63-i 土坑 全景



H-63-i 土坑 断面



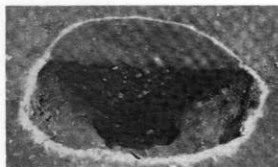
H-63-i 土坑 全景



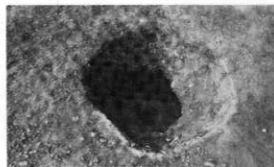
G-63-i 土坑



D-18 陷L穴

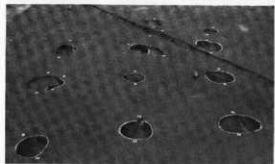


H-63-d 陷L穴 断面



H-63-d 陷L穴 全景

写真図版35 土坑(4) 陷L穴状遺構



G-61-o 建物跡 (西から)



G-62-1 建物跡 (南から)



G-61-o (南東から)



A-37焼土 全景



A-37焼土 断面

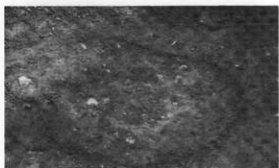


B-44-e 焼土 全景



B-44-e 焼土 断面

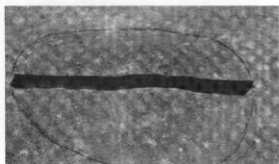
写真図版36 掘立柱建物跡、焼土 (1)



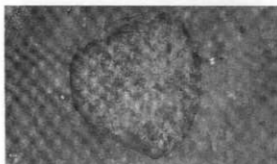
B-44-k 烧土 全景



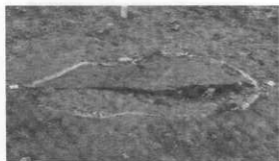
B-44-k 烧土 断面



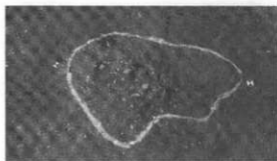
H-62-a 烧土 断面



H-62-a 烧土 全景



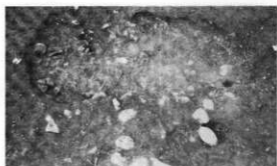
H-63-b 烧土 断面



H-63-b 烧土 全景



B-45 炭窟 断面



B-45 炭窟 全景

写真图版37 烧土(2)、炭窟



現 状 (東南から)



表土除去後 (西から)



表土除去後 (南から)



表土除去後 (北西から)



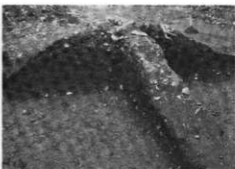
礎面まで (西から)



南北断面 (西から)

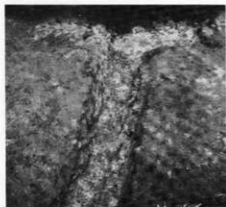


東西断面 (南から)



南北断面 (北西から)

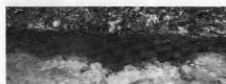
写真図版38 A-39塚



D-11 溝



D-17 溝



土層断面



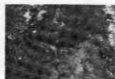
D-19 溝



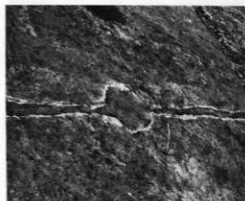
B-31-b 溝



B-31-b 溝 断面



B-31-c 溝 断面



B-31-c 溝

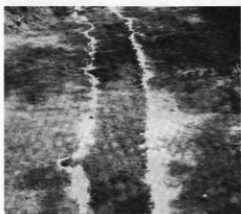
写真図版39 溝 (1)



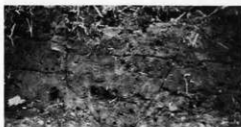
B-32溝 (西から)



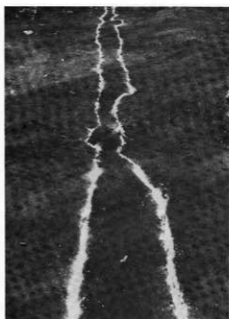
土層断面



B-42溝 (東側)



土層断面



B-42溝 (西側)



B-35溝 (東から)

写真図版40 溝 (2)



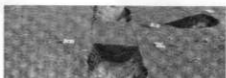
H-59-b 溝 (西から)



H-60-b 溝 (東から)



土層断面



土層断面

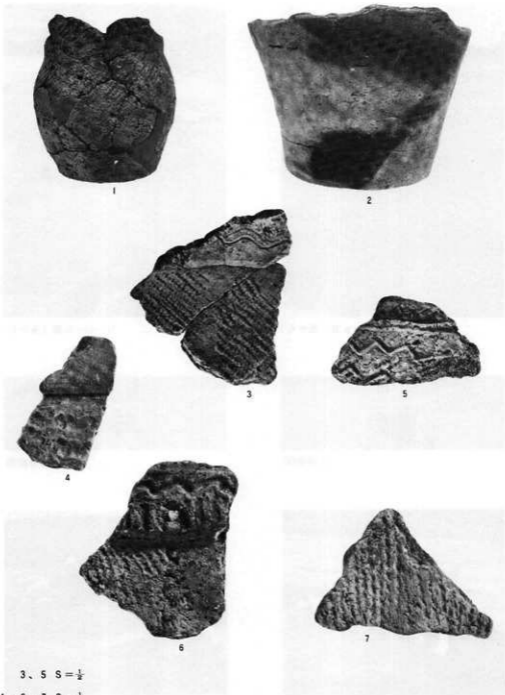


調査風景

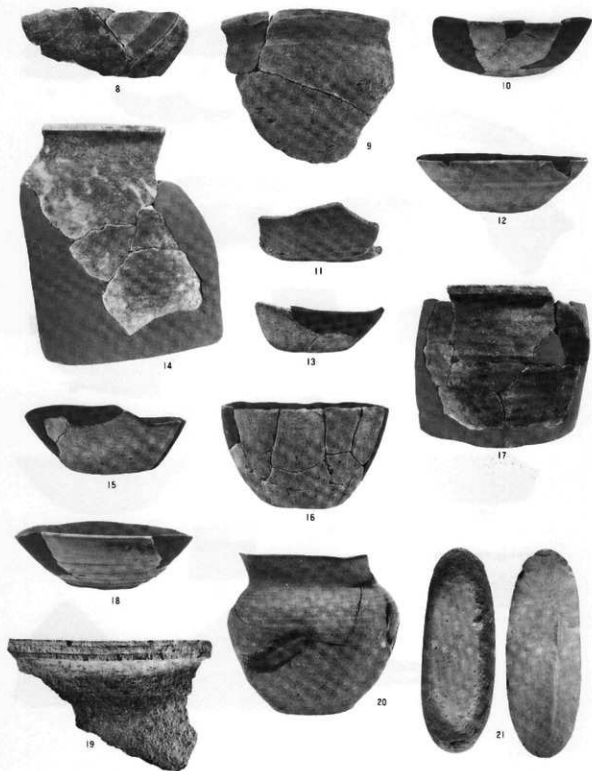


調査風景

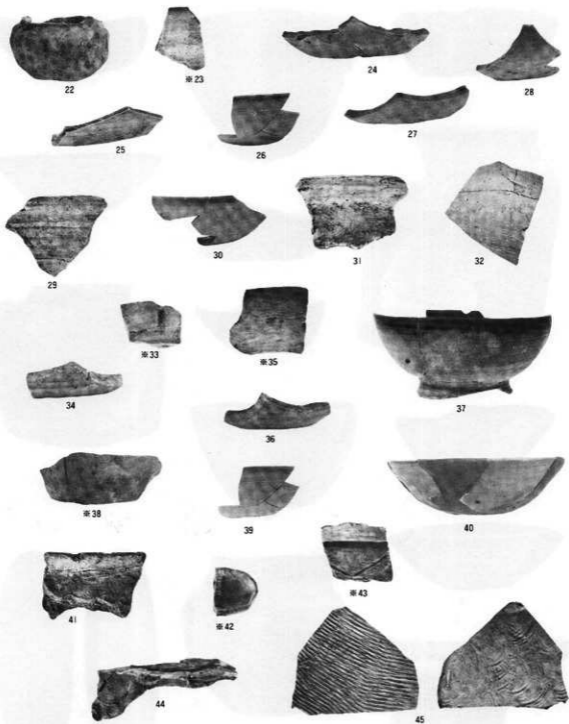
写真図版41 溝 (3)



写真図版42 H-62-a 住居跡 (遺物)

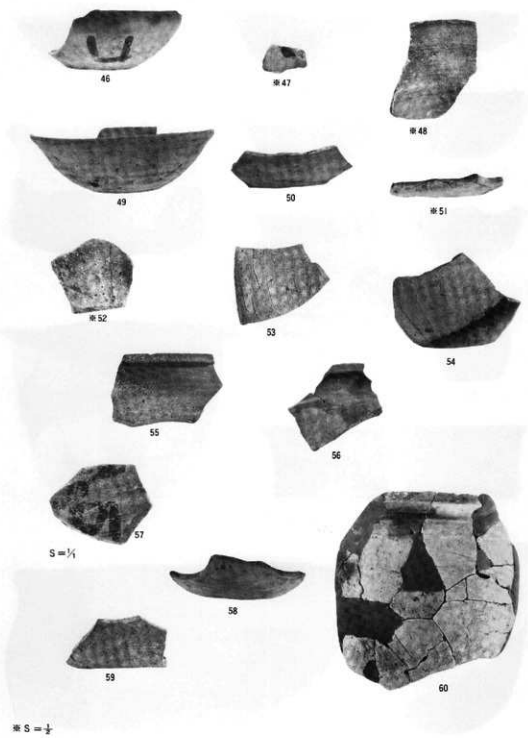


写真図版43 C-3住居跡（遺物）

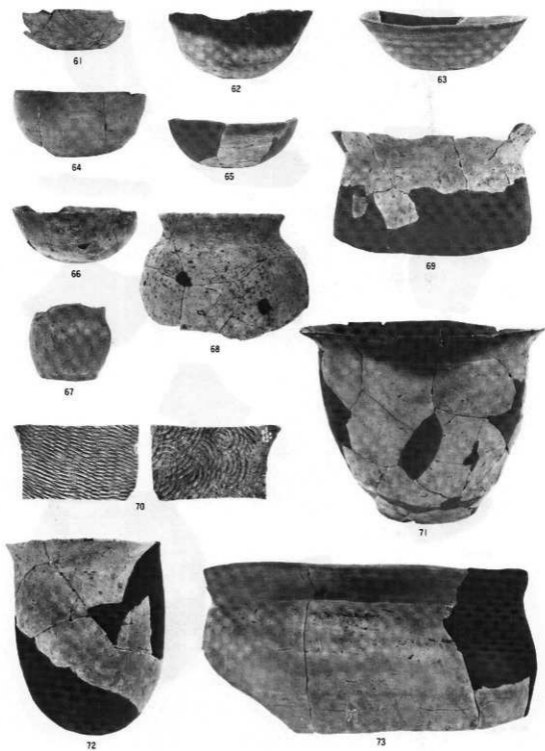


* S = $\frac{1}{2}$

写真図版44 D-6住居跡状遺構、D-10住居跡（遺物）



写真図版45 D-11住居跡、D-11住居跡状遺構、D-15住居跡（遺物）



写真図版46 B-36住居跡（遺物）



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84

写真図版47 B-41-c 住居跡 (遺物 I)



85



86



87



88



90

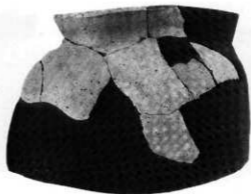


89

写真図版48 B-41-c 住居跡 (遺物 2)



91



93a



93b



94



92

S = 1/2



95



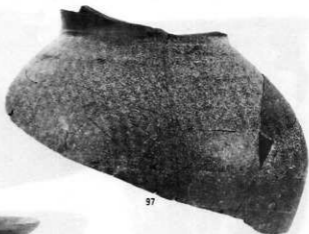
96

写真図版49 B-41-c 住居跡 (遺物 3)



379

S = 1/2



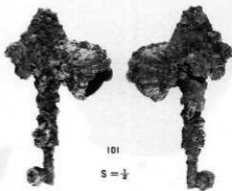
97



98



99

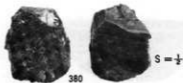


101

S = 1/2



100



380

S = 1/2

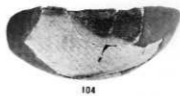
写真図版50 B-41-c 住居跡 (遺物 4)



102



103



104



105



106



107



108



109



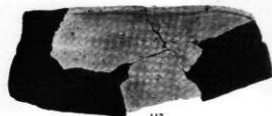
110



111



112



113



114

S = 1/2



381

S = 1/2

写真図版51 B-41-h住居跡(遺物)



115



116



117



118



119



120



121



122



124



123



125

写真図版52 B-43住居跡（遺物）



126



127



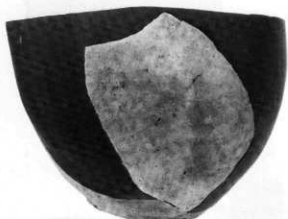
128



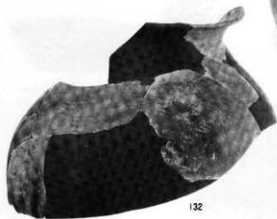
129



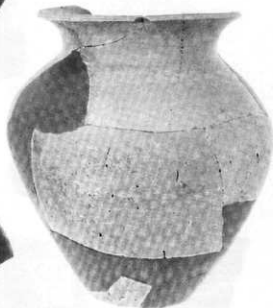
130



131



132



133

写真図版53 B-44-f 住居跡 (遺物)



134



135



137



136



※145



138



139



※140



141



142



143



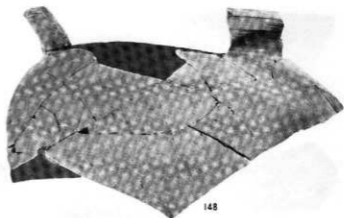
※144

※S=1/2

写真図版54 B-44-g 住居跡 (遺物)



146



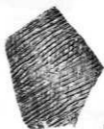
148



149



147

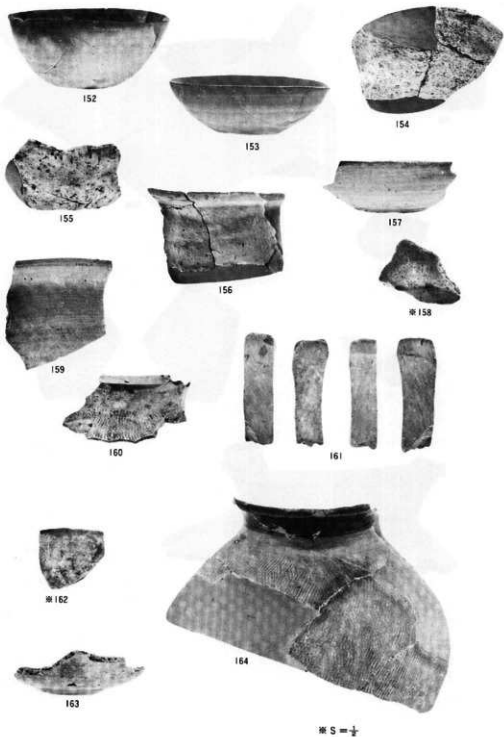


150

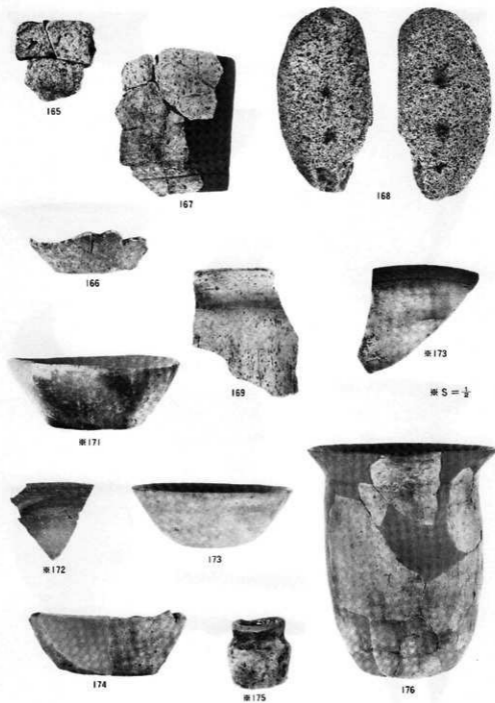


151

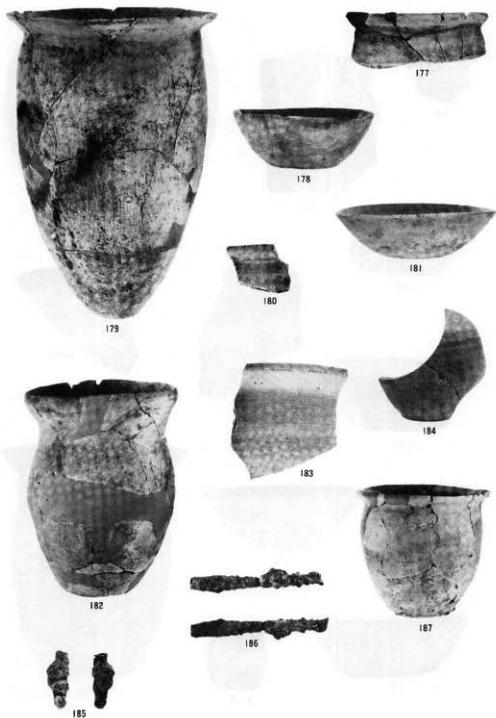
写真図版55 B-44-j 住居跡 (遺物)



写真図版56 G-59-p住居跡、G-60-h住居跡（遺物）



写真図版57 G-60-h住居跡、G-60-i住居跡、G-60-m住居跡（遺物）



写真図版58 G-60-m住居跡、G-60-p住居跡（遺物）



188



189 S = 1/2



190



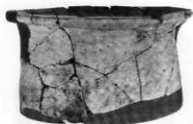
191



192



193



194



195



197



196



199



200

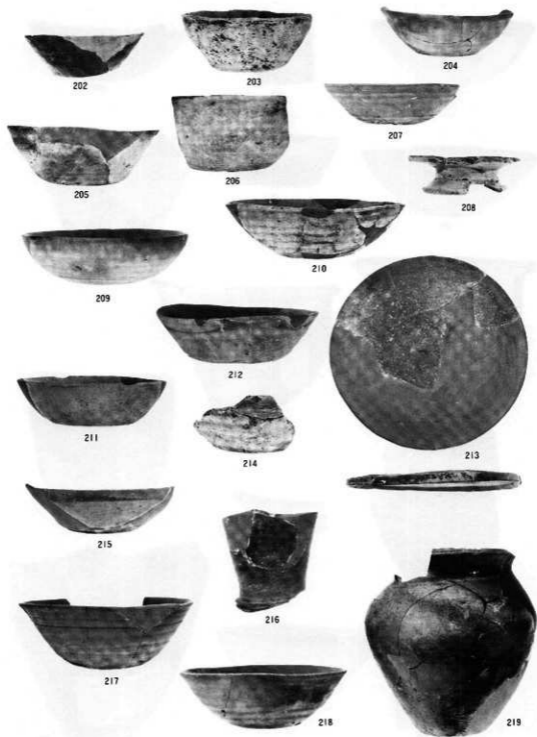


198

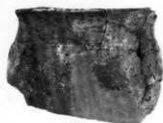


201

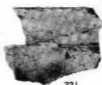
写真図版59 H-60-c 住居跡



写真図版60 G-61-1 住居跡（遺物Ⅰ）



220



221



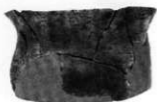
222



223



225



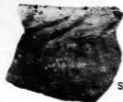
224



227

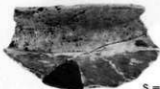


226



S = $\frac{1}{2}$

228



S = $\frac{1}{2}$

229

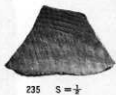


230

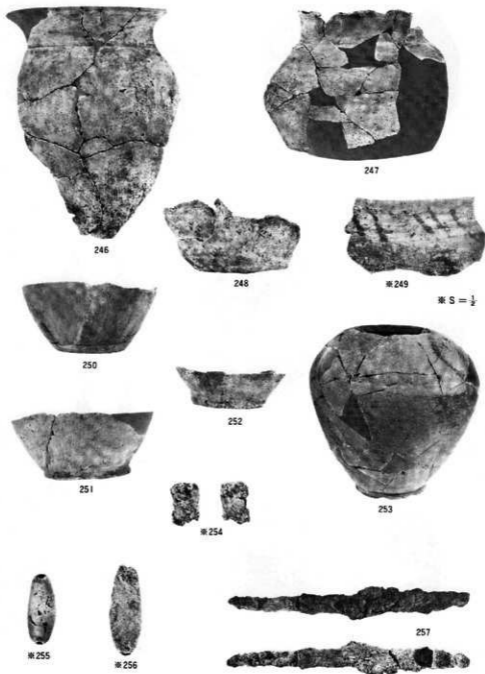


231
S = $\frac{1}{2}$

写真図版61 G-61-1 住居跡 (遺物 2)



写真図版62 H-60-1 住居跡、H-61-b 住居跡、
H-61-h 住居跡、G-62-o 住居跡 (遺物)



写真図版63 G-62-o 住居跡 (遺物 2)



※ 258



259



260

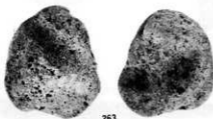


※ 261



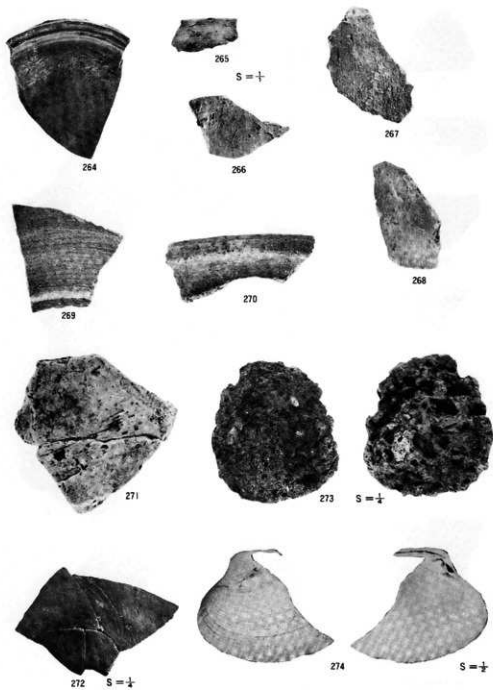
※ 262

※ S = $\frac{1}{2}$

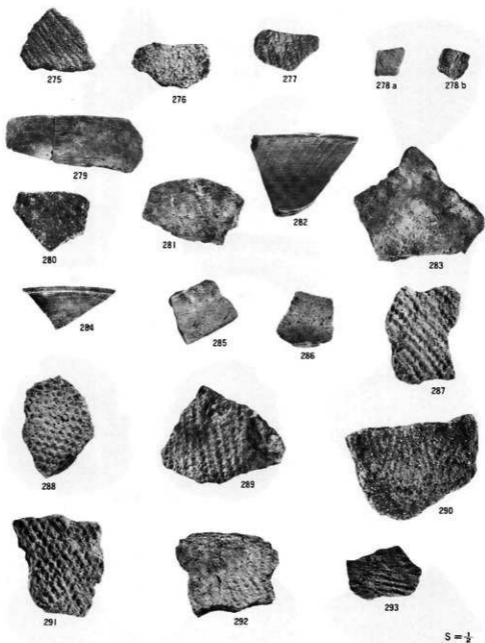


263

写真図版64 G-62-o 住居跡 (遺物 3)



写真図版65 G-59-g 方形周溝跡、B-36土坑、B-43土坑（遺物）

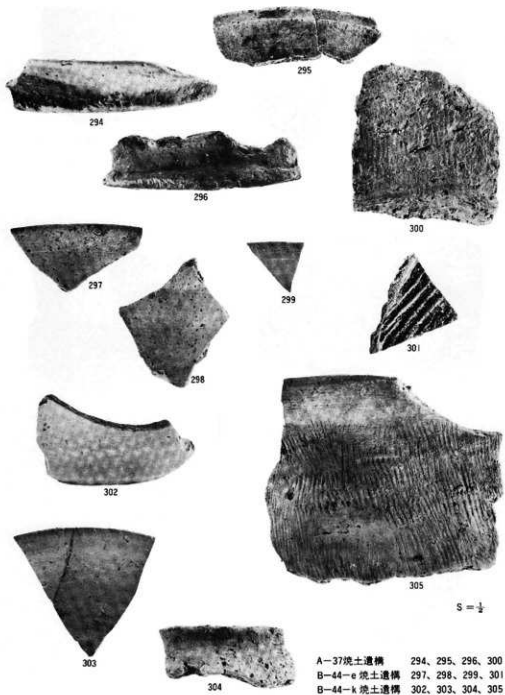


H-59-d 土坑 275-277
 G-60-m 土坑 278 a、b
 G-60-o 土坑 279-283

G-61-i 土坑 284、285
 H-61-b 土坑 286
 G-62-p 土坑 287-289

H-63-b 土坑 290
 H-63-i 土坑 291
 H-64-i 土坑 292、293

写真图版66 土坑 (2)



A-37 烧土遺構 294、295、296、300
 B-44-e 烧土遺構 297、298、299、301
 B-44-k 烧土遺構 302、303、304、305

写真図版67 A-37烧土遺構、B-44-e 烧土遺構、B-44-k 烧土遺構 (遺物)



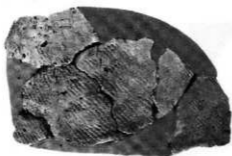
※ 306



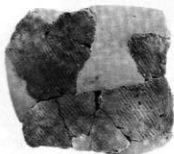
※ 307



308



309



310

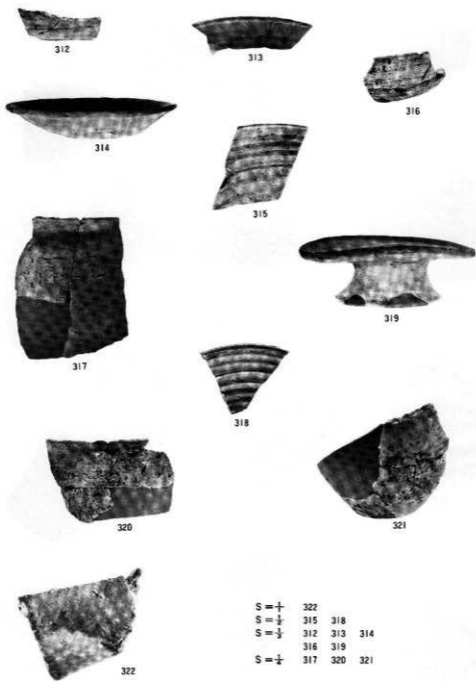


311

S = $\frac{1}{2}$

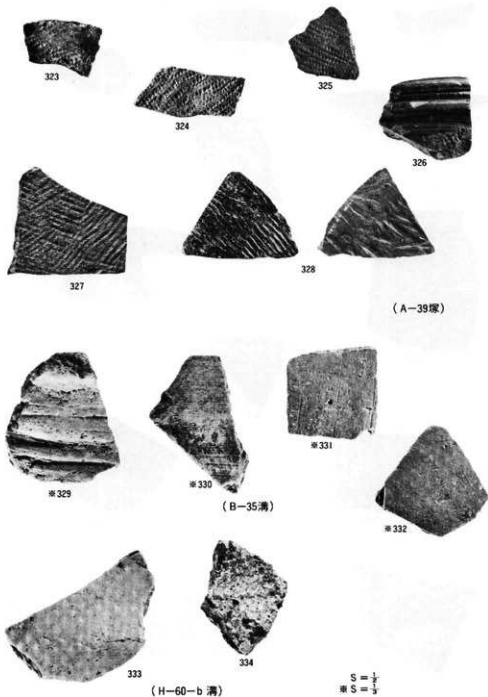
※ S = $\frac{1}{2}$

写真図版68 H-62-a 焼土 (遺物)

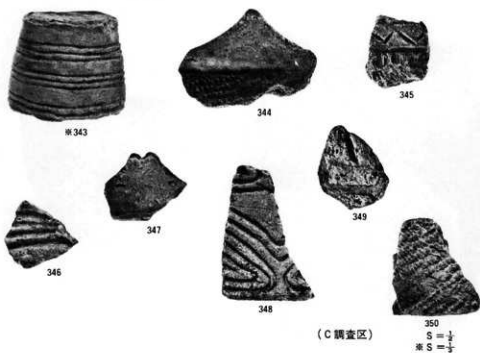
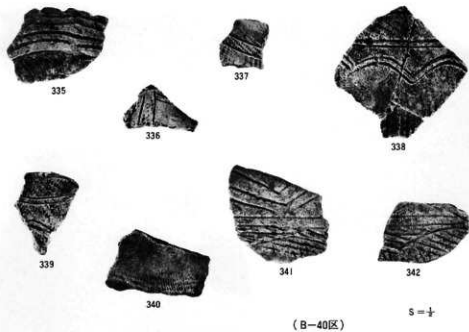


S = +	322		
S = 1/2	315	318	
S = 1/3	312	313	314
	316	319	
S = 1/4	317	320	321

写真図版69 H-63-b 焼土、B-45炭窯（遺物）



写真図版70 A-39塚 B-35溝 H-60-b溝 (遺物)



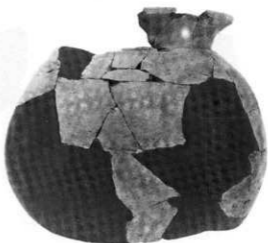
写真図版71 遺構外出土遺物 (B-40、C調査区)



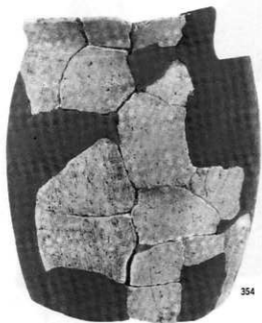
351



352



353



354



355

写真図版72 遺構外出土遺物 (C-26)



355



358



357



359



361



360 S = $\frac{1}{2}$

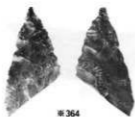


362 S = $\frac{1}{2}$



363

写真図版73 遺構外（土器3）



※ 364



※ 365



366



367



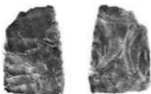
368



369



370



371



372

S = $\frac{1}{2}$
※ S = $\frac{1}{4}$

写真図版74 遺構外(石器)



※373



376



374



※375



377



※378

※ S = 十
他 S = 寸

写真図版75 遺構外(石器2)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第176集

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

北上地区広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 社 陵 印 刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (0196) 41-8000㉿
